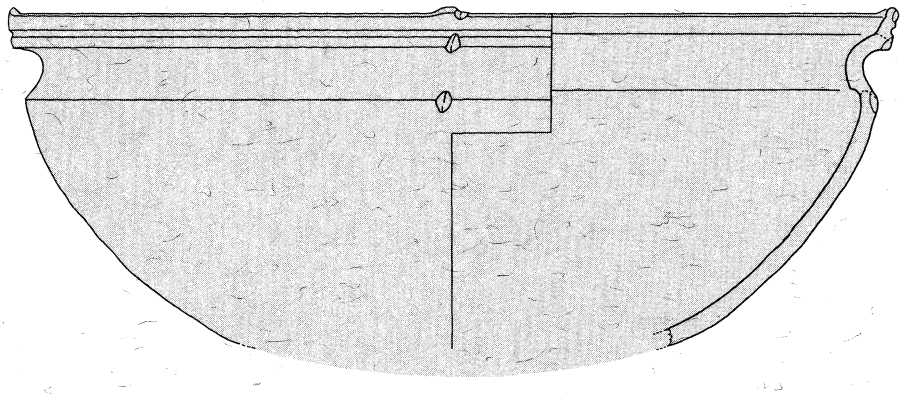
宮地前遺跡



1988

別府大学付属博物館

宮　地　前　遺　跡

— 大分県大野郡大野町 —

1 9 8 8

別府大学付属博物館

目　　次

1章　立　地 …… 3
　1．歴史的環境 …… 3
2章　調　査 …… 5
3章　層　位 …… 8
　1．基本層序 …… 8
　2．土層の対比 …… 11
4章　遺物の遺存状況 …… 13
　1．旧石器時代 …… 13
　2．縄文・弥生時代 …… 16
5章　旧石器時代の石器群 …… 22
　1．出土遺物 …… 22
　2．表採遺物 …… 27
6章　縄文時代の遺物 …… 31
　1．土　器 …… 31
　2．土製品 …… 46
　3．石　器 …… 47
7章　弥生時代の遺物 …… 62
　1．土　器 …… 62
8章　平安博物館調査地点の先土器時代石器群 …… 71
9章　まとめ …… 82

挿図目次

第1図　大野川流域の地形と宮地前遺跡 …… 3
第2図　宮地前遺跡周辺の遺跡分布図 …… 4
第3図　ほ場整備以前の地形と平安博物館の調査区位置図 …… 5
第4図　ほ場整備後の地形と別府大学による調査区位置図 …… 6
第5図　調査区（グリッド）配置図と土層断面図の位置 …… 7
第6図　宮地前遺跡土層柱状図 …… 8
第7図　各調査区（グリッド）土層断面図 …… 9・10
第8図　土層対比図 …… 12
第9図　旧石器時代遺物の分布状況（H-9） …… 14
第10図　土層断面と旧石器時代遺物の垂直分布（H-9、東より投影） …… 15
第11図　旧石器時代遺物の分布状況（J-8、J-9、J-10） …… 17・18
第12図　土層断面と旧石器時代遺物の垂直分布（J-8、J-9、J-10、北より投影） …… 19・20
第13図　遺構平面図（J-8） …… 21
第14図　旧石器時代遺物実測図 …… 23
第15図　旧石器時代遺物実測図 …… 25
第16図　旧石器時代遺物実測図 …… 26
第17図　旧石器時代遺物実測図 …… 27
第18図　表採遺物実測図 …… 29
第19図　表採遺物実測図 …… 30
第20図　縄文土器実測図 …… 32
第21図　縄文土器実測図 …… 33

第22図　縄文土器実測図 …… 34
第23図　縄文土器実測図 …… 35
第24図　縄文土器実測図 …… 36
第25図　縄文土器実測図 …… 37
第26図　縄文土器実測図 …… 38
第27図　縄文土器実測図 …… 39
第28図　縄文土器実測図 …… 40
第29図　縄文土器実測図 …… 41
第30図　縄文土器実測図 …… 42
第31図　縄文土器実測図 …… 43
第32図　土製品実測図 …… 47
第33図　打製石斧実測図 …… 52
第34図　打製石斧実測図 …… 53
第35図　打製石斧実測図 …… 54
第36図　横刃形石器・ノミ形石器・礫器実測図 …… 55
第37図　２次加工剝片・石鏃実測図 …… 56
第38図　安山岩製の剝片実測図 …… 56
第39図　敲石類実測図 …… 57
第40図　石皿実測図 …… 58
第41図　刀剣形石製品・管玉実測図 …… 59
第42図　表採遺物実測図 …… 60
第43図　弥生土器実測図 …… 63
第44図　弥生土器実測図 …… 64
第45図　弥生土器実測図 …… 65
第46図　弥生土器実測図 …… 66
第47図　弥生土器実測図 …… 67
第48図　弥生土器実測図 …… 68
第49図　I-7区東壁土層断面図 …… 71
第50図　I-7区石器・礫分布図 …… 72
第51図　先土器時代石器実測図 …… 74
第52図　先土器時代石器実測図 …… 75
第53図　先土器時代石器実測図 …… 77

図表目次

表１　旧石器時代遺物の出土深度 …… 13
表２　旧石器時代遺物の層序別組成表（第２・３次調査） …… 16
表３　細石刃の長幅比グラフ …… 24
表４　旧石器時代遺物観察表 …… 24
表５　旧石器時代遺物観察表 …… 28
表６　旧石器時代遺物観察表（表採遺物） …… 28
表７　縄文土器観察表 …… 43
表８　縄文土器観察表 …… 44
表９　縄文土器観察表 …… 45
表10　土製品観察表 …… 46
表11　第１次調査における層序別石器組成表 …… 48

表12　第２次調査における層序別石器組成表 …… 48
表13　第３次調査における層序別石器組成表 …… 48
表14　打製石斧の長幅比グラフ …… 48
表15　縄文時代の石器観察表 …… 59
表16　縄文時代の石器観察表 …… 61
表17　表採遺物の観察表 …… 61
表18　弥生土器観察表 …… 64
表19　弥生土器観察表 …… 66
表20　弥生土器観察表 …… 68
表21　Ｉ-７区出土遺物一覧表（平安博物館調査） …… 80・81

図版目次

図版１　(1)　調査区遠景（南より） …… 87
　　(2)　調査区遠景（北より） …… 87
図版２　(1)　遺物の出土状況（Ｈ-16グリッド） …… 88
　　(2)　遺物の出土状況（Ｈ-９グリッド） …… 88
図版３　(1)　Ｊ-８・９グリッド土層断面 …… 89
　　(2)　Ｊ-10グリッド土層断面 …… 89
図版４　(1)　旧石器時代の遺物（細石刃） …… 90
　　(2)　旧石器時代の遺物（スクレイパー、使用痕剥片） …… 90
図版５　(1)　旧石器時代の遺物（台石） …… 91
　　(2)　旧石器時代の遺物（剥片） …… 91
図版６　(1)　旧石器時代の遺物（表採遺物） …… 92
　　(2)　旧石器時代の遺物（表採遺物） …… 92
図版７　(1)　縄文土器（早期・後期） …… 93
　　(2)　縄文土器（晩期） …… 93
図版８　(1)　縄文土器（晩期） …… 94
　　(2)　縄文土器（晩期） …… 94
図版９　(1)　縄文土器（晩期） …… 95
　　(2)　土製品（土偶・紡錘車） …… 95
　　(3)　粘土塊 …… 95
図版10　(1)　縄文時代の石器（打製石斧） …… 96
　　(2)　縄文時代の石器（打製石斧） …… 96
図版11　(1)　縄文時代の石器（打製石斧） …… 97
　　(2)　縄文時代の石器（横刃形石器・礫器） …… 97
図版12　(1)　縄文時代の石器（石鏃・２次加工品） …… 98
　　(2)　縄文時代の石器（安山岩製の剥片） …… 98
図版13　(1)　縄文時代の石器（敲石類） …… 99
　　(2)　縄文時代の石器（石皿） …… 99
図版14　(1)　縄文時代の石器（刀剣形石製品・管玉） …… 100
　　(2)　縄文時代の石器（表採遺物） …… 100
図版15　(1)　弥生土器 …… 101
　　(2)　弥生土器 …… 101
図版16　(1)　弥生土器 …… 102

はじめに

大分県のほぼ中央を東流する大野川の流域は，先史時代から人々の主要な生活の舞台となっている所である。

別府大学付属博物館では，昭和54年から博物館の研究活動の１つとして『大野川流域における先史時代の調査研究』をテーマに，継続的な調査活動を継続している。この宮地前遺跡の発掘調査もその一貫として実施されたものである。

宮地前遺跡の学術調査は，昭和48年，平安博物館によって行われ多大な成果を挙げており，宮地前遺跡は当地域の縄文時代晩期および細石器文化の遺跡として重要視されている。

宮地前遺跡の周辺地域は，昭和50年代の初めに大規模なほ場整備事業が実施され，それ以前と同様に，畑地で，縄文・弥生時代，さらに旧石器時代の遺物が数多く採集された。

別府大学付属博物館で継続的に行っていた大野原台地一帯の分布調査で，この宮地前遺跡周辺についても数度の表面採集を実施した。その後，遺跡の広がり，文化層の層位的な把握などを目的に試掘および２回の本調査を行ったのである。

この調査では，ほ場整備事業による削平や盛り土，さらに土地所有者の作付けなどの関係で，宮地前遺跡の台地全体におよぶ遺物包含層の確認までには至らなかった。その意味では，さらに試掘調査や本調査を継続的に実施する必要のあることを痛感している。今回の調査によって，今後の宮地前遺跡調査の新たな指針を得ることができたので，機会を作り再度調査を試みたい。

1章　立　　地

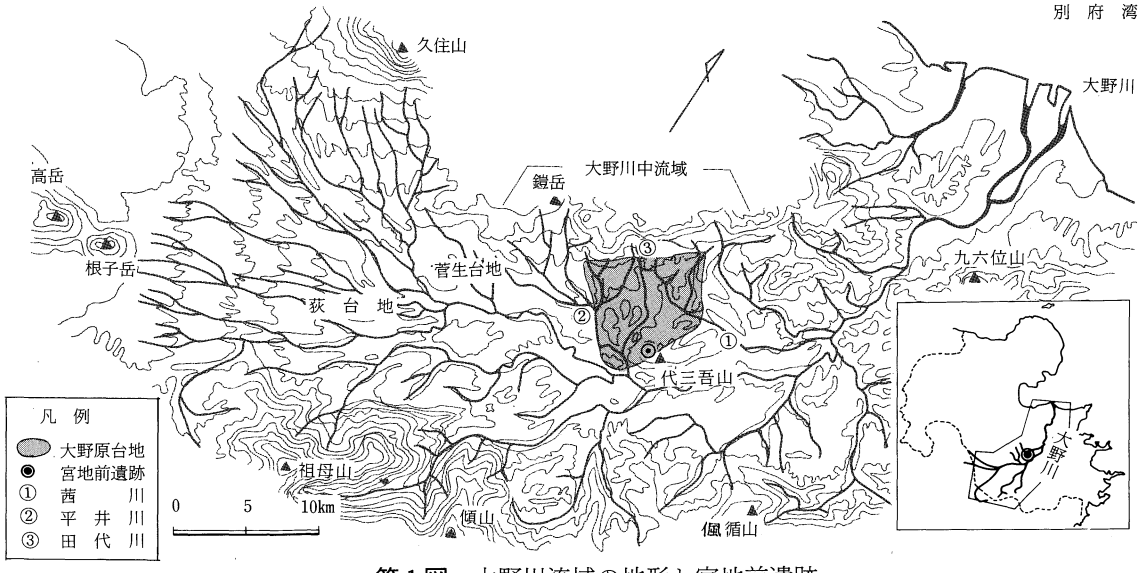
大野川中流域の北側に位置する大野町は，その南半分に標高200～300mの凝灰岩台地が開けており，一般に「大野原」あるいは「大野原台地」と呼ばれている。この一帯は阿蘇山の噴火活動に伴う火砕流堆積物（A_{so}-4）が大野川の本流や支流により侵食されており，複雑な舌状台地が展開している。この台地上には火山起源による降下堆積物（テラフ）が厚く堆積している。（第1図）

大野原台地は茜川水系の北東部と平井川水系の南西部に大別できる。宮地前遺跡は平井川の支流である田代川の東側の台地に立地しており，その標高は約250mである。遺跡の所在地は大分県大野郡大野町大字片島字宮地前である。（第2図）

1. 歴史的環境

ここでは，宮地前遺跡の周辺に所在する旧石器時代から弥生時代の遺跡・遺物について簡単に触れてみる。

旧石器時代の遺跡では，駒方古屋遺跡第1・2地点（別府大学による調査）からはナイフ形石器やスクレイパーなどを含む，AT下位の石器群が出土し，松木遺跡（大分県教育委員会による調査）からはナイフ形石器や三稜尖頭器，片島道下遺跡（別府大学による調査）からはナイフ形石器や台形様石器，今峠遺跡（別府大学による調査）からは小形で幾何形をしたナイフ形石器や台形様石器などが出土している。旧石器時代の遺跡は，標高200～300mの大野原台地のほぼ全域に認められ，その数は発掘調査・試掘調査ならびに分布調査の結果，50個所を超えている。遺跡は特に

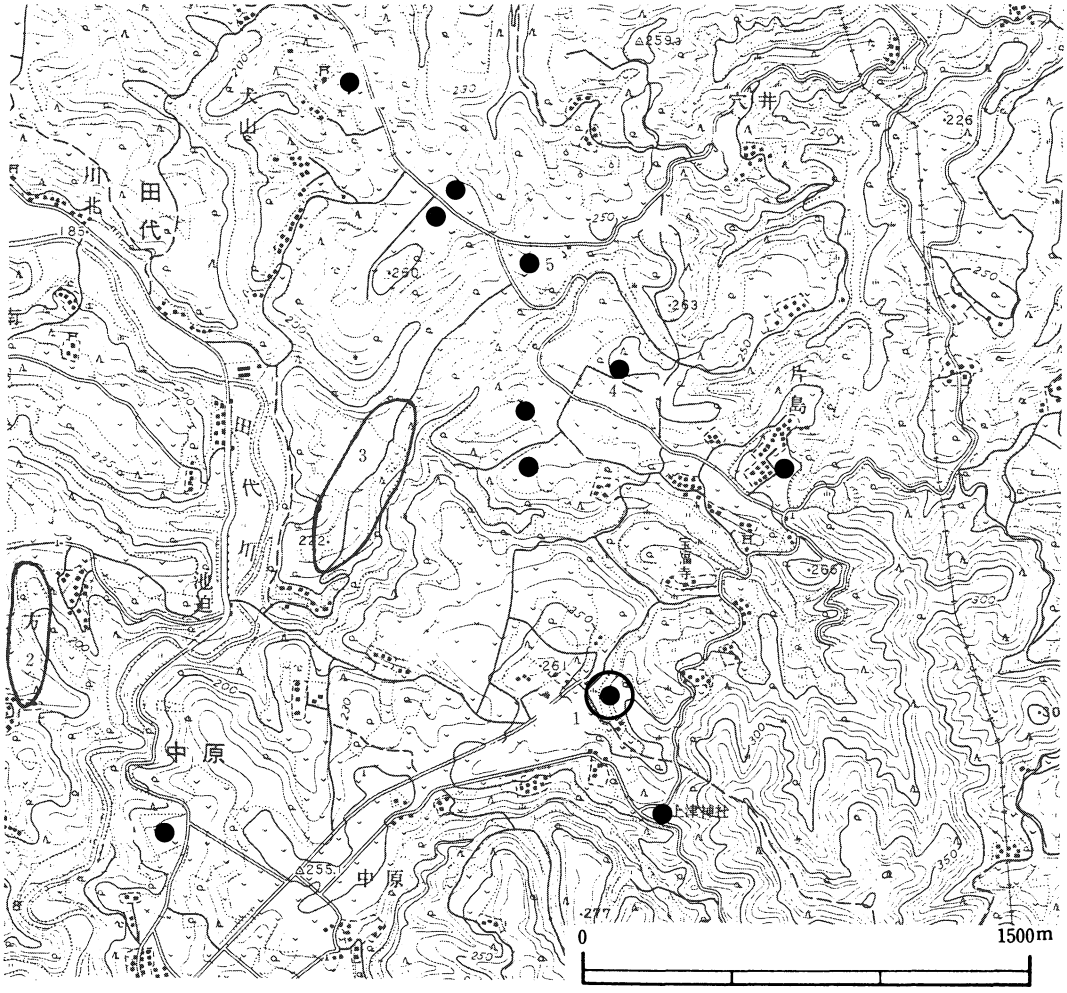


第1図　大野川流域の地形と宮地前遺跡

田代川を挟んで，その東西の両台地に集中する傾向がうかがえる。

次に縄文時代の遺跡としては，後期後半の三万田式土器単純期である駒方遺跡C地点（大分県教育委員会による調査）が挙げられる。出土遺物は土器のほか，偏平打製石斧・石包丁形石器・十字形石器・土偶の頭部などである。また，駒方遺跡B地点（大分県教育委員会による調査）出土のいわゆる刻目突帯文土器は当該地域における縄文時代から弥生時代への過渡的な様相を示していると思われる。

弥生時代の遺跡では，後期の集落遺跡である松木遺跡が挙げられる。この遺跡からは，安国寺式（壺）や大野川上・中流に特有の粗製甕と呼ばれる土器のほか，鉄器類，方格規矩鏡片が出土している。

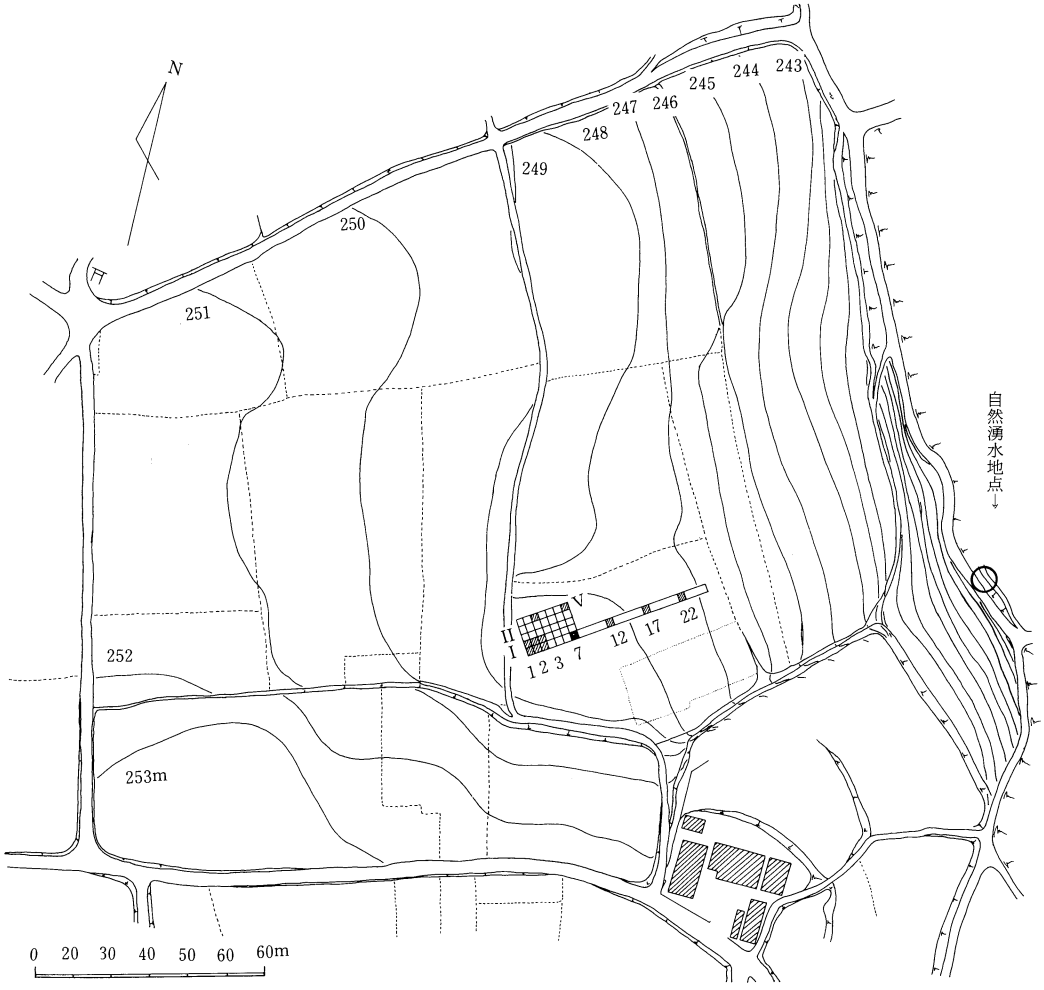


第2図　宮地前遺跡周辺の遺跡分布図　1.宮地前遺跡　2.駒方遺跡　3.松木遺跡　4.片島道下遺跡　5.今峠遺跡
●は旧石器時代の遺跡である。

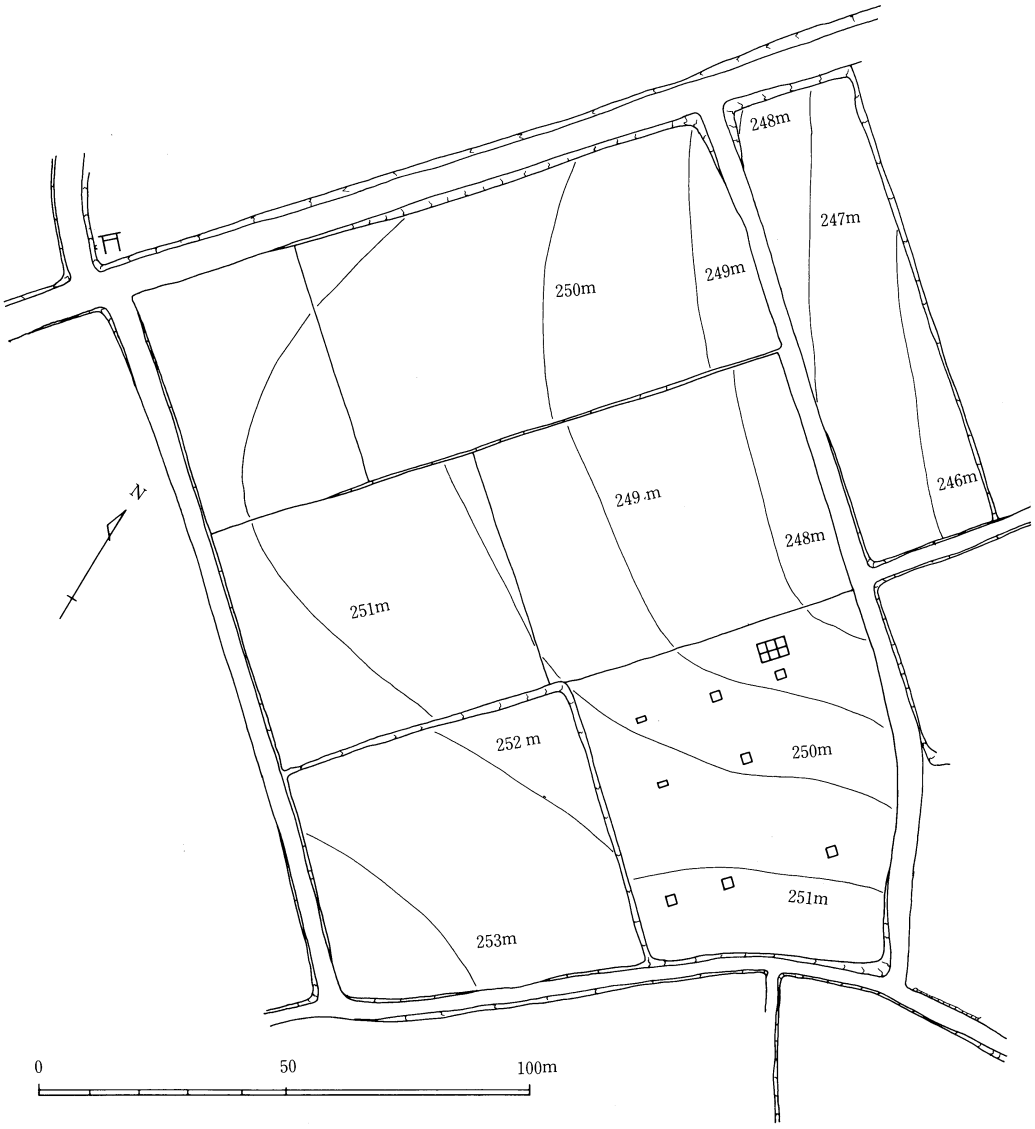
2章　調　　査

宮地前遺跡が所在するこの一帯の台地は，昭和40年代から，偏平打製石斧を始め縄文時代晩期土器片，それに流紋岩製の石片などが表面に露出し，地元の研究者や高校生などによって，盛んに表面採集が行われていた。

この宮地前遺跡の最初の学術発掘調査は，昭和48年，平安博物館によって実施された。この調査では，台地西側の標高249mから247mにかけての緩斜面に調査区が設定された。この調査区において，縄文時代の晩期の遺物包含層が確認され，縄文時代晩期土器，偏平打製石斧などが出土し，さらに竪穴住居跡と考えられる遺構が検出されている。また1-7区では，ローム層上部において細石器の文化層が確認され，細石核・スクレイパーなど旧石器時代終末の細石器



第3図　ほ場整備以前の地形と平安博物館の調査区位置図



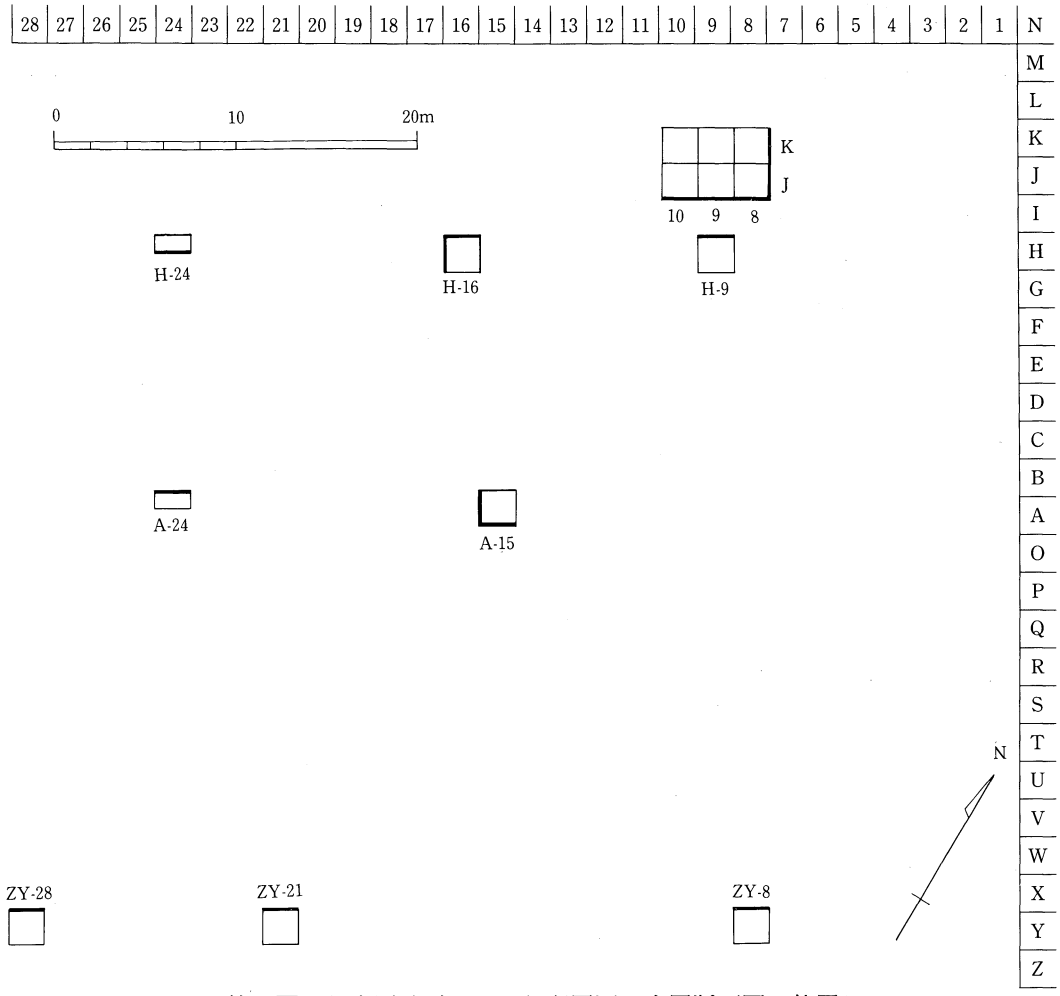
第4図　ほ場整備後の地形と別府大学による調査区位置図

文化の石器類が出土している。

宮地前遺跡のあるこの一帯は，昭和50年代の始めに大規模なほ場整備事業が実施され，それによって，台地の高い部分が削平され，その土は西側谷部に盛られ，道を新たに作るなどして，地形は以前と著しく変貌している。そのため，地形測量図から平安博物館の調査グリッドを正確におさえる事が困難なほど変化している。

このほ場整備事業によって，弥生時代・縄文時代の文化層の一部がこわされており，表面に今まで以上に遺物が露出していた。

別府大学付属博物館では，昭和55年から数度にわたる表面調査を実施して，遺物の収集に努めた。



第5図　調査区（グリッド）配置図と土層断面図の位置

58年8月24日から26日までの第1次調査では，宮地前遺跡の台地全体における遺物包含層確認を目的に，まず，それまでに資料が採集されている範囲のもっとも北側の標高251mの平坦地に，西側からZY-8・ZY-21・ZY-28の3つの2×2mの調査グリッドを設定し，文化層の確認と土層の堆積状況を観察した。

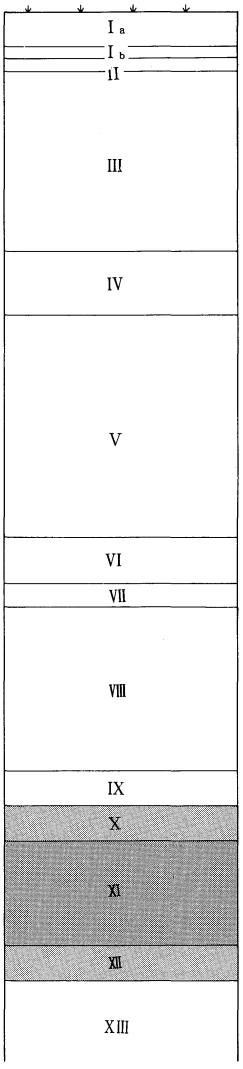
その結果，ZY-8ではローム層上部の耕作土・黒色土の堆積は非常に薄く，しかも遺物は全く出土しなかった。東側のZY-28は厚い堆積が見られ，弥生・縄文の遺物が若干出土したが，文化層の状況は良くなかった。

昭和59年11月7日から12日に6日間第2次調査を実施した。第1次調査区の約20m北側に2×2mのA-15と2×1mのA-24の2つの調査区と，さらに約12m北側に2×2mのH-9・H-16，それに2×1mのH-24の3つの調査区をそれぞれ設け，土層の堆積状況および文化層の確認を行った。

A-15では縄文時代，H-9では地表下約2.3mに細石器の文化層が，さらにH-24では弥生時代の包含層がそれぞれ確認された。

第3次調査は昭和61年12月17日から12月30日までの15日間行った。H-9の直ぐ北側に4×6mのJ・K-8～10の調査区を設定した。ローム層の直上までに約2mの堆積が見られ，弥生・縄文の両時代の遺物が出土したが，両者の文化層は層位的に明確でない。ローム層の上部において，細石器・スクレイパーなど旧石器時代の遺物が発見されたがその数は多くなかった。

第3次調査および第2次調査のH-16・H-24は，昭和48年の平安博物館の調査区と隣接するものと推測されるが，調査区掘り込みは別府大学付属博物館の調査区では検出されなかった。



第6図　宮地前遺跡土層柱状図

3章　層　　位

1．基　本　層　序

宮地前遺跡は1970年代後半より畑地改善事業が行われ、削平や盛土などで地形・層位にそれ以前と大きく変化している。遺跡の立地からも，南から北への傾斜が著しく，第1次調査区および第3次調査区では，その堆積状況に大きな差異が見られた。

ここでは第3次調査区の土層断面を基本層位として表示しておく。

Ⅰa層　茶褐色土層　耕作土。

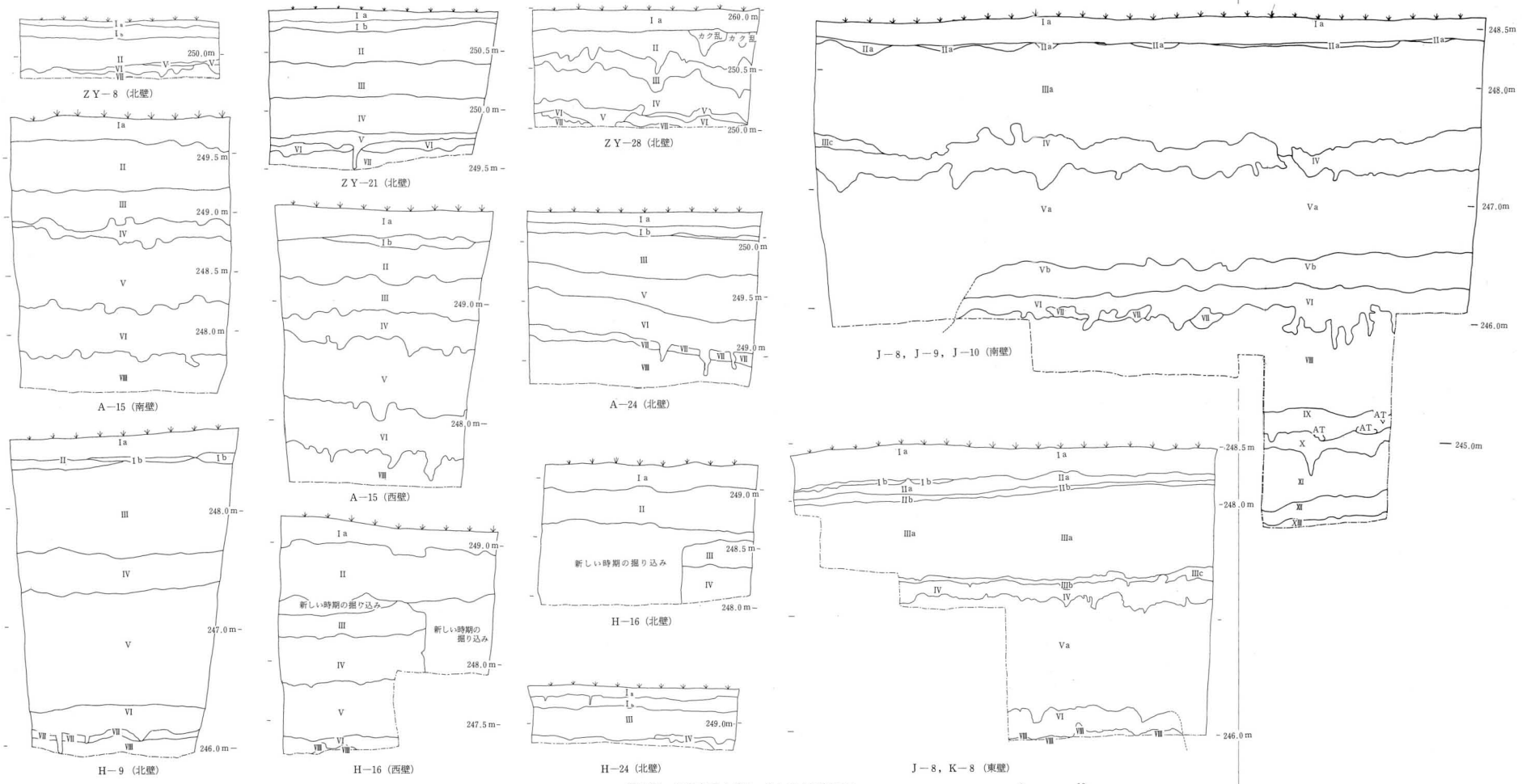
Ⅰb層　明黄褐色土層　わずかにブロック状に残るのみである。

Ⅱ層　黄褐色土層　やや硬質で，堆積状況は全体的に薄い。以上は畑地改造事業に伴う客土と考えられるものである。

Ⅲ層　暗褐色土層　客土が堆積される以前の旧耕作土と思われ，やや軟質である。また下位にいくに従い，粘質を帯びており，遺物が若干出土している。

Ⅳ層　黒褐色土層　軟質土層である。全体的に撹乱を受けており，Ⅴ層との境は，はっきりしない。縄文後・晩期，弥生中期の遺物を含む。

Ⅴ層　暗茶褐色土層　縄文時代遺物，弥生時代遺物主要包含層。大野原台地全体に認知されている遺物包含層で，宮地前遺跡でも平均50～70cm程度の堆積状況をみる。上部（Va層）は少し粘質で下部（Vb層）に下がるにつれ黒味を帯びてサクサクとしてくる。遺物は縄文・弥生時代遺物が混在し，上部に集中する。弥生時代遺物の方が比較的下位に包含されていることから撹乱をうけていると思われる。



第７図　各調査区（グリッド）の土層断面図

VI 層　暗黒褐色土層　V層より黒味を帯びて5 mm程度の暗茶褐色の粒子が混入する。ローム層との漸移層

VII 層　黄褐色土層　ソフトローム層と思われ軟質である。部分的にしか残存しない。

VIII 層　暗黄褐色土層　ハードローム層で硬質である。0.5 mm程度のオレンジ色と暗青色の粒子が多く混入している。旧石器時代遺物包含層である。なおJ-8グリッドで確認した遺構は，この層の上面で検出された。

IX 層　明黄色土層　姶良カルデラを起源とするAT（姶良丹沢火山灰）の風化土層と考えられる，サクサクした手ざわりである。駒方古屋遺跡においても確認されており，駒方古屋遺跡VI層と対比できるであろう。

X 層　暗黒褐色土層　XI層との漸移層と考えられる軟質土層である。

XI 層　暗黒色土層　ブラックバンドと呼称されているものである。上下の層との境は不明瞭である。

XII 層　暗黒褐色土層　XI層に比べ褐色を帯びるものでX層に類似する。

XIII 層　ローム層でやや粘性があり，全体的には軟質である。

2．土層の対比

ここでは第3次調査の基本層位と他の調査との土層対比を行う。

I（a・b）層　II（a・b）層と対比される層は，1次調査での第I（a・b）層，第2次調でのI（a・b）層である。

II（a・b）層　II層と対比される層は，第2次調査でのII層である。なお，II層はA-15グリッドとH-16グリッドに厚く堆積している。

III（a・b・c）層　III（a・b・c）層と対比される層は，平安博物館調査のI層，第1次調査のII層，第2次調査のIII層である。

IV層　IV層と対比される層は，平安博物館のII層，第1次調査のIII層，第2次調査のIV層である。

V（a・b）層　V（a・b）層と対比される層は，平安博物館調査のIII層，第1次調査のIV層，第2次調査のV層である。ただし，平安博物館調査のIII層は第3次調査のVI層を含むものと考えられる。理由として，第1次から第3次調査区のほぼ全域で第3次調査のVI層が検出されていることから平安博物館の調査区にも何らかの形でVI層が存在したと思われることと，平安博物館の発掘調査概報に記されている通り，III層は遺物の集中する上部とほぼ無遺物状態の下部に分れる傾向にあるからである。

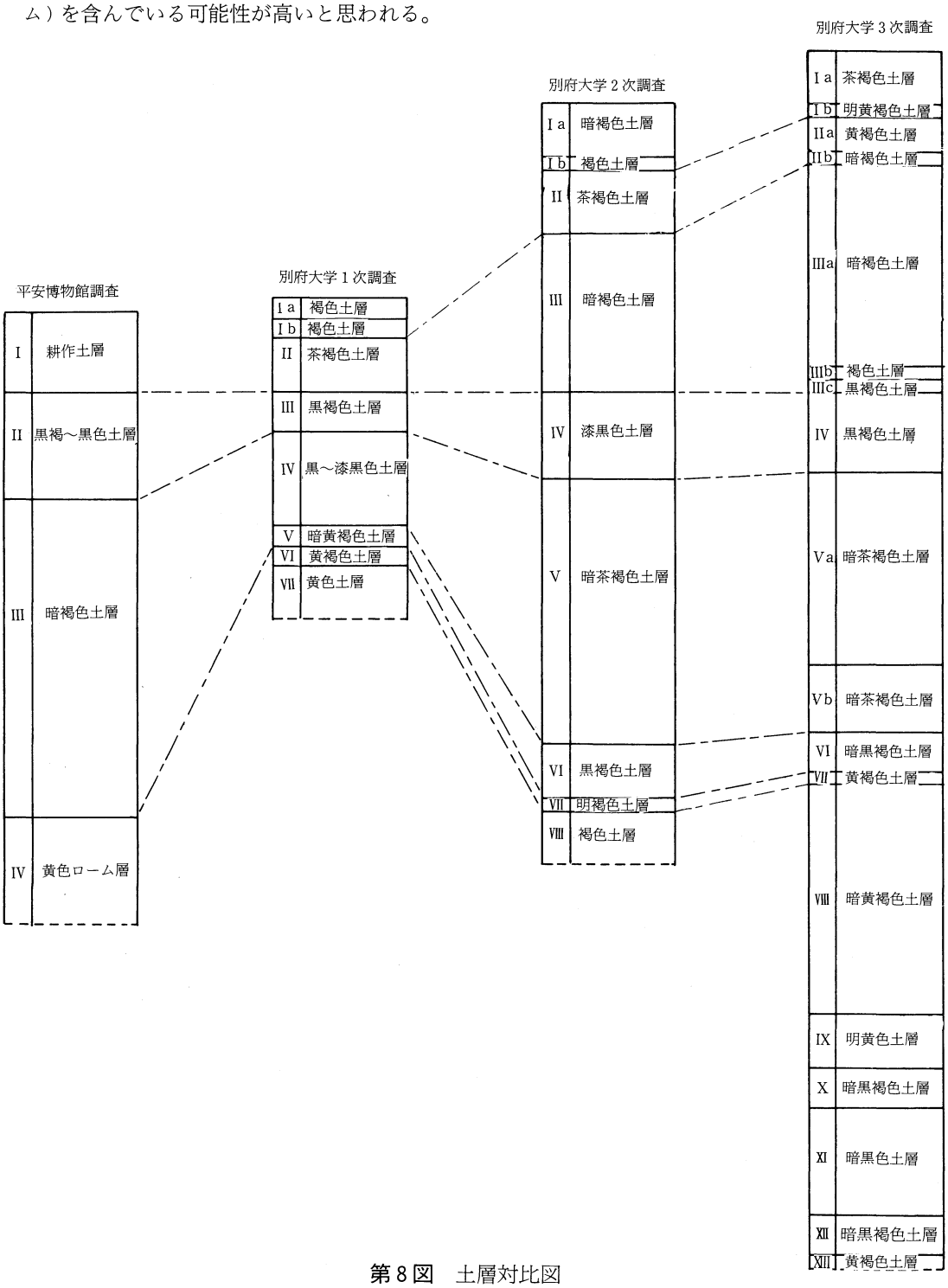
VI層　VI層と対比される層は，第1次調査のV層，第2次調査のVI層である。なお，平安博物館調査のIII層下部（無遺物状態の部分）はこれに相当すると思われる。

VII層（ソフトローム）　VII層と対比される層は，第1次調査のVI層，第2次調査のVII層である。

VIII層（ハードローム）　VIII層と対比される層は，平安博物館調査のIV層，第1次調査のVII層，第

2次調査のⅧ層である。

なお，平安博物館調査のⅣ層は細石器の出土状況から考えて，第3次調査のⅦ層（ソフトローム）を含んでいる可能性が高いと思われる。



第8図　土層対比図

4章　遺物の遺存状況

1．旧石器時代

遺物の垂直分布

宮地前遺跡の器種別垂直グラフでは，剝片と砕片のピークが標高245.951m～246.050mでとらえられる。遺物の出土深度は246.301m～246.601mと大きな幅が見られる。これは包含層の傾斜や包含層の厚さが一定でないこと，包含層からの2次的な遊離などが関係している。

宮地前遺跡の細石器文化の石器群は，第Ⅵ層の漸移層からⅧ層上部にかけての約40cmに集中して出土している。H-9•J-10グリッドでは台石と考えられるものが出土しており，両方ともⅧ層上部からである。細石刃も同じⅧ層上部より多く出土している。また大形のスクレイパーが1点出土しているが台石が出土したレベルよりわずかに下である。

また，本遺跡では，Ⅷ層中部に細石器文化とは異なるもう1つの石器群が考えられる。この石器群では，定型的な石器は出土していないが，出土した遺物のほとんどが縦長剝片である。石材は上部の石器群と同じ流紋岩であるが，石質は色・光沢・肌触りなどの点で異なり，種類も豊富であることなどからⅧ層上部の石器群とは区別できそうである。

このため便宜的にⅧ層上部をⅧa層とし，Ⅷ層中部をⅧb層とする。

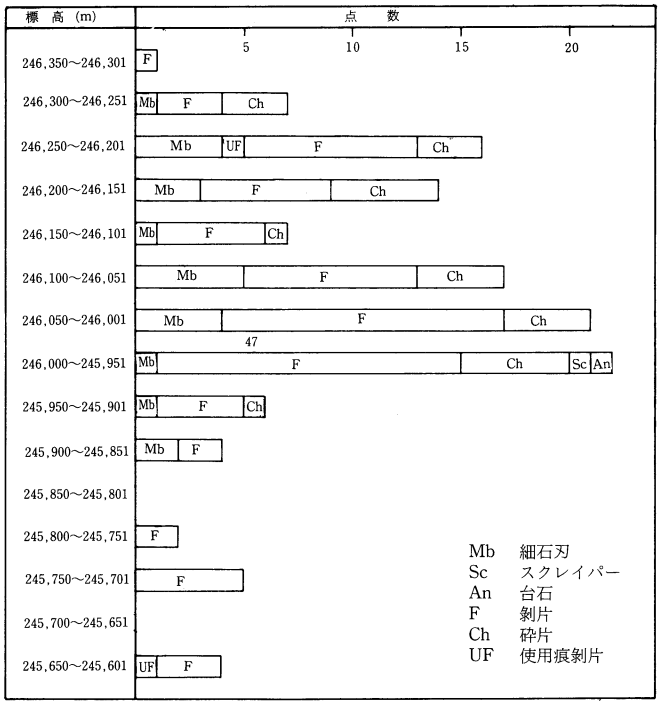
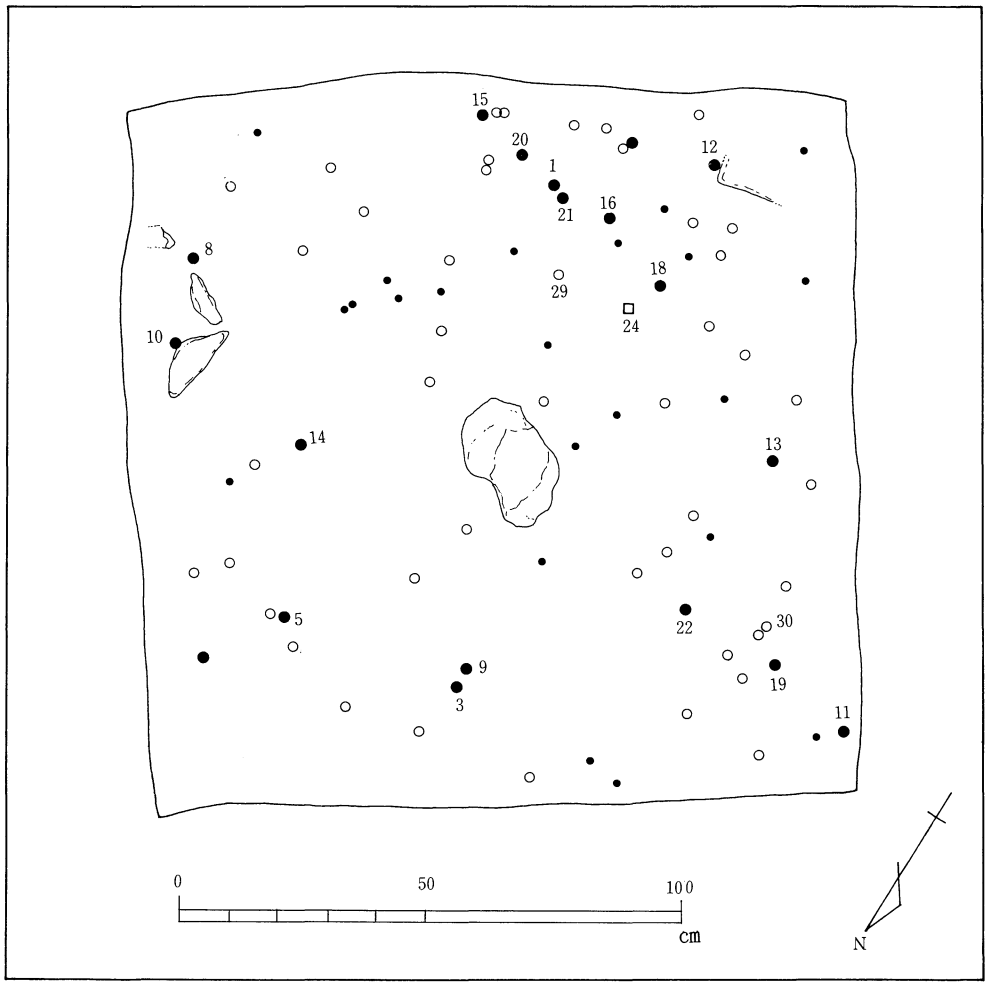
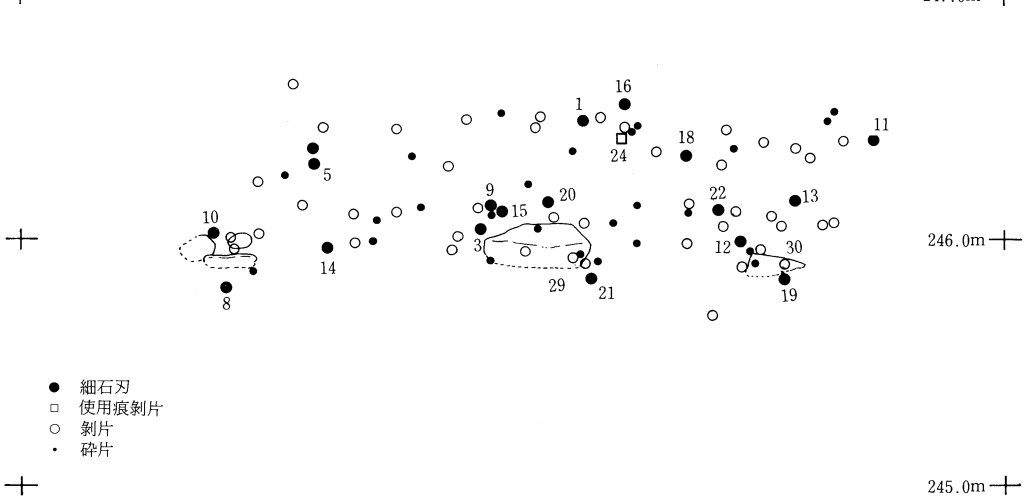
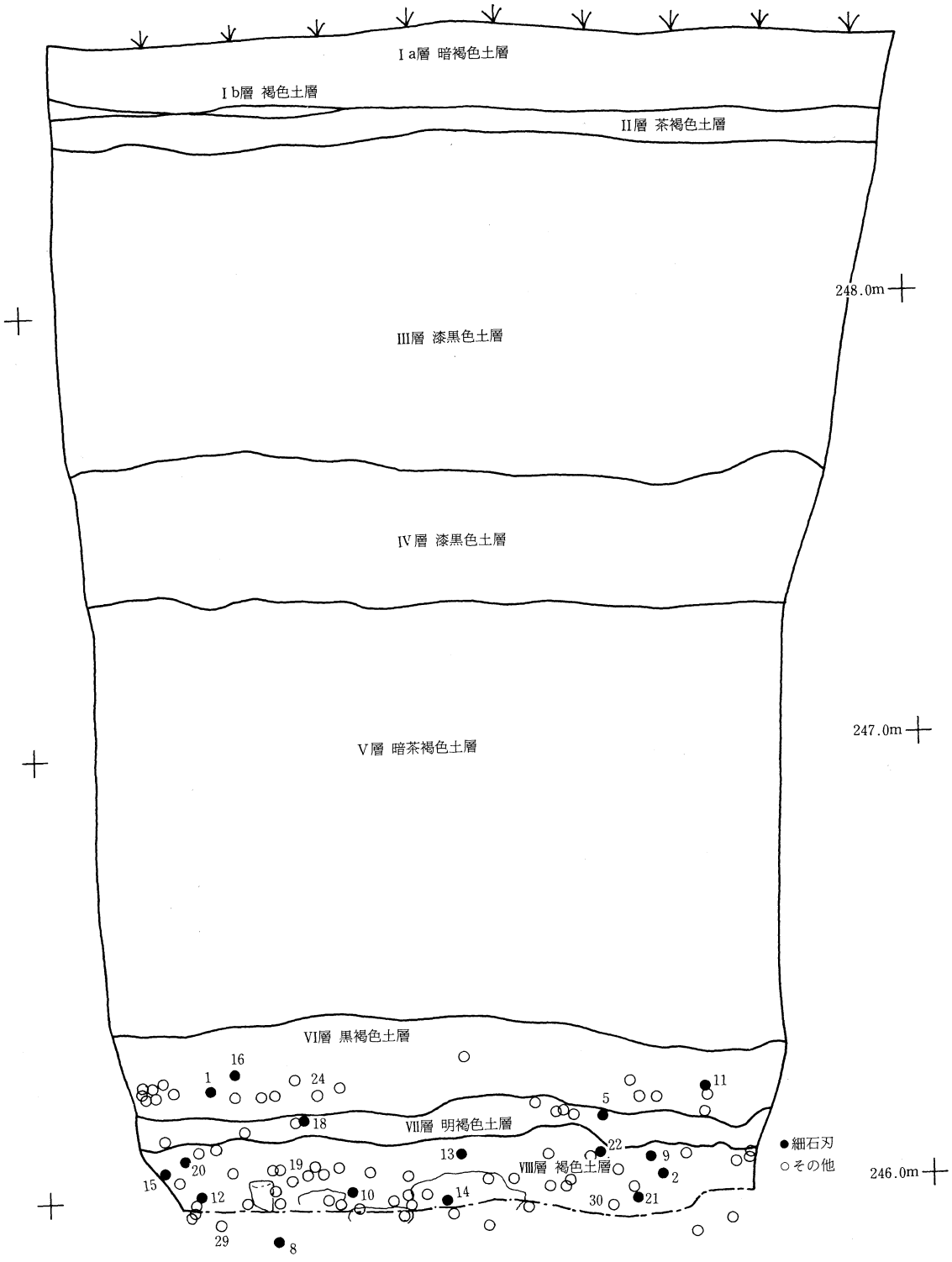


表1　旧石器時代遺物の出土深度





第９図　旧石器時代遺物の分布状況（Ｈ－９）



第10図　土層断面と旧石器時代遺物の垂直分布（H-9，東より投影）

遺物の平面分布

細石器文化の石器群が出土しているのは，H-9・J-8・J-9・J-10グリッドである。調査区が狭く，出土した遺物の量も少ないため石器群のブロック（ユニット）の把握は困難である。ただ，H-9グリッドでは台石と考えられるものを中心に細石刃などの石器群が分布している。またJ-8・J-9・J-10ではH-9グリッド側の南側半分までに細石刃などが出土している。このためH-9グリッドを中心に周囲5～6mの範囲で1つのブロックがとらえられそうであるが，出土石器が少なく，調査面積が狭いため不明である。

3次調査で確認されたⅧb層の石器群は，H-9では調査日程などの関係から台石を出土したところで調査を終了したため確認するまでにいたらなかった。このためⅧb層の石器群については今後問題となろう。

旧石器時代の出土遺物

宮地前遺跡の第2次および第3次の発掘調査において出土した旧石器時代の石器群の総数は127点である。

それらの出土層位は，Ⅷa層のいわゆるハードローム層の上部で半数以上を占めているが，Ⅶ層のソフトローム層とその直上の漸移層からもほぼ同数の遺物が発見されている。一方，Ⅷb層の中部において，わずか6点であるが出土しており，Ⅷa層の石器群と異なる時期が予想されそうである。

土層＼器種	細石刃	スクレイパー	使用痕剥片	剥片	砕片	台石	計
Ⅱ				1			1
Ⅴ				5			5
Ⅵ	5			11	6		22
Ⅶ	4		1	11	7		23
Ⅷa	13	1		42	13	1	70
Ⅷb			1	5			6
計	22	1	2	75	26	1	127

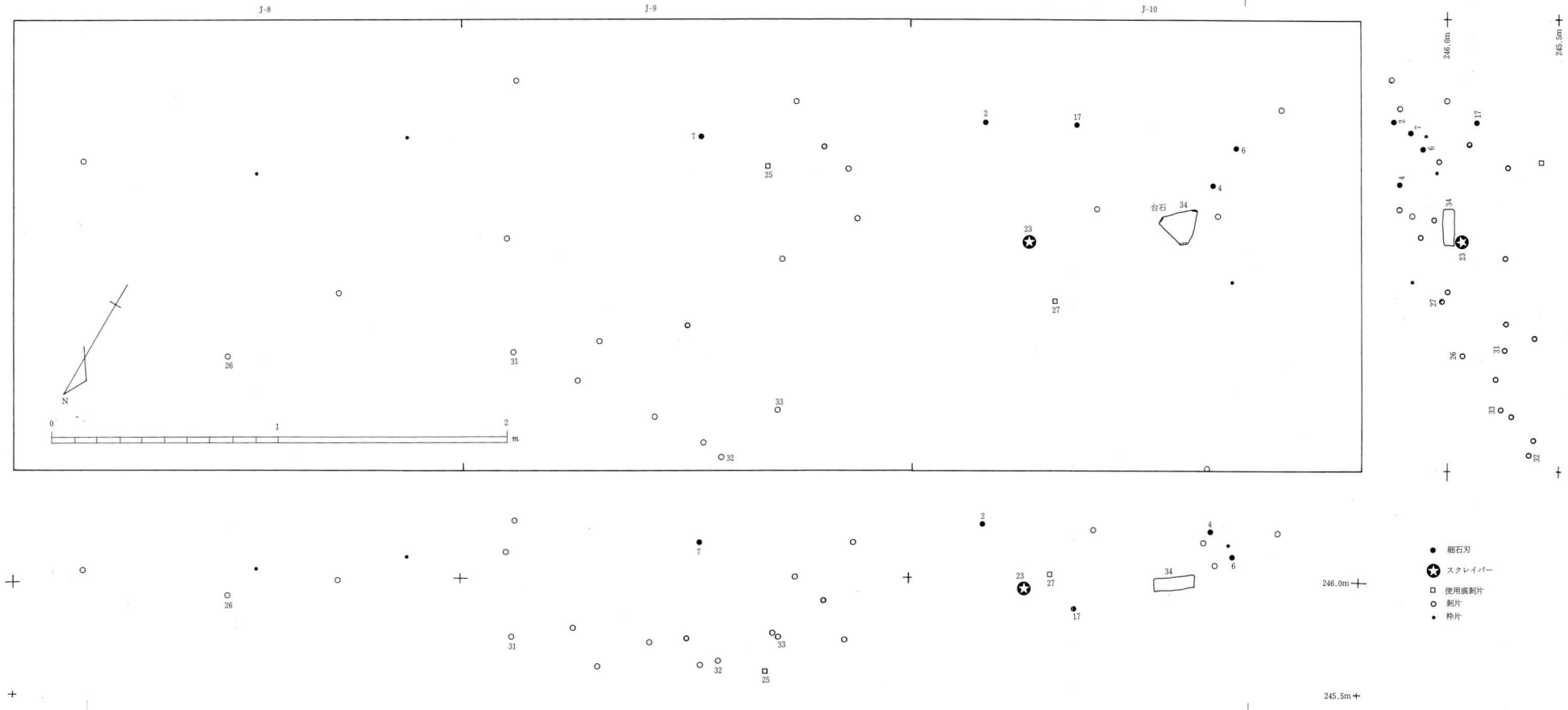
表2　旧石器時代遺物の層序別組成表
（第2・3次調査）

石器群の種類では，やはり剥片がもっとも多く，全体の約60％を占めている。それに次いで，砕片と細石刃がそれぞれ26点，22点出土している。その他の石器群としては，使用痕のある剥片が2点，スクレイパーと台石が各1点のみである。第2次・第3次の発掘調査では，細石核は1点も発見されなかった。

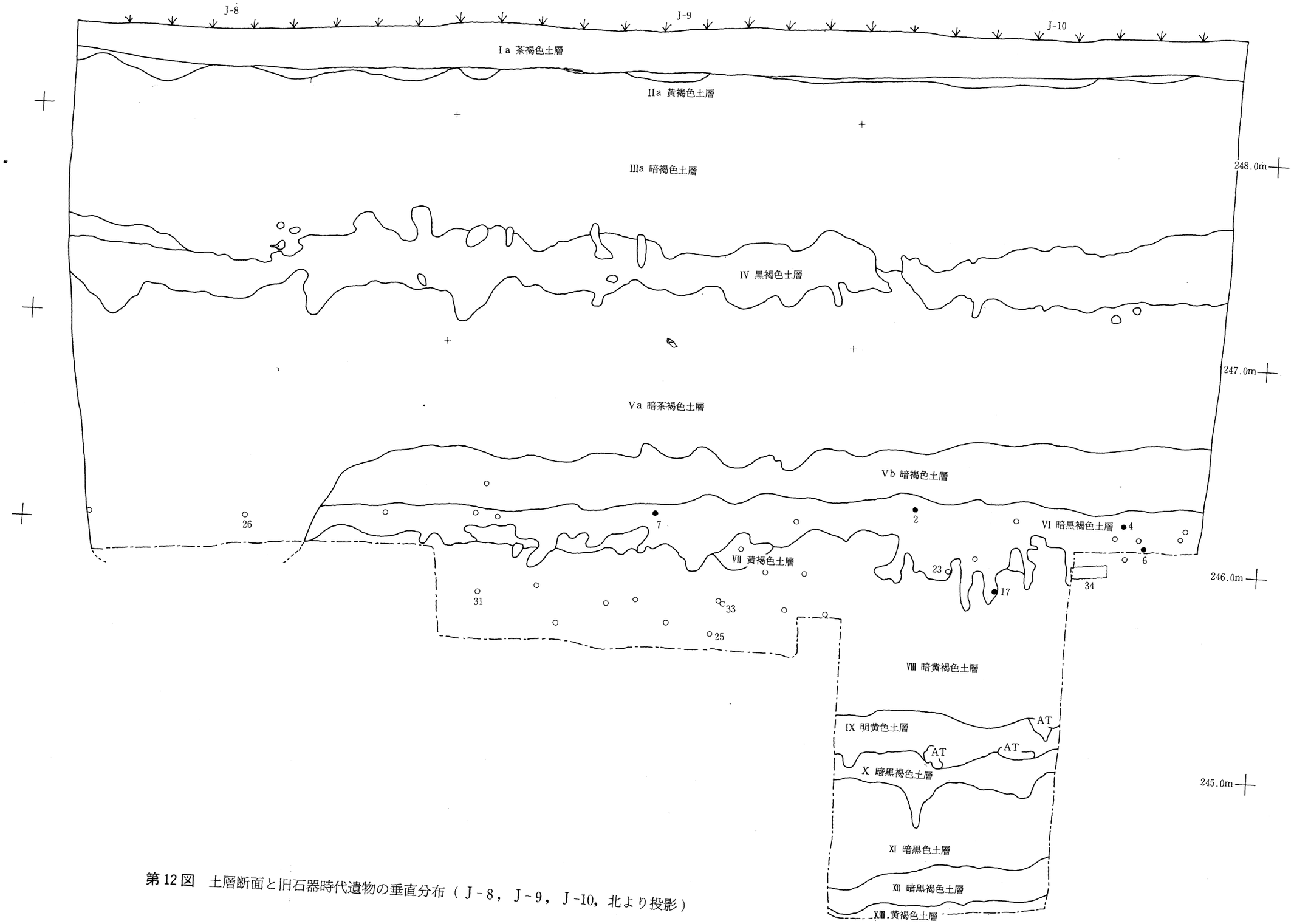
石器群の石材は，大野川中流域の旧石器文化の石器群に普遍的な流紋岩が大半を占め，わずかに黒曜石と安山岩が用いられている。

2．縄文・弥生時代

宮地前遺跡におけるⅠ～Ⅲ層には，旧石器時代から現代（？）に至るまでの遺物が包含されており後代に運ばれた客土である。第2・3次調査においては，縄文・弥生時代の遺物はⅣ・Ⅴ層で多く出土している。それらの遺物の多くは，かなりの破損を受けており，良好な文化層に恵まれていない。ただ，出土状況については，Ⅳ層～Ⅴ層上部にかけて黒曜石製の剥片・砕片の出土や，Ⅴ層の中間部あたりから下にかけて礫の出土が目立つ。土器については，縄文時代晩期のものと，弥生時代中期のものが混在した状態で出土しており，Ⅴ層上面から約30cm掘



第11図　旧石器時代遺物の分布状況（J-8，J-9，J-10）



第12図　土層断面と旧石器時代遺物の垂直分布（J-8，J-9，J-10，北より投影）

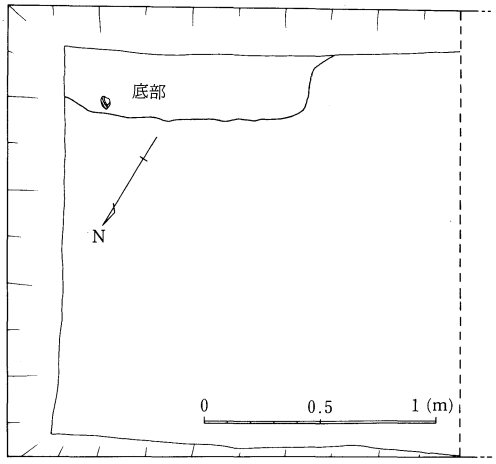
り下げたところで縄文土器が上位から，弥生土器が下位から出土するなどその出土状況に逆転現象が見られる。また，縄文時代の石器が減少していることも注目される。

総じて，縄文・弥生時代の遺物は，Ⅳ～Ⅴ層中に攪乱した状態で出土し，土層の堆積状況に多くの問題点を残すものである。

遺構について

第3次調査においてJ-8グリッドから遺構が検出されている。平面プランは，Ⅴ層を掘り下げたⅧ層（ローム層）上面で，グリッドの南壁にかかった状態で検出されてた。平面の規模は1.15×0.3mで，隅丸方形状を呈する。覆土はⅤ層の暗茶色土で，弥生時代中期の甕形土器底部が出土している。

ここでは遺構の所在を確認したにとどまり，規模・内容については，また，その性格についても明確な判断ができなかった。



第13図　遺構平面図（Ｊ－８）

ローム層に掘り込まれた遺構は，1971年に行われた平安博物館の調査でも確認され，竪穴住居跡としている。(注1) 同じく大野原台地の近中遺跡でもローム層で弥生時代中期の住居跡が2基検出されており，(注2) 本遺跡でも住居跡の可能性を推測することができる。なお，問題点として，実際の掘りこみがどの位置にあるかであるが，平安博物館の報告では実際の掘りこみはⅢ層（第3次調査のⅤ層）の下半部にあたるのではないかと述べられている。別府大学の調査においても明確な掘りこみが確認されず，土層断面図（第7図）をみると，V_b層の上面に掘りこみがくるのではないかと思われる。第3次調査では遺構の精査を行えなかったため，その性格や所属時期に多くの問題点を残すが，本遺跡の住居跡の在り方の解明の糸口として，何らかの資料を与えることができるであろう。

（注1）平安博物館「大分県大野町　宮地前遺跡発掘調査概報」1973

（注2）清水宗昭「大野原の遺跡　近中遺跡」大野町教育委員会　1980

5章　旧石器時代の石器群

1．出　土　遺　物

細石刃（第14図）

宮地前遺跡において出土した細石刃は22点である。これらについて，各部位別に述べることにする。

完　形

細石刃の完形は，第14図の１・３・４の３点が出土している。完形の細石刃の出土数は各部に比べると少なく，本遺跡で細石刃の折断が頻繁になされたことを示唆している。完形の細石刃の長さは４を除くと両方とも約30mmである。

なお，使用痕と考えられるものは認められなかった。

頭　部

細石刃の頭部は，９点出土している。頭部として一括される細石刃には，厳密にいえば，末端をわずかに欠くものと，細石刃の大半を欠くものと２者が認められる。前者は２折断による頭部であり，中央部に機能部を持つためトゥールとして使用され，後者は砕片と同じような性格のものと考えられる。頭部の長さは10mm～22mmの範囲にばらつきを持つ。

９・12には側縁に使用痕と考えられる微小剝離痕が認められる。

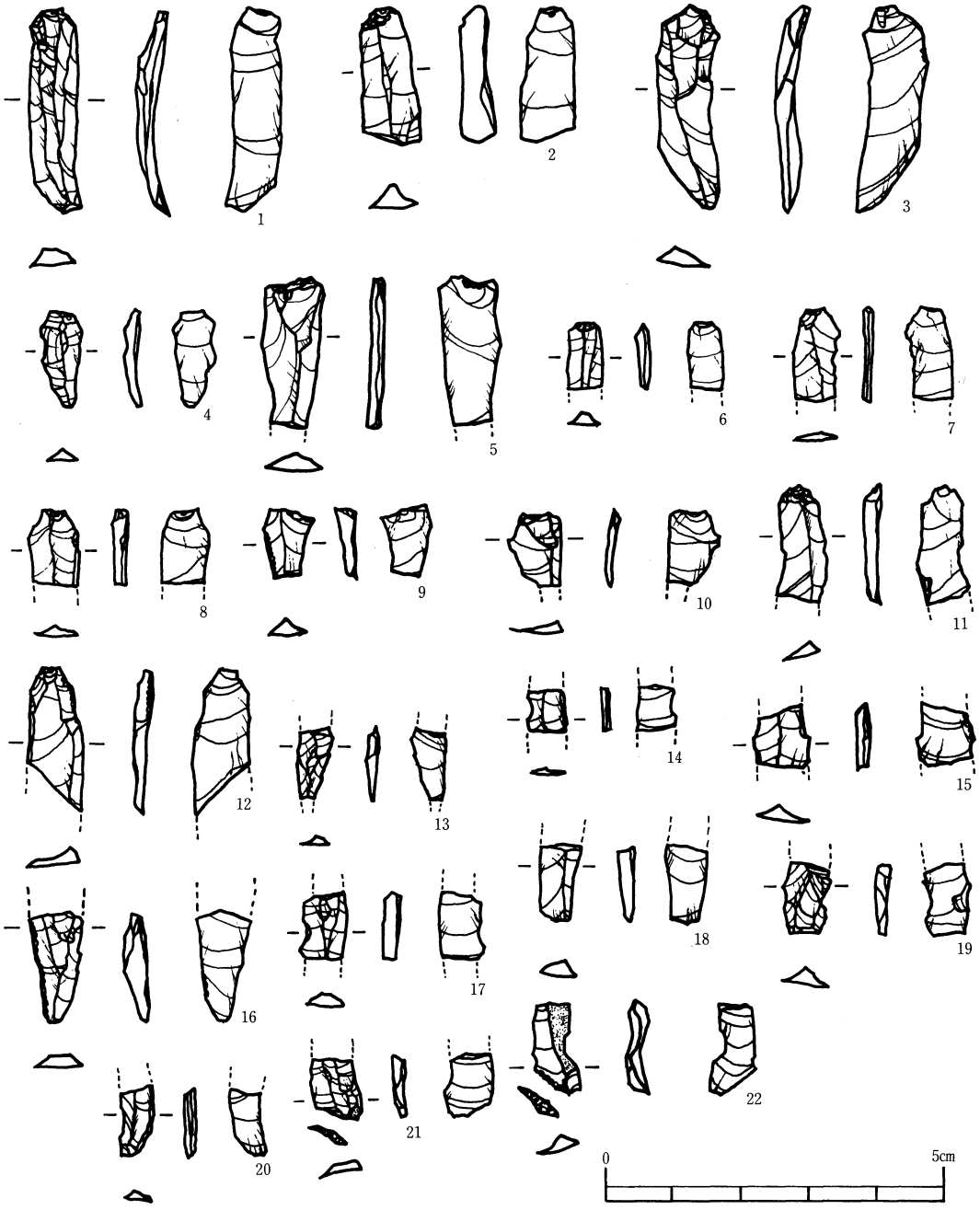
中間部

細石刃の中間部は，６点出土している。その長さは，6mm～11mmの範囲にばらつきを持っている。使用痕は認められない。21には，２次加工が施されている。

末端部

末端部も頭部と同じような２者が考えられる。末端部は４点出土し，２折断によるものと考えられる16には，使用痕が認められ，22には２次加工が施されている。長さは，10mm～16mmの範囲である。

本遺跡において，細石刃の頭部＋末端部の２折断によるものと，頭部＋中間部＋末端部の３折断による分割使用が認められる。細石核は出土しなかったが，頭部の打面の形状は単剝離打面であることなどから船野型細石核から剝取されたことがうかがえる。細石刃の幅は4mm～10mmの範囲であり，ピークが7mmである。流紋岩製のものがほとんどであるが，４点黒曜石製のものもある。平安博物館による本遺跡の調査では，流紋岩の船野型細石核が２点報告されている。



第14図　旧石器時代遺物実測図

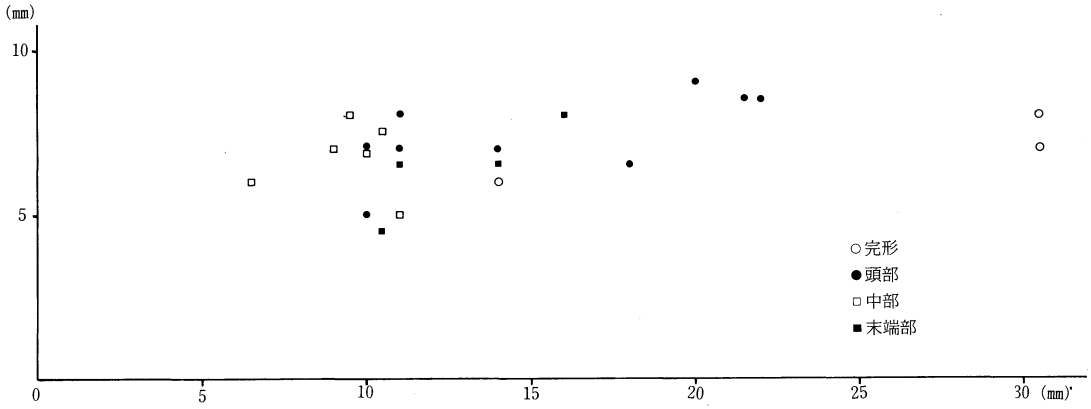
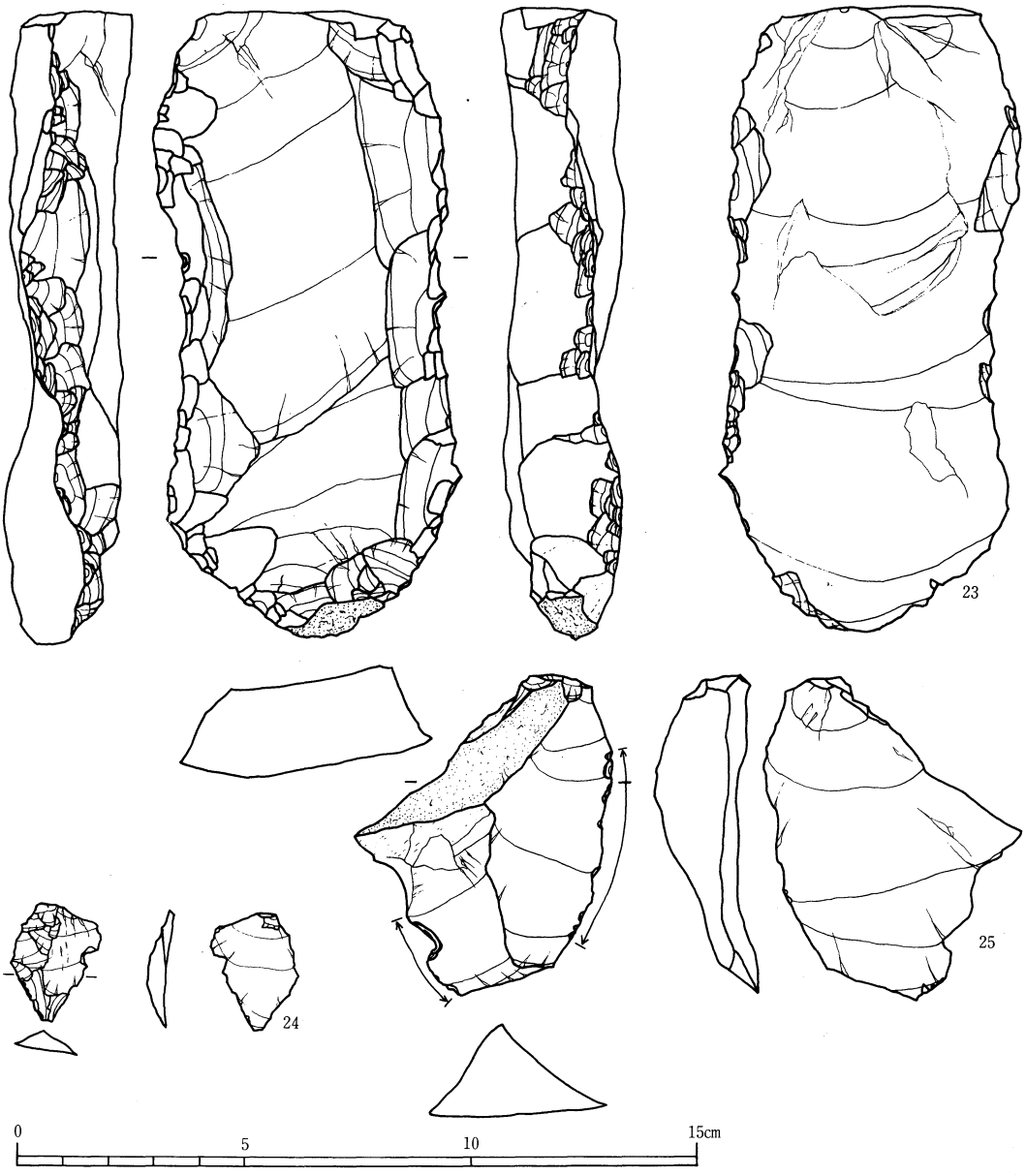


表3　細石刃の長幅比グラフ

	No.	層	Grid	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	部位	備考	図版
細石刃	1	VII	H－9	黒曜石	3.05	0.70	0.25	0.62	完		第14図
細石刃	2	VI	J－10	流紋岩	2.00	0.90	0.60	0.78	頭		〃
細石刃	3	VIII	H－9	流紋岩	3.05	0.80	0.30	0.70	完		〃
細石刃	4	VI	J－10	流紋岩	1.40	0.60	0.30	0.12	完		〃
細石刃	5	VII	H－9	流紋岩	2.20	0.85	0.30	0.40	頭		〃
細石刃	6	VI	J－10	流紋岩	1.00	0.50	0.20	0.10	頭		〃
細石刃	7	VI	J－9	流紋岩	1.40	0.70	0.20	0.15	頭		〃
細石刃	8	VIII	H－9	流紋岩	1.10	0.70	0.25	0.14	頭		〃
細石刃	9	VIII	H－9	流紋岩	1.00	0.70	0.25	0.16	頭	使用痕	〃
細石刃	10	VIII	H－9	流紋岩	1.10	0.80	0.15	0.12	頭		〃
細石刃	11	VI	H－9	流紋岩	1.80	0.65	0.25	0.24	頭		〃
細石刃	12	VIII	H－9	流紋岩	2.15	0.85	0.20	0.30	頭	使用痕	〃
細石刃	13	VIII	H－9	流紋岩	1.10	0.50	0.15	0.10	中		〃
細石刃	14	VIII	H－9	流紋岩	0.65	0.60	0.10	0.07	中		〃
細石刃	15	VIII	H－9	流紋岩	0.95	0.80	0.15	0.09	中	使用痕	〃
細石刃	16	VII	H－9	流紋岩	1.60	0.80	0.30	0.26	末	使用痕	〃
細石刃	17	VIII	J－10	黒曜石	1.00	0.70	0.30	0.12	中		〃
細石刃	18	VII	H－9	流紋岩	1.10	0.65	0.25	0.10	末		〃
細石刃	19	VIII	H－9	流紋岩	1.05	0.75	0.20	0.15	中		〃
細石刃	20	VIII	H－9	流紋岩	1.05	0.45	0.20	0.05	末		〃
細石刃	21	VIII	H－9	黒曜石	0.90	0.70	0.15	0.09	中	2次加工	〃
細石刃	22	VIII	H－9	黒曜石	1.40	0.65	0.20	0.15	末	2次加工	〃
スクレイパー	23	VIII	J－10	流紋岩	13.9	6.8	2.7	299			第15図
使用痕剝片	24	VII	H－9	流紋岩	2.60	1.90	0.40	1.48			〃
使用痕剝片	25	VIII_B	J－9	流紋岩	7.10	5.60	2.30	51.00			〃

表4　旧石器時代遺物観察表



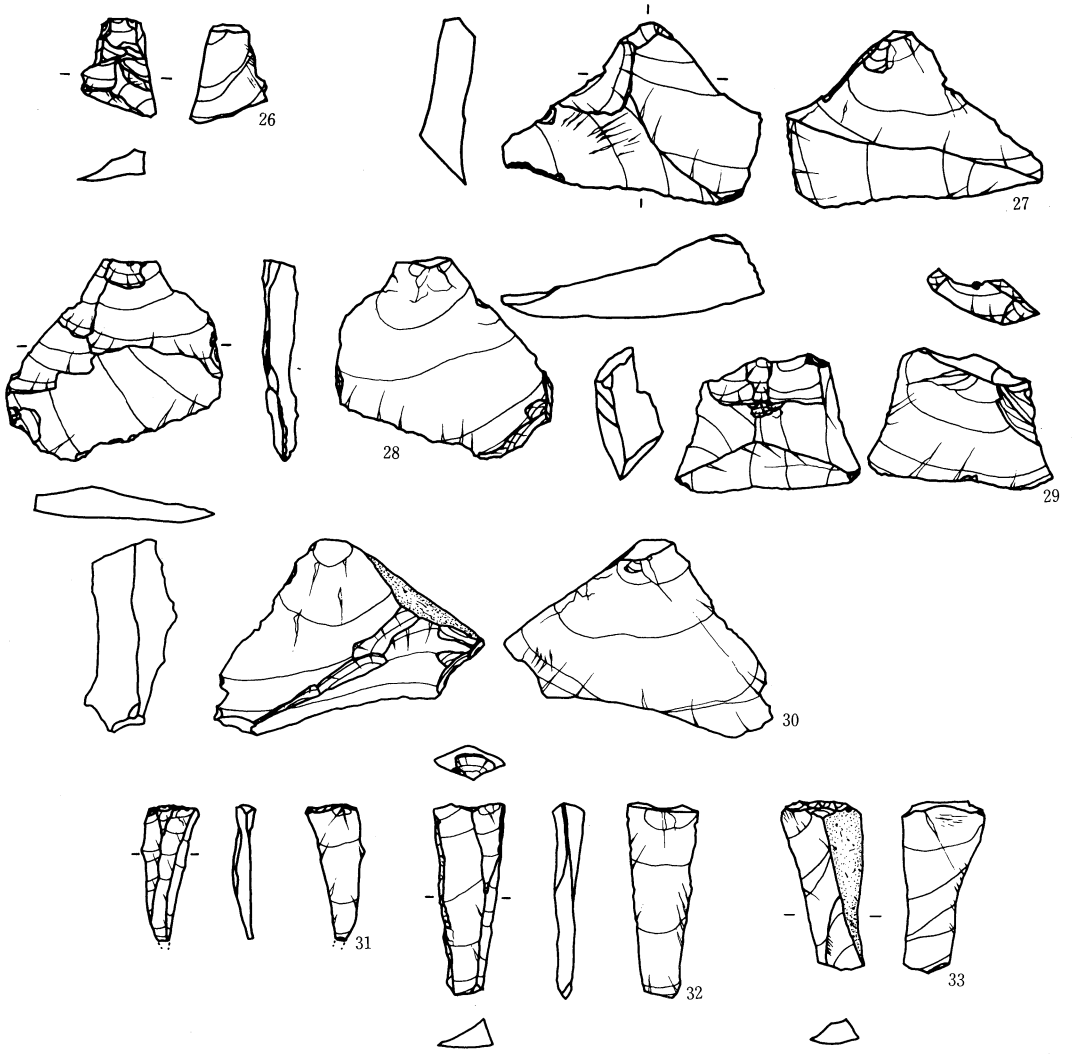
第15図　旧石器時代遺物実測図

スクレイパー（第15図）

23　厚味のある大形の縦長剥片を素材にした掻器である。単剥離打面を有し，下部に一部自然面を残している。2側縁に大まかな加工を施した後，細かな加工を施すことにより急角度で鋭利な刃部を形成する。流紋岩製。

使用痕剥片（第15図）

24　流紋岩製の不定形な剥片を使用したものである。左側縁下部に微小剥離痕が認められる。剥片の打面は残ってなく，また先端は欠損している。



第16図　旧石器時代遺物実測図

0　5　10cm

25　厚味のある剥片を使用したものである。背面側に自然面を残し，左側縁下部と右側縁に使用による小剥離痕と微小剥離痕が認められる。

剥片類（第16図）

26　細石核の側面調整に伴う剥片と考えられる。単剥離打面を残している。

27　横長の不定形剥片である。単剥離打面を残している。

28　不定形の剥片である。

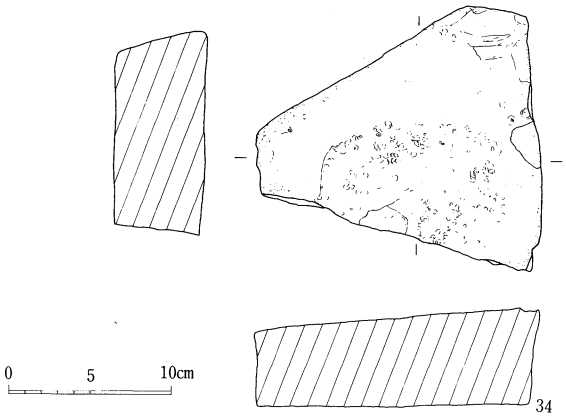
29　厚味のある剥片である。打面が残っており，背面側には階段状剥離が認められる。

30　単剥離打面が残っており，一部に自然面が認められる。

31　縦長剥片である。打面を残し，下部は欠損している。

32　縦長剥片である。打面には微調整の痕跡を残している。

33　縦長剥片である。背面側に大きく自然面を残している。



第17図　旧石器時代遺物実測図

台　石（第17図）

台石は2点出土したが，H-9グリッドの台石は取り上げなかった。

34　安山岩製で，比較的安定したものである。断面は長方形を呈する。

2．表　採　遺　物

第18図の35～38は細石刃である。35・38は完形，36は頭部，37は中間部である。いづれも流紋岩製である。

39　横長剥片を素材としたナイフ形石器である。ブランティングは基部の一部を除き，すべてに施されている。右側縁上部の刃部は大まか加工によって形成されたようにみえる。加工の方法や形状から尖頭器としての分類も可能である。

40　2側縁加工のナイフ形石器である。ノの字状の縦長剥片を素材に用いたものと考えられる。打面・バルブはブランティングによりカットされている。

41　切り出し状のナイフ形石器である。素材の剥片を折断した後に，基部と先端部にブランティングを施している。右側縁には折断面を残している。刃部には使用痕と考えられる微小剥離痕が認められる。

42　2側縁加工のナイフ形石器である。先端部には打面を残し，基部は欠損している。腹面側の先端部には数枚の加工が認められる。流紋岩製ではあるが，石質の悪さからブランティングの細かな剥離痕はよく観察できなかった。

43　不定形の剥片を素材としたスクレイパーである。側面の刃部はインバースリタッチによるものであり，下辺部の刃部は主要剥離面から形成されたものである。

44　周縁部に細かな加工を施したポイントである。主要剥離面では，ポイントの基部に数枚の剥離が認められる。

45　背面側に自然面を残す縦長の剥片である。

46　幅の広い不定形剝片を素材とした石器である。刃部の加工は不規則であるため２次加工剝片としておきたい。

47・48は石核である。

47　剝片素材の石核である。一部に自然面を残し，横長剝片を剝取した痕跡が認められる。

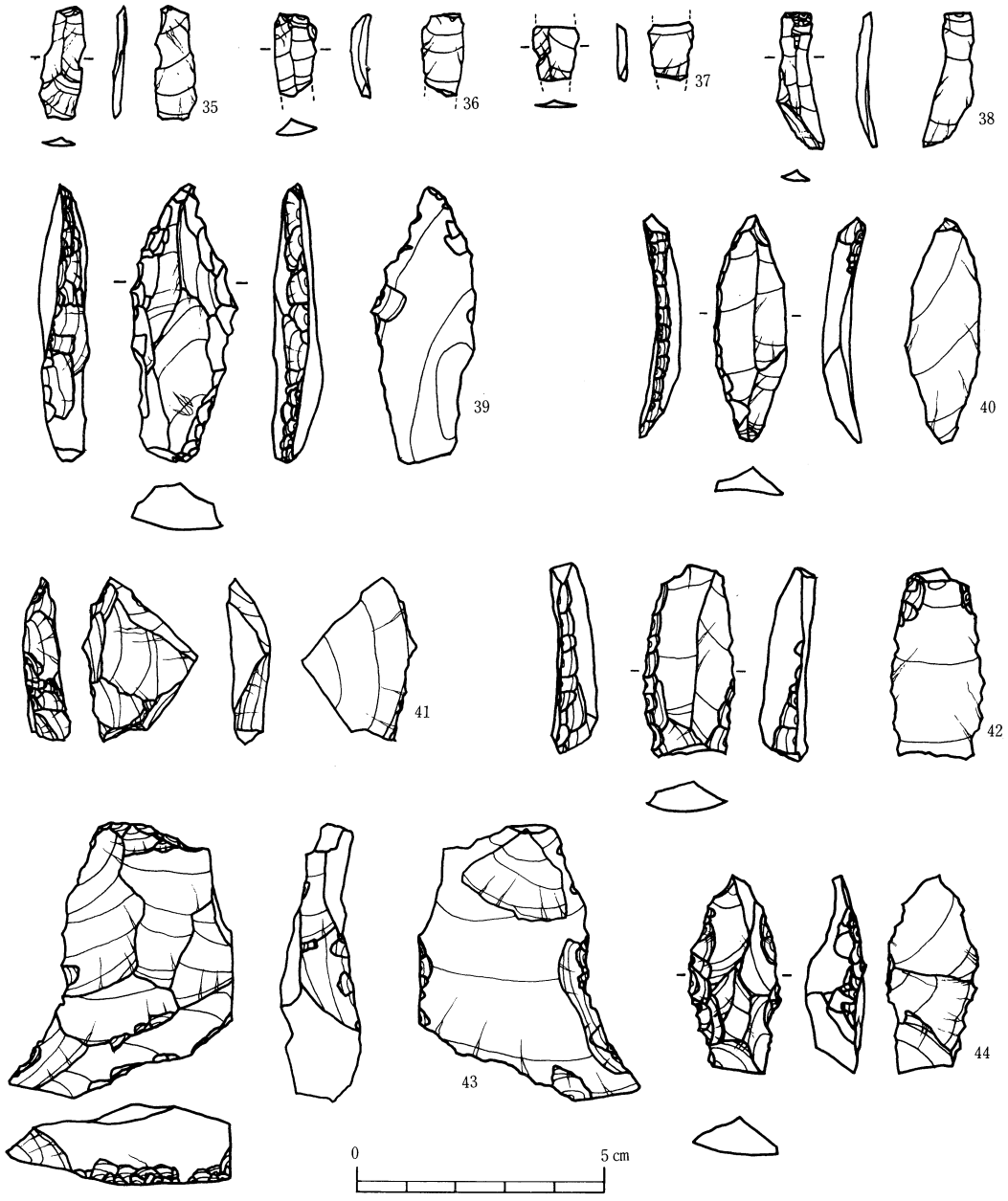
48　剝片素材の石核である。側面に自然面を残している。打面は調整打面であり，作業面は単一打面からの剝離で形成されている。石核には頭部調整が施されている。

No.	器　種	Grid	海抜(m)	層位	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	図　版
26	剝　片	J－8	245,933	VI	流紋岩	2.50	2.05	0.75	3.20	第 16 図
27	剝　片	J－10	246.026	VI	流紋岩	4.70	6.90	2.00	33.38	〃
28	剝　片	J－10	247,186	VI	流紋岩	5.40	5.70	1.00	21.80	〃
29	剝　片	H－9	245,944	VIII	流紋岩	3.60	4.90	1.80	20.00	〃
30	剝　片	H－9	245,952	VIII	流紋岩	5.20	7.20	2.40	38.00	〃
31	剝　片	J－9	245,743	VIII	流紋岩	3.60	1.50	0.60	1.66	〃
32	剝　片	J－9	245,631	VIII	流紋岩	5.10	1.90	0.90	5.05	〃
33	剝　片	J－9	245,762	VIII	流紋岩	4.40	2.10	1.50	9.60	〃
34	台　石	J－8	上246,030 下245,978	VIII	安山岩	17.50	16.30	5.70	2,600	第 17 図

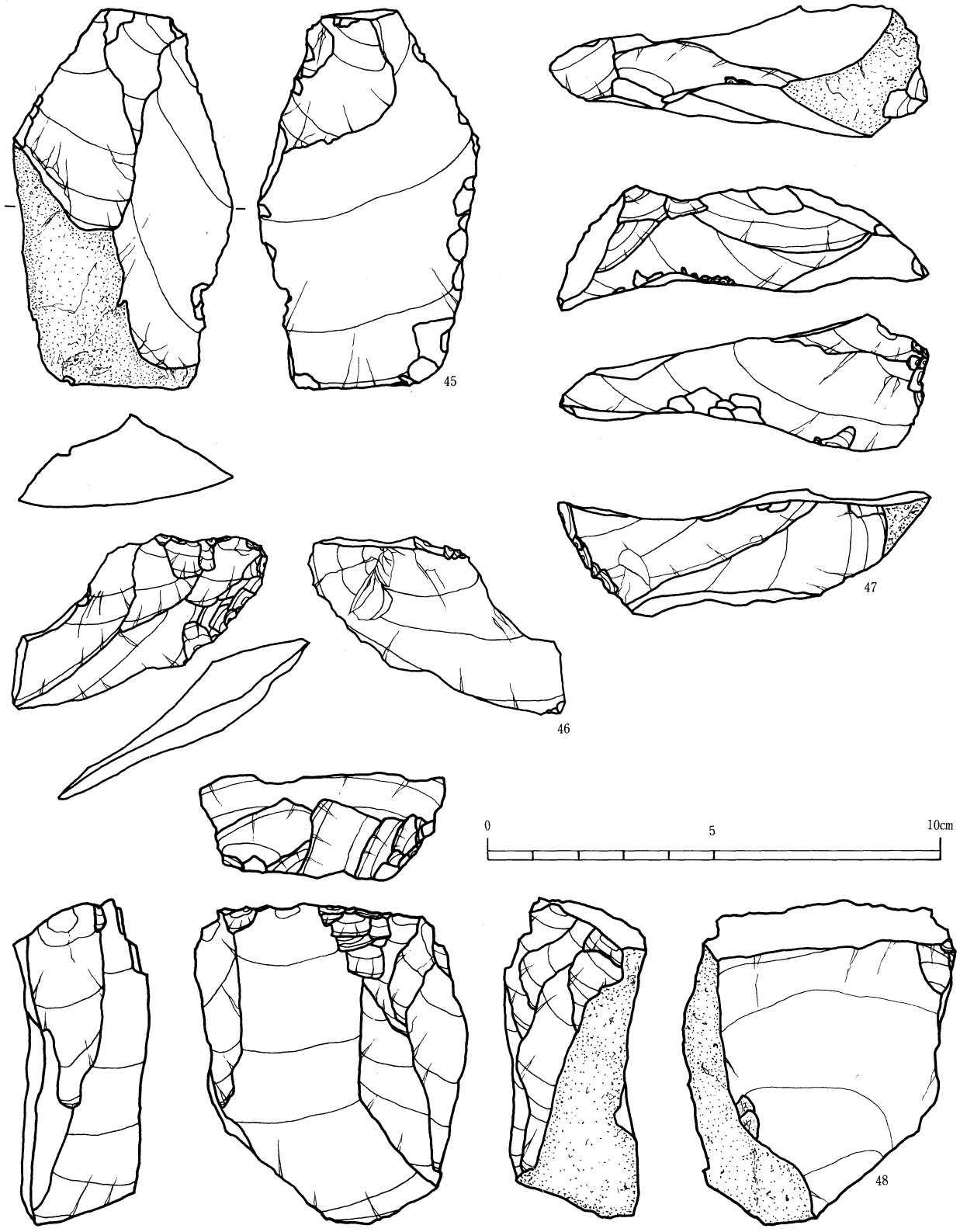
表５　旧石器時代遺物観察表

No.	器　種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	部　位	図　版
35	細石刃	流紋岩	2.30	0.90	0.20	0.48	完　形	第 18 図
36	細石刃	流紋岩	1.60	0.90	0.40	0.45	頭　部	〃
37	細石刃	流紋岩	1.10	0.90	0.20	0.20	中間部	〃
38	細石刃	流紋岩	2.70	1.00	0.40	0.30	完　形	〃
39	ナイフ形石器	流紋岩	5.60	2.20	1.00	12.50		〃
40	ナイフ形石器	流紋岩	4.60	1.50	0.80	3.60		〃
41	ナイフ形石器	流紋岩	3.30	2.30	0.90	4.80		〃
42	ナイフ形石器	流紋岩	3.90	1.90	1.10	6.90		〃
43	スクレイパー	流紋岩	5.60	4.50	1.60	28.40		〃
44	尖頭器	流紋岩	4.06	1.90	1.20	7.55		〃
45	剝　片	流紋岩	8.40	4.90	2.00	83.20		第 19 図
46	２次加工剝片	流紋岩	3.90	5.60	1.40	16.20		〃
47	石　核	流紋岩	2.70	8.20	2.90	51.85		〃
48	石　核	流紋岩	7.00	6.00	3.10	131.95		〃

表６　旧石器時代遺物観察表（表採遺物）



第 18 図　表採遺物実測図



第 19 図　表採遺物実測図

6章　縄文時代の遺物

1．土　　器

縄文早期（第20図　1）

1は，押型文土器で外面の口縁部上位に空白部を残し横回転の山形文が施す。内面には，原体刻文があり，その下に横回転の山形文が施す。

縄文後期（第20図　2～7，第26図　59）

3・5は，三万田式土器である。3は，浅鉢形土器で口縁部外面に凹線文を施し，その外に羽状文を施す。5は，口縁部外面に凹線文，その下に羽状文を施す。また，胴部に凹線文を施すもので，注口土器と思われる。

2・6・7・59は，浅鉢形土器で口縁部外面に凹線文を施し，凹点文を有する。4は，深鉢形土器で口縁部外面に凹線文を施す。以上のものは，御領式土器と思われる。

縄文晩期

深鉢A類　頸部から内湾あるいは外湾気味に立ち上がる口縁部の外面に沈線文を施す。

A-1類（第20図　8～10）　口縁部は，ほぼ垂直に立ち上がり，外面に2～4条の沈線文を施す。口縁部内面の立ち上がり部分にわずかな段を有する。

A-2類（第22図　13～17）　口縁部は，A-1類に比べてやや外湾気味に立ち上がる。口縁部外面には，2～4状の沈線文を施す。口縁部内面の立ち上がりは，やや不明瞭になる。

A-3類（第22図　18・19）　口縁部は，外湾し広くなる。口縁部の立ち上がり部分は，痕跡として段がつく程度になる。口縁部外面の沈線文は，細くなり多条化する。

深鉢B類（第22図　20）　頸部から，口縁部は屈曲して立ち上がり，外面に1条の細い沈線文を施す。

深鉢C類（第22・23図　21～32）　頸部から口縁部が直線的に開くものである。

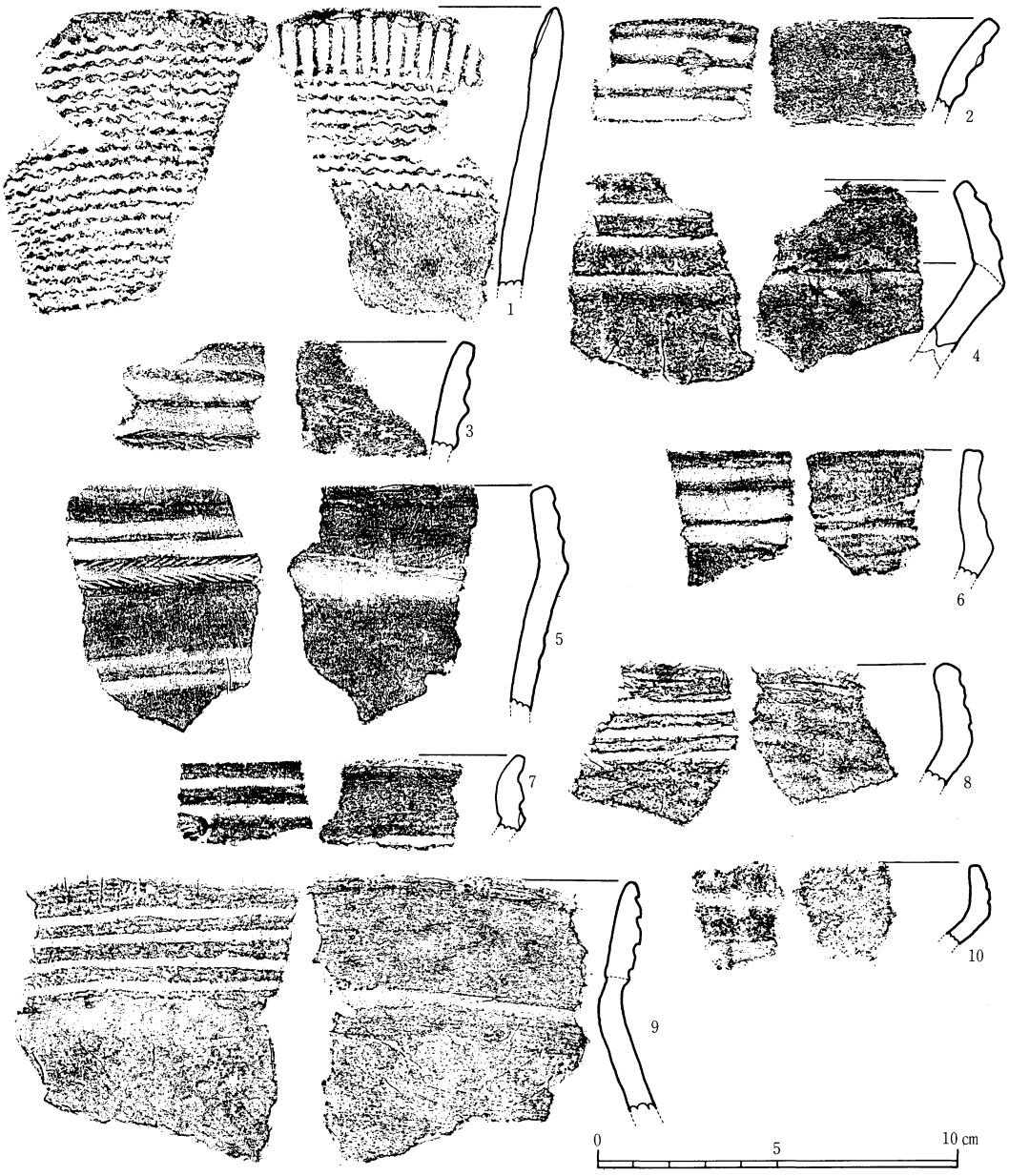
深鉢D類（第23～25図　33～51）　口縁部外面に1条の刻み目のない張りつけ突帯を有するものである。

深鉢胴部（第25図　52～58）　いずれも胴部最大径を示す部分である。57・58はその部分に沈線文を施す。

浅鉢A類（第26図　59～62）　口縁部は，頸部から垂直に立ち上がり，外面に2条の沈線文を施す。

浅鉢B類　頸部が胴部から外湾気味に開くものである。口縁部には，沈線文を施す。

B-1類（第21図　11，第26～28図　63～74）　口縁部は，垂直に立ち上がり，外面に1条の沈線文を施す。11・63は，口唇部に山形突起を有し，口縁部下端や胴部の中央の折れまがる部分に凹点が施されるものである。

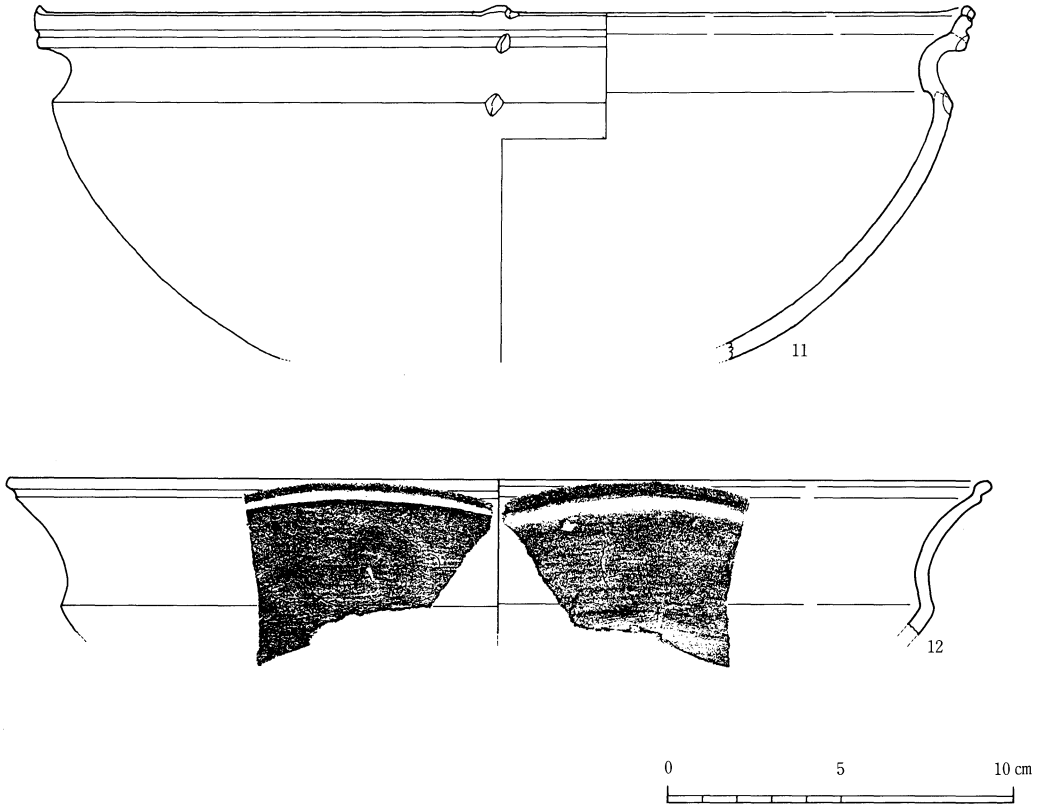


第20図　縄文土器実測図

B-2類（第21図　12，第27図　76～82）　口縁部は，やや外湾気味に立ち上がり，外面に1条の沈線文を施す。

B-3類（第28図　83～87）　口縁部の立ち上がり部分がなくなり，頸部と一体化するようになる。しかし，これまでの口縁部の立ち上がり部分の痕跡として，口縁部内外に段を有する。

浅鉢C類（第28・29図　88～95）口縁部が厚くなり，外面の沈線文は段状になる。



第21図　縄文土器実測図

浅鉢D類（第29図　96～98）頸部の内面が張出し気味に屈曲する。

浅鉢E類（第29図　99）口縁部が波状を呈する。口縁部外面には，山形の沈線文を施す。

浅鉢F類（第29図　100～102）椀形を呈するもので，100・101は，口唇部に突起を有する。

浅鉢F類（第29図　103）口縁部が外湾して立ち上がり，内面に沈線文を施す。

浅鉢G類（第29図　104）口縁部が短く外湾して立ち上がるである。

浅鉢H類（第29図　105・106）口縁部が垂直に立ち上がり，内面または外面に沈線文を施すものである。

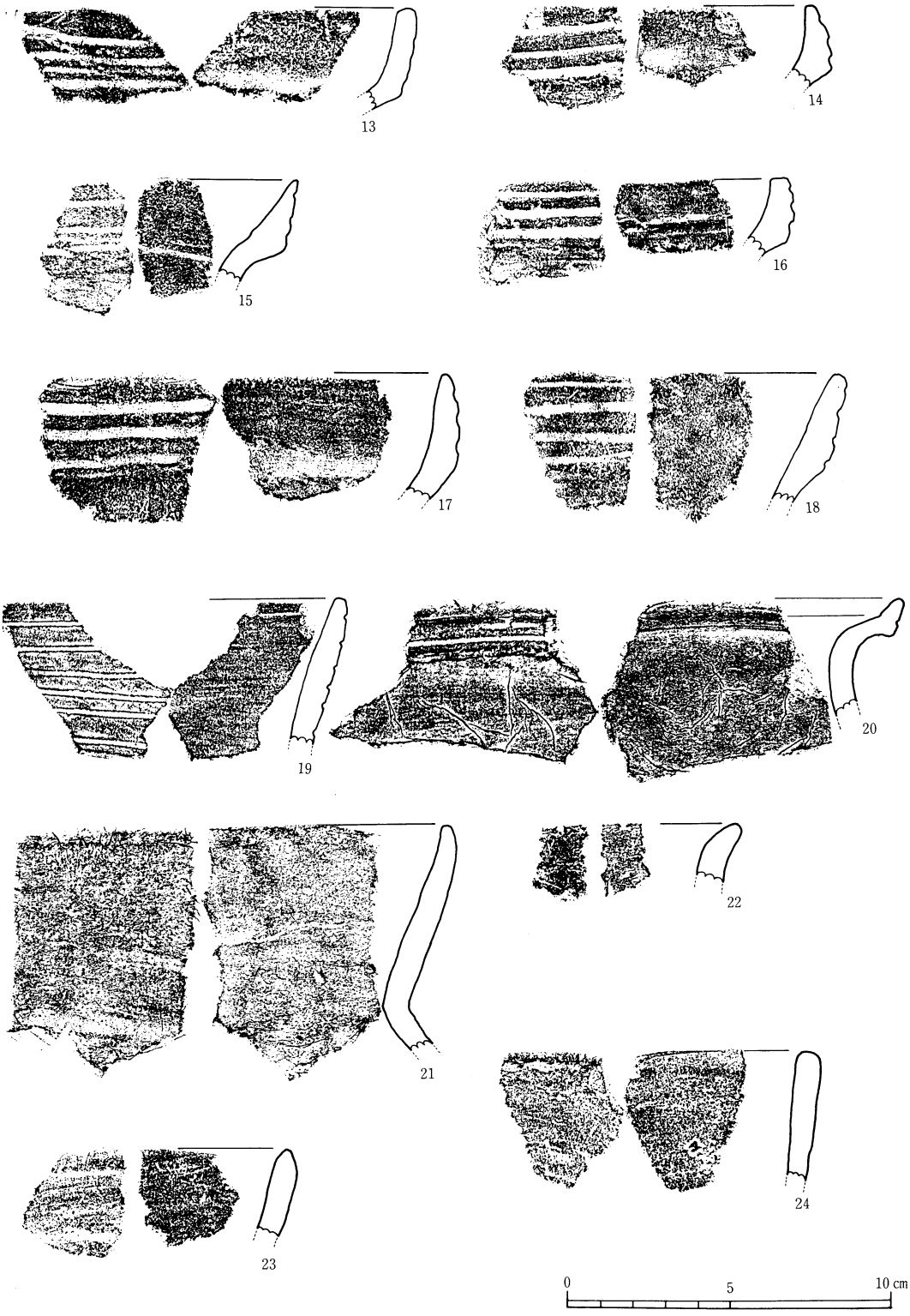
浅鉢I類（第29図　107・108）頸部から屈曲して口縁部が立ち上がるものである。

底　部　すべて深鉢形土器の底部である。

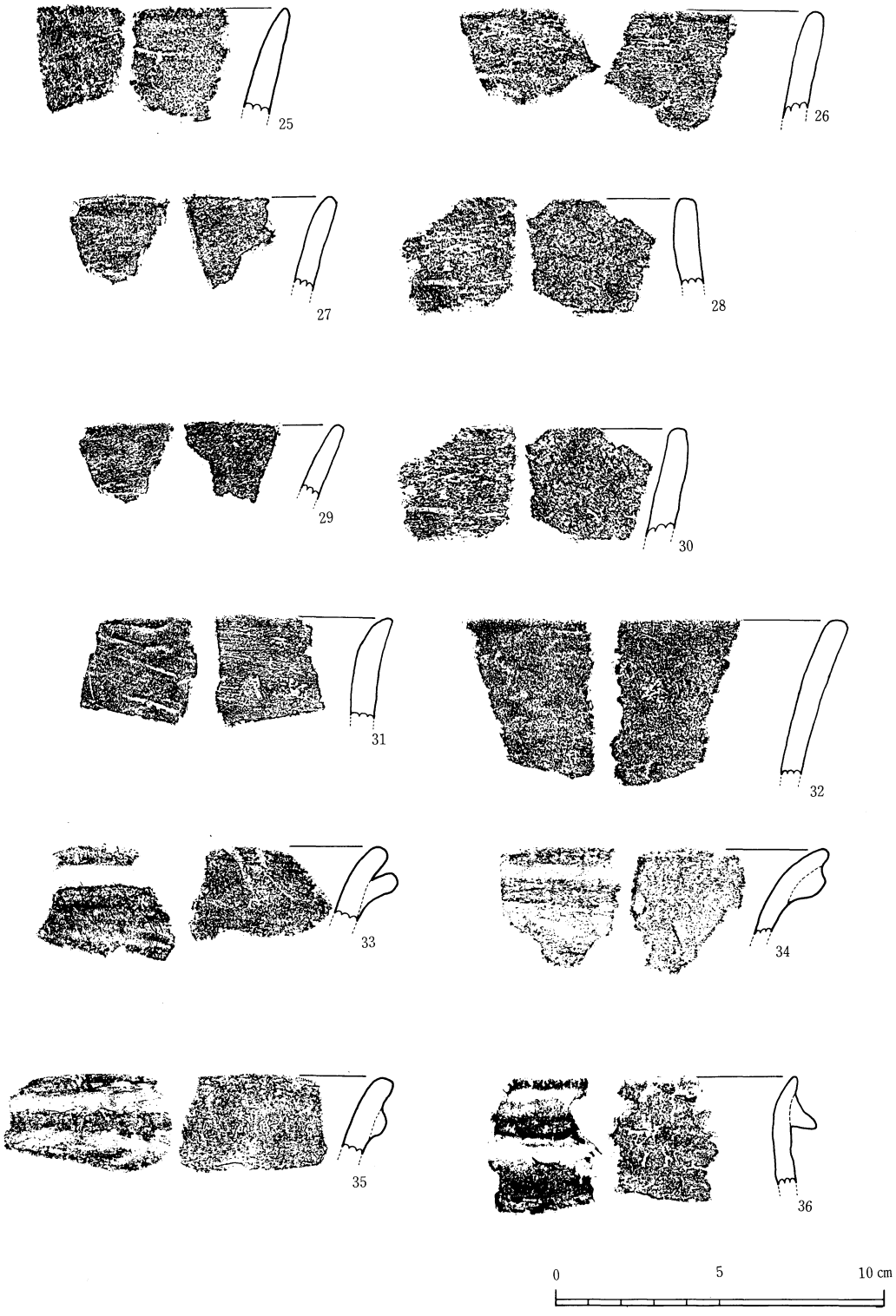
底部A類（第30図　109）平底を呈するものである。

底部B類（第30図　110～119）上げ底を呈するものである。

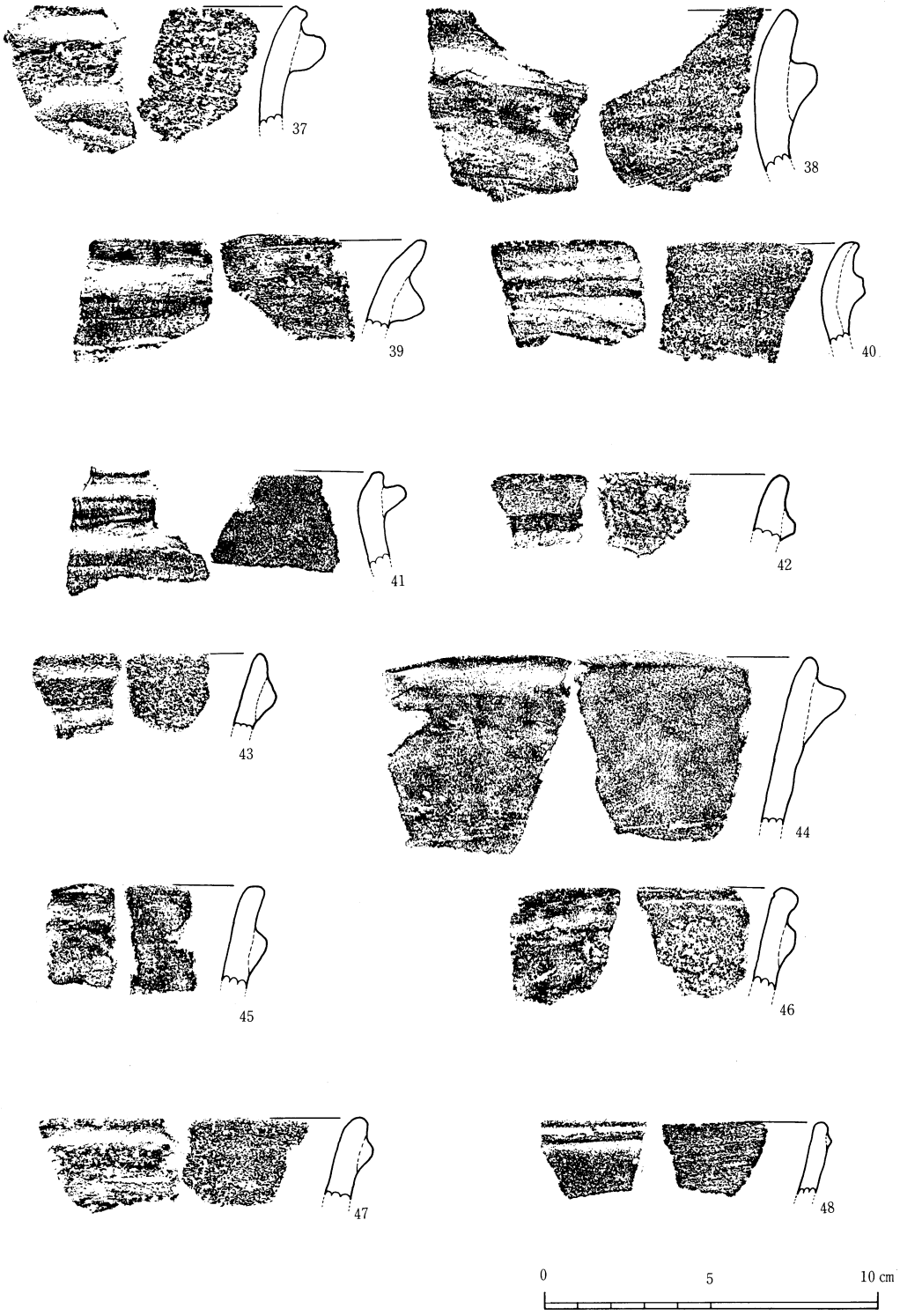
底部C類（第31図　120～122）円盤張りつけ状の底部を呈するものである。



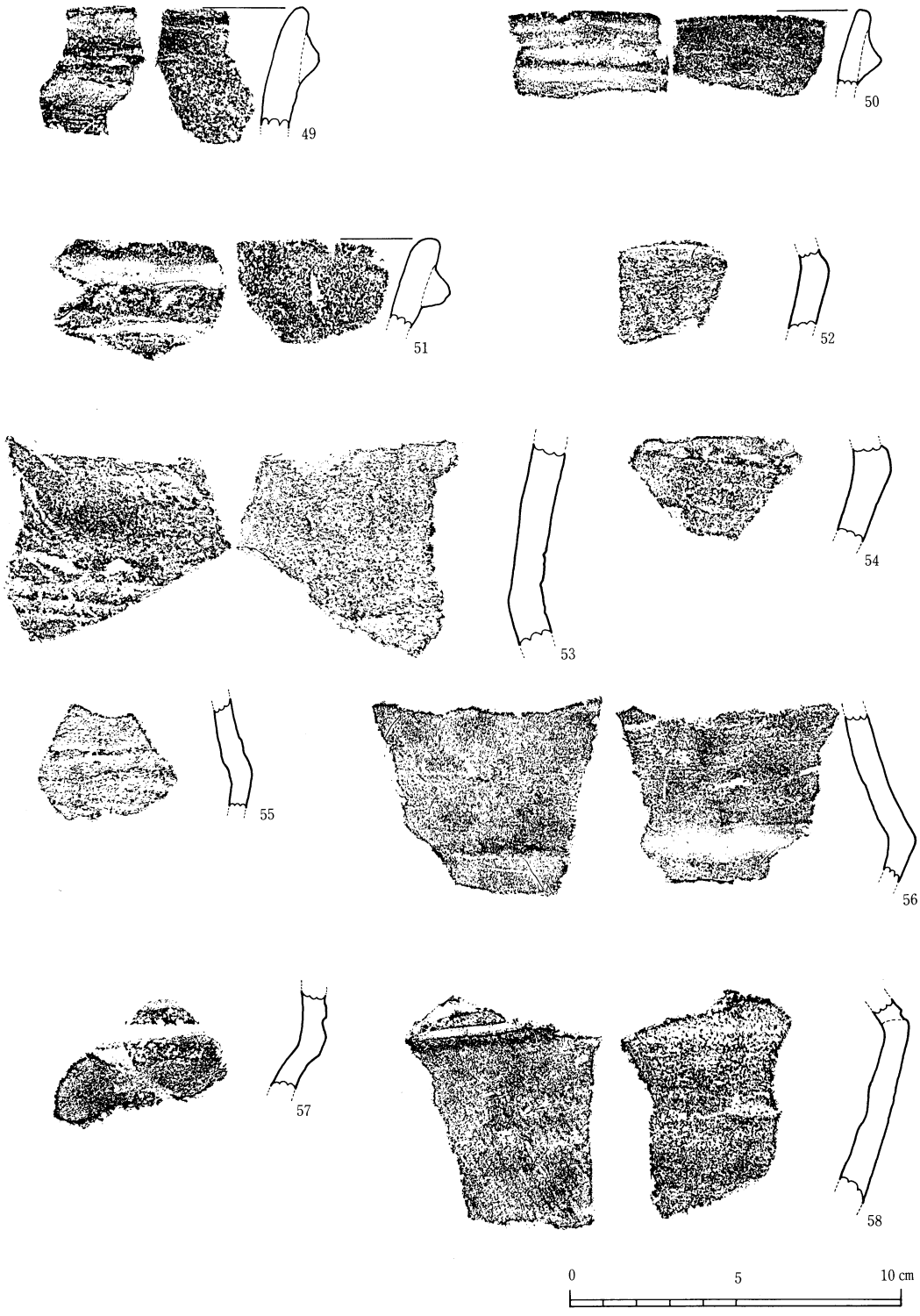
第22図　縄文土器実測図



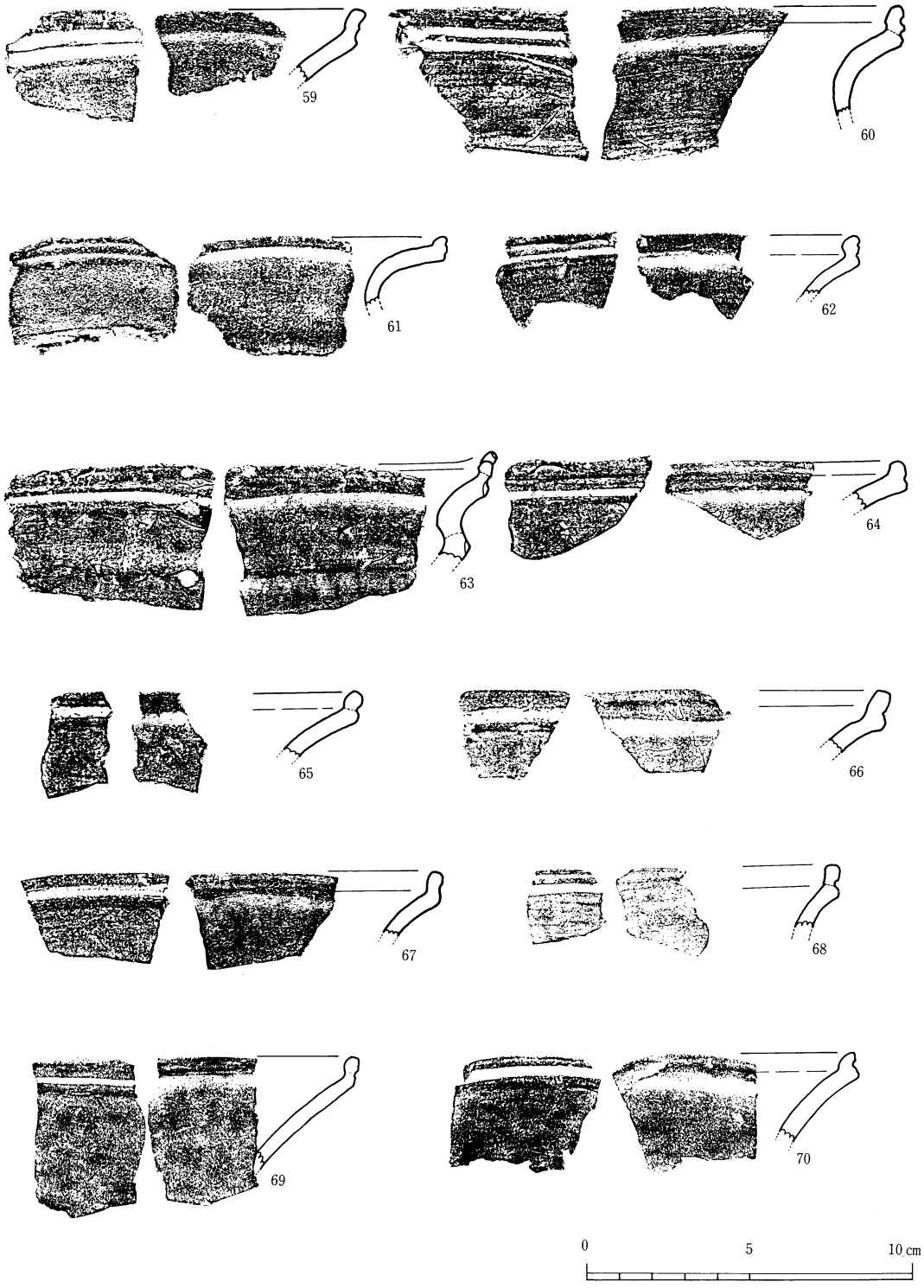
第23図　縄文土器実測図



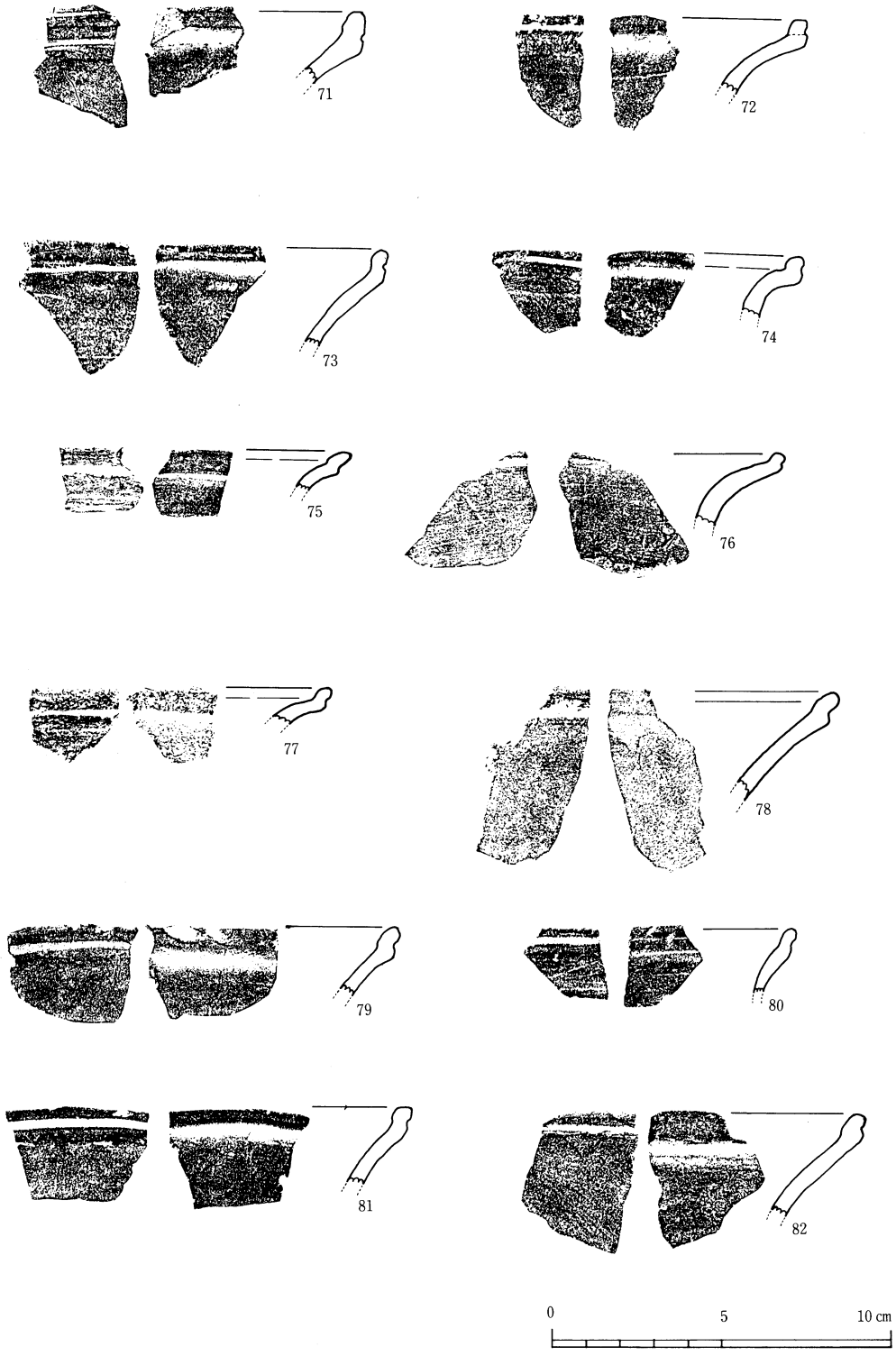
第24図　縄文土器実測図



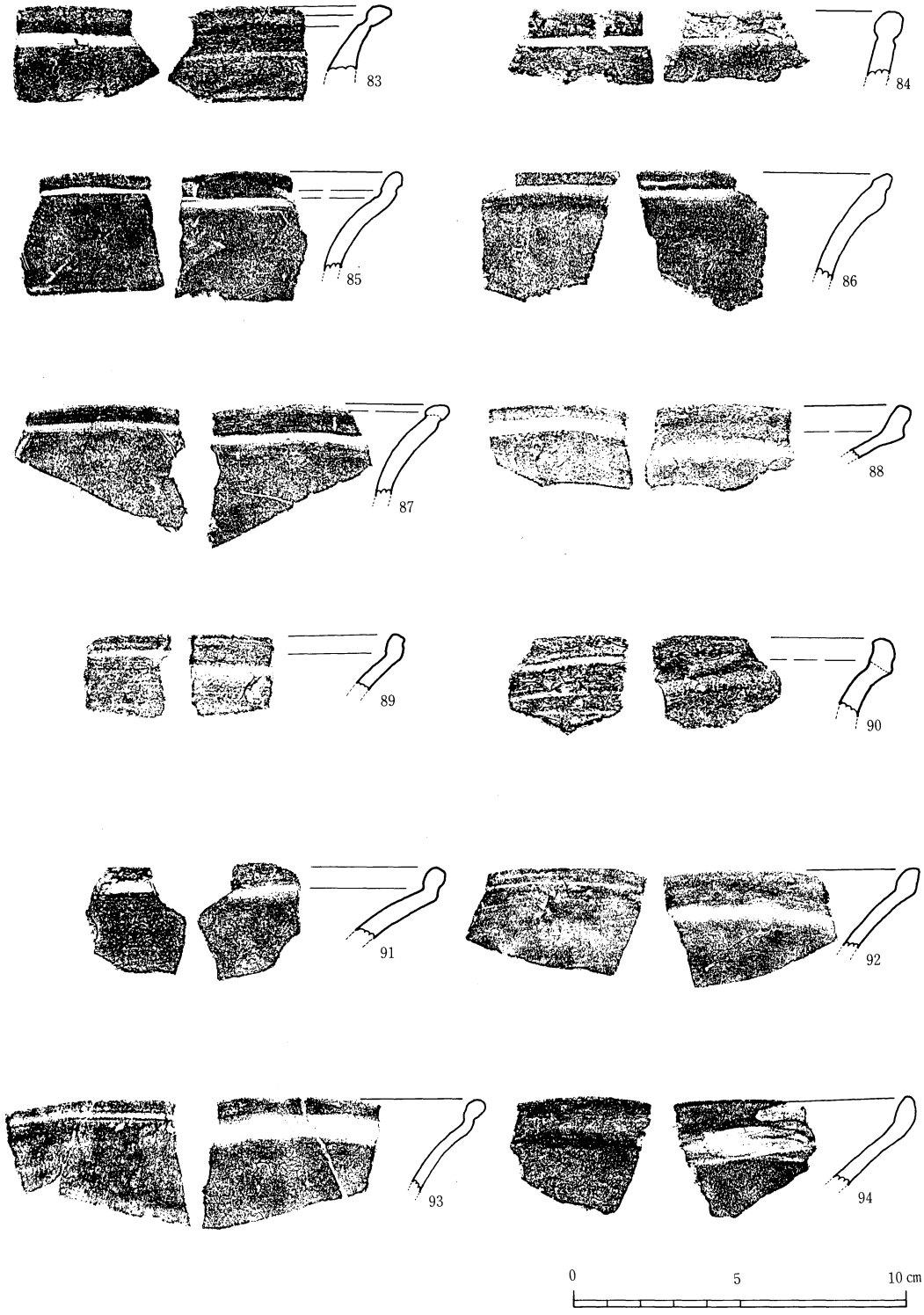
第25図　縄文土器実測図



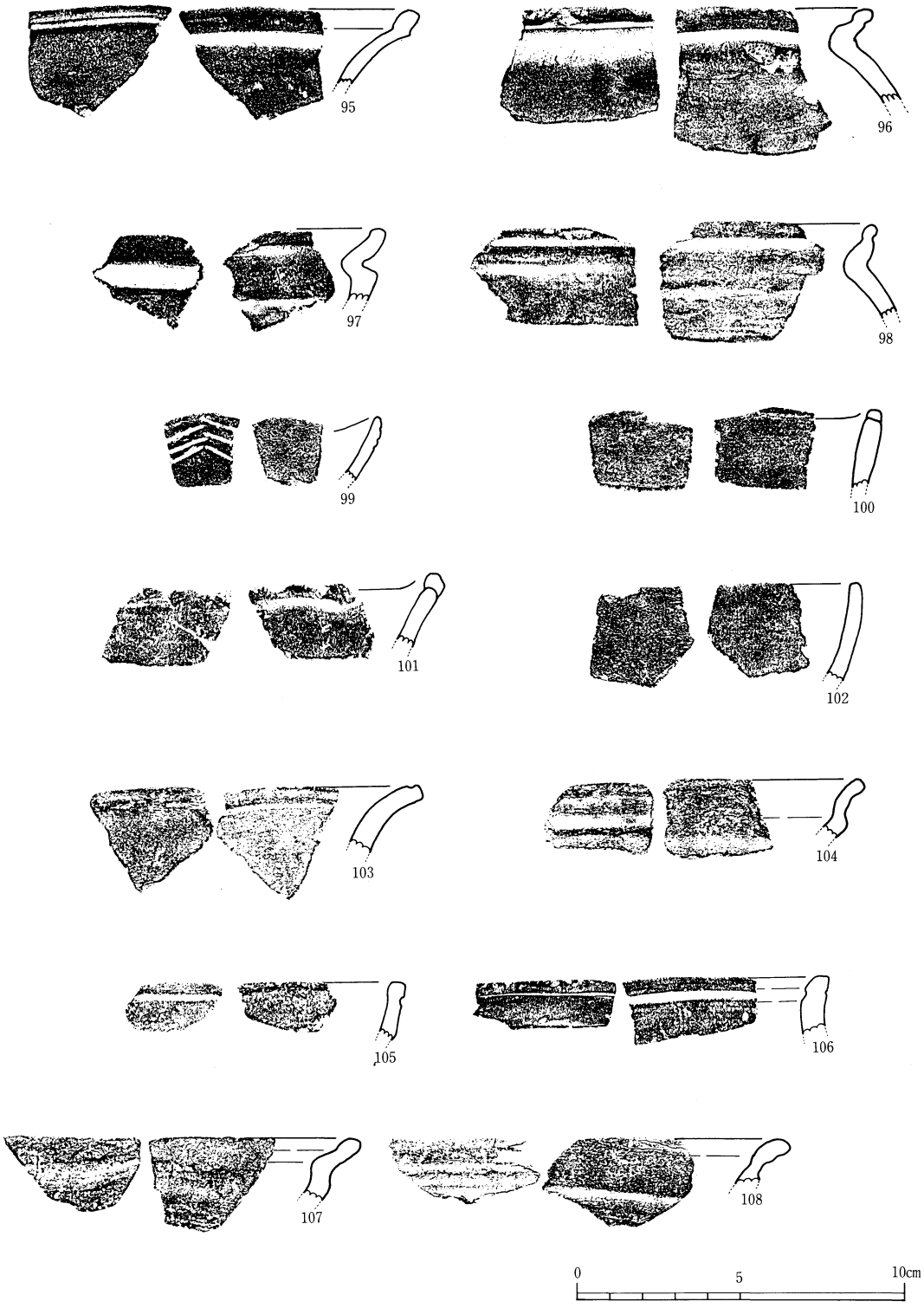
第 26 図　縄文土器実測図



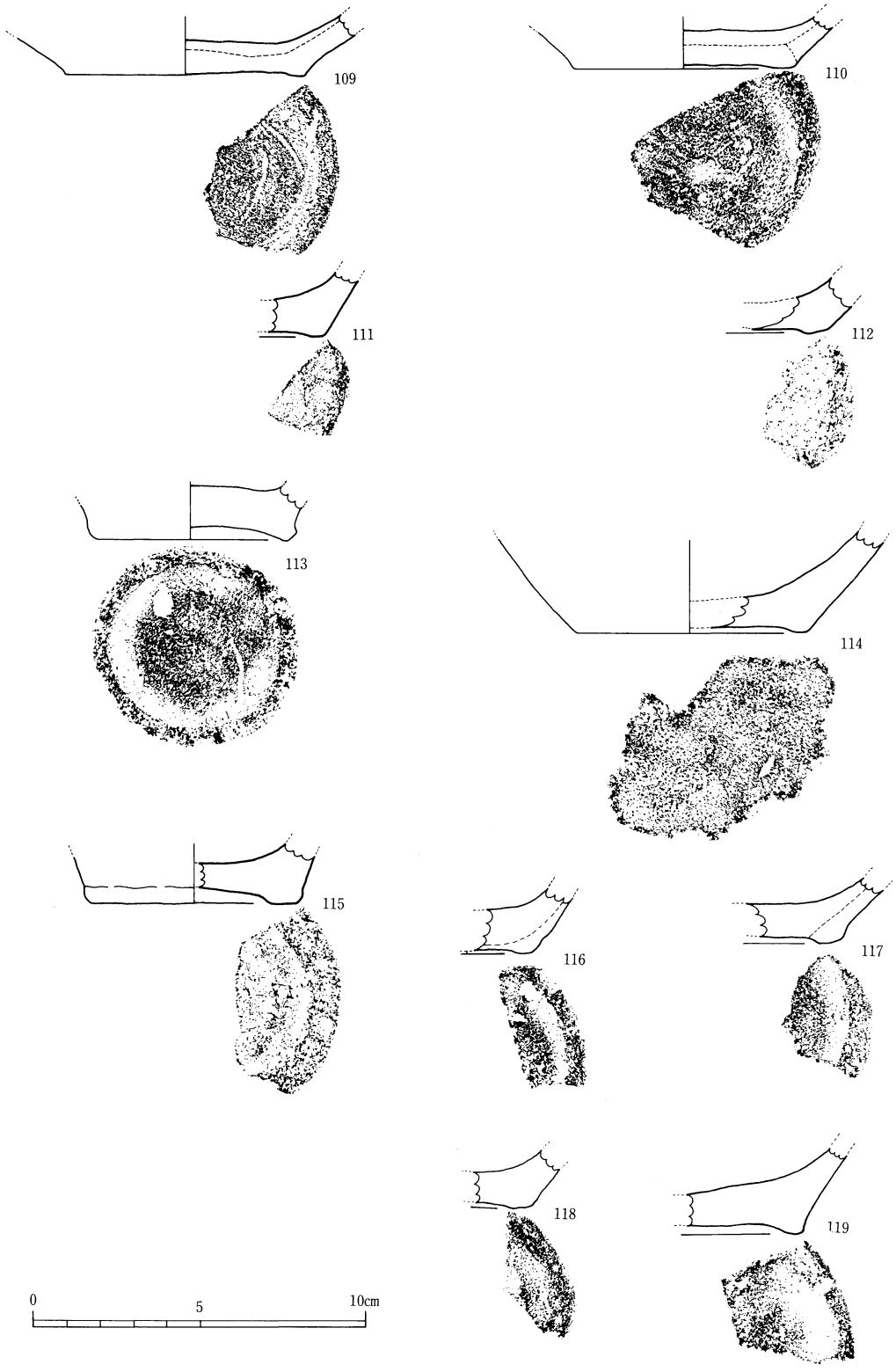
第 27 図　縄文土器実測図



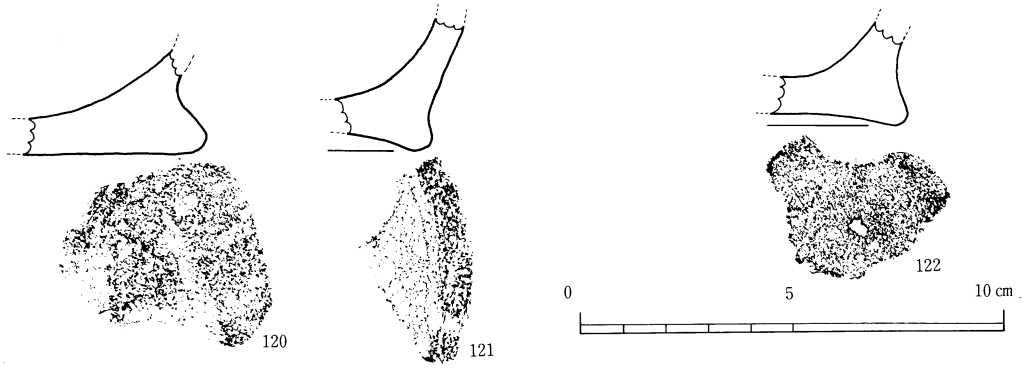
第28図　縄文土器実測図



第29図　縄文土器実測図



第30図　縄文土器実測図



第31図　縄文土器実測図

No.	器種	分類	Grid	層	部位	色調 外面	色調 内面	色調 断面	調整 外面	調整 内面	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 小礫	備考
1	深鉢		ZY-28	II	口縁部	暗茶色	暗茶色	暗茶色	山形文	原体刻文・山形文		○	○		原体刻文を施す。
2	浅鉢		H-16	V	口縁部	淡黄褐色	淡黄褐色	暗茶色	ナデ	ナデ	○	○			凹点を有する
3	浅鉢		H-16	V	口縁部	淡黄褐色	淡黄褐色	暗茶色	ナデ	ナデ	○				
4	浅鉢		A-15	V	口縁部	明茶色	明茶色	明褐色	ナデ	ナデ	○	○			
5	深鉢		A-24	VI	口縁部	明茶色	黒茶色	暗茶色	研磨	研磨		○			注口土器
6	浅鉢		K-10	V	口縁部	黒褐色	明茶褐色	灰褐色	研磨	研磨	○	○		○	
7	浅鉢		K-10	V	口縁部	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	ヘラナデ	ヘラナデ	○	○			凹点を有する
8	深鉢	A-1	ZY-21	III	口縁部	黒褐色	黒褐色	茶色	ヘラナデ	ヘラナデ	○	○		○	
9	深鉢	A-1	H-24	V	口縁部	暗茶色	暗茶色	暗茶色	ナデ	ナデ		○			
10	深鉢	A-1	A-15	IV	口縁部	明茶色	明茶色	明茶色	ナデ	ナデ	○	○			
11	浅鉢	B-1	A-15	V	口縁部	黒色	黒色	暗褐色	研磨	研磨	○	○			山形突起を有し，凹点を施す。
12	浅鉢	B-2	J-9	V	口縁部	暗黄色	暗茶褐色	淡黄色	研磨	研磨					
13	深鉢	A-2	J-9	V	口縁部	赤褐色	赤褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○			
14	深鉢	A-2	H-9	IV	口縁部	明茶色	黒色	暗灰色	ナデ	ナデ	○	○		○	
15	深鉢	A-2	H-16	V	口縁部	暗黄色	暗黄色	暗黄色	ナデ	ナデ	○	○			
16	深鉢	A-2	J-8	V	口縁部	暗赤褐色	暗赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	○				
17	深鉢	A-2	A-24	VI	口縁部	明茶色	暗茶色	明黄色	ナデ	ナデ	○	○			
18	深鉢	A-3	J-8	V	口縁部	茶色	茶色	明茶色	ナデ	ナデ	○				
19	深鉢	A-3	J-10	V	口縁部	茶褐色	暗褐色	暗褐色	ナデ	ヨコナデ	○	○		○	
20	深鉢	B	A-15	V	口縁部	黒色	黒褐色	暗茶色	磨き	磨き		○			
21	深鉢	C	ZY-21	III	口縁部	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	○	○			
22	深鉢	C	H-24	V	口縁部	暗茶色	暗茶色	暗茶色	ナデ	ナデ	○				
23	深鉢	C	A-15	IV	口縁部	明褐色	明茶色	明褐色	ナデ	ナデ	○	○			
24	深鉢	C	A-15	V	口縁部	暗褐色	暗茶色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○			
25	深鉢	C	A-15	V	口縁部	明黄色	明黄色	明黄色	ナデ	ナデ	○				
26	深鉢	C	J-9	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○		○	
27	深鉢	C	J-10	V	口縁部	赤褐色	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○			
28	深鉢	C	J-10	V	口縁部	暗茶色	赤褐色	暗茶色	磨き	磨き	○				
29	深鉢	C	J-10	V	口縁部	黒褐色	茶褐色	茶褐色	ナデ	磨き	○				
30	深鉢	C	J-10	V	口縁部	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	ヨコナデ	磨き	○	○			
31	深鉢	C	K-10	V	口縁部	明褐色	黒灰褐色	灰褐色	ヘラ磨き	ヘラ磨き		○			

表 7　縄文土器観察表

No.	器種	分類	Grid	層	部位	色調			調整		胎土				備考
						外面	内面	断面	外面	内面	角閃石	長石	石英	小礫	
32	深鉢	C	K-10	V	口縁部	淡黄色	明褐色	淡黄色	ヨコナデ	ナデ	○	○			
33	深鉢	D	H-9	III	口縁部	暗褐色	淡灰色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○			
34	深鉢	D	H-9	V	口縁部	明茶色	茶色	灰褐色	ナデ	ナデ	○			○	
35	深鉢	D	H-16	V	口縁部	暗黄色	明黄色	暗黄色	ナデ	ナデ	○	○			
36	深鉢	D	J-8	V	口縁部	赤褐色	暗黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	○			○	
37	深鉢	D	J-9	V	口縁部	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○			
38	深鉢	D	J-9	V	口縁部	暗茶色	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○			
39	深鉢	D	K-9	V	口縁部	黒褐色	暗黄色	暗黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○		○	
40	深鉢	D	K-10	IV	口縁部	黄褐色	暗黄色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○			
41	深鉢	D	K-10	V	口縁部	淡黄色	明褐色	淡黄色	ヨコナデ	磨き	○	○			
42	深鉢	D	H-16	VI	口縁部	明茶色	明茶色	暗茶色	ナデ	ナデ	○	○			
43	深鉢	D	A-15	III	口縁部	明黄色	明黄色	明黄色	ナデ	ナデ	○	○			
44	深鉢	D	J-8	V	口縁部	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ	○				
45	深鉢	D	J-8	V	口縁部	黒褐色	明茶褐色	黒褐色	ナデ	ヨコナデ	○	○		○	
46	深鉢	D	J-8	V	口縁部	黒褐色	黒褐色	暗褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○		○	
47	深鉢	D	J-9	IV	口縁部	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○		○	
48	深鉢	D	J-9	IV	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ナデ	ヨコナデ	○				
49	深鉢	D	J-10	V	口縁部	暗赤褐色	黒褐色	暗赤褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○		○	
50	深鉢	D	K-10	IV	口縁部	黄褐色	暗黄色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○			
51	深鉢	D	K-10	IV	口縁部	暗褐色	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○			
52	深鉢		H-16	V	胴部	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ	○	○			
53	深鉢		H-16	V	胴部	暗灰色	暗灰色	明褐色	ナデ	ナデ	○	○			
54	深鉢		H-16	V	胴部	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	○	○			
55	深鉢		H-16	V	胴部	明茶色	暗茶色	明茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○		○	
56	深鉢		H-24	V	胴部	暗茶色	暗茶褐色	明茶色	ナデ	ナデ	○	○			
57	深鉢		A-15	V	胴部	暗茶色	暗茶色	暗茶色	ナデ	ナデ	○	○			
58	深鉢		A-15	V	胴部	明茶色	暗褐色	明茶色	ナデ	ナデ	○	○			
59	浅鉢	A	H-16	V	口縁部	暗褐色	暗赤褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○			
60	浅鉢	A	A-15	V	口縁部	暗褐色	明褐色	暗茶色	ナデ	ナデ		○			
61	浅鉢	A	J-9	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	○				
62	浅鉢	A	K-10	V	口縁部	暗褐色	黄褐色	黄褐色	研磨	研磨					
63	浅鉢	B-1	A-15	V	口縁部	暗茶色	明茶色	暗茶色	研磨	研磨	○				3点の凹点を有する
64	浅鉢	B-1	H-16	V	口縁部	暗褐色	黒色	明褐色	研磨	研磨	○	○			
65	浅鉢	B-1	H-16	VI	口縁部	明褐色	茶黒色	暗褐色	研磨	研磨	○	○			
66	浅鉢	B-1	A-15	IV	口縁部	明褐色	茶黒色	明黄色	ナデ	研磨	○				
67	浅鉢	B-1	A-15	V	口縁部	茶黒色	茶黒色	暗褐色	研磨	研磨	○	○			
68	浅鉢	B-1	A-15	V	口縁部	茶黒色	黒色	暗褐色	研磨	研磨	○	○			
69	浅鉢	B-1	J-8	V	口縁部	淡黄色	暗黒色	淡黄色	研磨	研磨	○				
70	浅鉢	B-1	J-8	V	口縁部	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	研磨	研磨					
71	浅鉢	B-1	J-10	V	口縁部	淡黄色	暗茶褐色	淡黄色	研磨	研磨	○	○			
72	浅鉢	B-1	J-10	V	口縁部	淡黄色	黄褐色	淡黄色	研磨	研磨	○	○			
73	浅鉢	B-1	J-10	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	研磨	研磨	○	○			
74	浅鉢	B-1	K-10	V	口縁部	明茶褐色	暗褐色	暗褐色	研磨	研磨	○	○			
75	浅鉢		H-9	V	口縁部	茶色	黒色	茶色	研磨	研磨	○				
76	浅鉢	B-2	H-16	V	口縁部	淡赤褐色	淡赤褐色	暗黄色	ヘラナデ	ヘラナデ	○				
77	浅鉢	B-2	H-16	V	口縁部	暗赤色	暗赤色	暗赤色	ナデ	ナデ	○				
78	浅鉢	B-2	A-15	V	口縁部	明黄色	明黄色	明黄色	研磨	研磨	○	○			
79	浅鉢	B-2	J-10	IV	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	研磨	研磨	○				
80	浅鉢	B-2	J-9	V	口縁部	明褐色	暗褐色	淡黄色	研磨	研磨					

表8　縄文土器観察表

No.	器種	分類	Grid	層	部位	色調 外面	色調 内面	色調 断面	調整 外面	調整 内面	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 小礫	備考
81	浅鉢	B-2	J-9	V	口縁部	淡黄色	黒褐色	灰褐色	研磨	研磨	○				
82	浅鉢	B-2	K-10	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	研磨	研磨	○	○			
83	浅鉢	B-3	A-15	V	口縁部	明茶色	明茶色	明茶色	ナデ	ナデ		○			
84	浅鉢	B-3	J-9	V	口縁部	赤褐色	赤褐色	赤褐色	研磨	研磨	○				
85	浅鉢	B-3	J-10	V	口縁部	明茶色	黒褐色	淡黄色	研磨	研磨	○				
86	浅鉢	B-3	J-10	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	研磨	研磨	○	○			
87	浅鉢	B-3	J-10	V	口縁部	黄褐色	黄褐色	黄褐色	研磨	研磨	○				
88	浅鉢	C	H-9	V	口縁部	暗褐色	暗褐色	暗灰色	研磨	研磨	○				
89	浅鉢	C	A-15	III	口縁部	暗灰色	暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ	○				
90	浅鉢	C	A-15	V	口縁部	明茶色	暗茶色	明褐色	ナデ	ナデ	○				
91	浅鉢	C	A-15	V	口縁部	明灰色	暗褐色	明褐色	ナデ	ナデ	○				
92	浅鉢	C	J-8	V	口縁部	淡黄褐色	暗褐色	黄褐色	研磨	研磨	○	○			
93	浅鉢	C	J-8	V	口縁部	淡黄色	暗黄色	淡黄色	研磨	研磨					
94	浅鉢	C	J-9	V	口縁部	暗茶色	暗茶色	茶褐色	研磨	研磨					
95	浅鉢	C	J-9	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	研磨	研磨					
96	浅鉢	D	J-8	V	口縁部	黒褐色	黒褐色	灰褐色	研磨	研磨					
97	浅鉢	D	J-9	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	研磨	研磨	○	○		○	
98	浅鉢	D	J-10	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	研磨	研磨		○			
99	浅鉢	E	K-10	V	口縁部	淡黄色	暗褐色	暗褐色	研磨	研磨	○				
100	浅鉢	F	H-9	V	口縁部	黒色	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○				
101	浅鉢	F	J-8	V	口縁部	明茶色	暗茶色	暗茶色	研磨	研磨				○	波状突起を施す
102	浅鉢	F	K-10	V	口縁部	茶褐色	暗褐色	暗褐色	ナデ	研磨	○	○			
103	浅鉢	F	ZY-21	III	口縁部	淡黒色	黒褐色	暗緑色	研磨	研磨				○	
104	浅鉢	G	H-16	V	口縁部	暗茶色	暗赤色	暗茶色	研磨	研磨	○	○		○	
105	浅鉢	H	J-8	V	口縁部	茶褐色	暗黒色	茶褐色	ナデ	ナデ	○	○			
106	浅鉢	H	K-10	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	研磨	研磨		○		○	
107	浅鉢	I	H-16	IV	口縁部	赤褐色	暗褐色	暗褐色	研磨	ナデ	○	○		○	
108	浅鉢	I	H-9	V	口縁部	黒色	暗褐色	明褐色	ナデ	研磨	○		○		
109	深鉢	A	K-10	V	底部	明茶褐色	黒褐色	暗褐色	磨き	ナデ	○	○		○	
110	深鉢	B	J-10	V	底部	明茶褐色	暗褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	○	○			
111	深鉢	B	H-16	V	底部	暗茶褐色	淡黒色	暗茶褐色	ナデ	ナデ	○	○			
112	深鉢	B	A-15	III	底部	明茶色	明茶色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	上げ底
113	深鉢	B	H-16	V	底部	明茶色	黒色	黒色～灰茶色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	内面の真中が高くなる
114	深鉢	B	J-8	V	底部	茶褐色	暗褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○		○	
115	深鉢	B	A-15	V	底部	明茶色	明茶色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○			
116	深鉢	B	J-10	V	底部	茶褐色	茶褐色	暗褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○		○	
117	深鉢	B	J-9	V	底部	茶褐色	暗褐色	暗褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○		○	
118	深鉢	B	J-10	V	底部	暗茶褐色	暗褐色	明茶褐色	磨き	ナデ	○	○		○	
119	深鉢	B	K-10	V	底部	茶褐色	褐色	茶褐色	ナデ	磨き	○	○			
120	深鉢	C	ZY-21	III	底部	明茶色	黒色	明茶色	ナデ	ナデ	○	○			
121	深鉢	C	H-16	V	底部	暗黄褐色	暗黄色	暗黄色	ナデ	ナデ	○	○			
122	深鉢	C	K-10	V	底部	暗茶褐色	暗黄褐色	暗褐色	ヨコナデ	磨き	○	○			

表9　縄文土器観察表

2．土　製　品（第32図　123～128）

宮地前遺跡では今まで土偶が数点発見されており，その存在が確認されていた。

今回の調査でも土偶と思われる土製品3点を含め，注口土器，紡錘車形土製品，粘土塊が出土している。

注口土器（123）　注口土器の注口部と思われる。内面はナデ，外面は磨きで仕上げており外面の方をていねいに調整している。また遺物の破損部はいずれも明瞭で粘土と粘土の継ぎ目で破損しているものと考えられる。時期的には後期後半になり，大野川流域などの山間部に土偶などとともに出現するものである。

土　偶（124～126）　124は肩部である。入れ墨を意識したものか，細い沈線が11本施文されている。なお宮地前遺跡では同じように体部に沈線を施した土偶も見つかっており同様の類と考えられる。125は腕部と考えられる。粘土を握り棒状に丸めた感じで，腕を大の字に広げていたものであろう。126は脚部である。全体的には丸棒状であるが，上部はややふくらみを持ち，下部では足首を意識してかやや厚みをもたせて表現している。以上の土偶は一括して後期としておく。127は**紡錘車形土製品**である。遺物は浅鉢土器片を再加工したものと考えられ，両面共に精製研磨されている。時期的には不明な点が多いが，後期末～晩期前半のころの資料と考えたい。九州内において紡錘車形土製品は後期三万田式期のころから出現するものと考えられており，大分県下の大野川流域を中心とした晩期遺跡でも散発的に発見されている。

以上の点からこの山間部でも紡錘車そのものとしての用途を積極的に考え，編物や織物などの紡織技術の存在をこの宮地前遺跡でも考えて良いのではなかろうか。

粘 土 塊（128）　本遺跡の注目すべき遺物として焼粘土塊が挙げられる。焼粘土塊の発見は全国の縄文時代遺跡の中でみてもまれである。遺物は土器製作のための練りの段階のものと考えられ，明瞭に右手からと左手からの指圧痕が4つずつ残っており，握り固めた感じである。側面と裏面にもそれぞれ1つ指圧痕が残っており生々しい感じである。

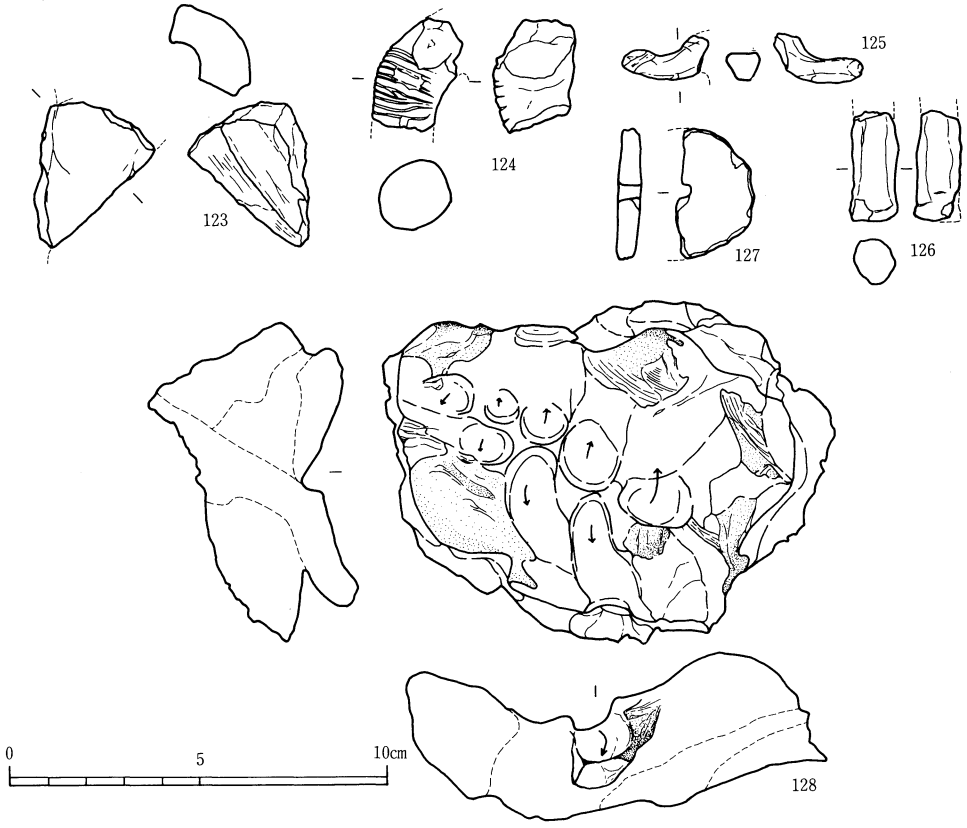
この粘土塊が，不要のものとして廃棄されたものか，意識して焼成したものかは不明である。

いずれにしても宮地前遺跡で土器製作が行われていた痕跡であろう。資料の発見数が少ないだけに当時の集落内における土器製作にかかわる貴重な研究資料である。(注)

注　今井堯「焼粘土塊と生粘土貯蔵穴」考古学研究　第34巻　3号，135号，1987年

番号	種類	Gird	層	色　調	胎　土				備　考
					角閃石	長石	石英	小礫	
123	注口土器			茶　褐　色	○	○			
124	土　偶	K-10	V	茶　褐　色	○	○			
125	土　偶	J-9	V	茶　褐　色		○			
126	土　偶	J-8	IV	茶　褐　色		○			ヘラ状工具により磨きが施される
127	紡 錘 車	J-10	IV	外面黄褐色 内面暗灰色	○				浅鉢土器片の再加工品
128	粘 土 塊	H-16	IV	暗 茶 褐 色	○	○			焼成による煤が付着している

表10　土製品観察表



第32図　土製品実測図

3．石　　器

縄文時代の石器は第1次調査で26点，第2次調査で209点，第3次調査で157点，合計392点出土している。器種には，打製石斧，横刃形石器，2次加工剝片，敲石類，刀剣形石製品，石皿などがあり，少数ではあるが，礫器，石鏃もみられる（第36･37図）。第1次調査ではⅠ層に集中的に出土しており，第2・3次調査では，Ⅴ層に出土点数のピークがみられる。器種別にみた場合，第1～第3次調査を通じて剝片がもっとも多い。第1，2次調査では続いて砕片が多く，第3次調査では打製石斧が多い。

石材には安山岩が多く，石鏃にはサヌカイト質の安山岩やチャート，刀剣形石製品には結晶片岩が用いられている。2次加工剝片や剝片，砕片はほとんどが黒曜石製で，石器全体の約24％を占めている。

打製石斧（第33図　1～　第35図　22）

第1次調査で3点，第2次調査で25点，第3次調査で50点，合計78点が出土した。この数は全体の約19％を占めるが，出土したもののほとんどが約5cm前後の小片である。したがって，実測図に提示したものは，完成品と破損程度の軽い22点に限ることとした。完形品は1・2・

3・4・6・9のわずか6点ではあるが，長幅比グラフ（表14）に表してみると，長さ：幅＝1：2の直線周辺に集まる傾向がみられた。

石材はすべて安山岩で，表裏に2と22以外はすべて節理面が多く認められる。このことは，安山岩製の石核を節理面に沿って加撃し，素材を獲得したことを想起させる。

また，これら22点の打製石斧は，外形によってⅠa・Ⅰb・Ⅱ・Ⅲ類の4形態と未成品に分類される。

Ⅰa類（1～11）

「短冊形」と呼ばれるもので，刃部，基部ともに同じ幅をもつ。これらはさらに，刃部の平面形から円刃を呈するもの（1・3～5・8～11）と，直刃を呈するもの（2・6）に区別される。1

器種＼土層	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	計
打製石斧	3					3
横刃形石器			1			1
剝片	9	2	7		2	20
砕片		1				1
石皿					1	1
計	12	3	8	0	3	26

表11　第1次調査における層序別石器組成表

器種＼土層	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ$^{a}_{b}$	計
打製石斧	3	2	45	50
横刃形石器		2		2
ノミ形石器			1	1
礫器			1	1
2次加工剝片		3	3	6
石鏃			2	2
剝片	1	24	45	70
砕片		3	15	18
敲石類			5	5
刀剣形石製品	1		1	2
計	5	34	118	157

表13　第3次調査における層序別石器組成表

器種＼土層	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	計
打製石斧			3	1	15	6	25
2次加工剝片					2	1	3
石鏃					1		1
剝片	1		9	5	94	33	142
砕片			5	2	25	2	34
敲石類					1		1
石皿					1		1
刀剣形石製品					1		1
管玉					1		1
計	1	0	17	8	141	42	209

表12　第2次調査における層序別石器組成表

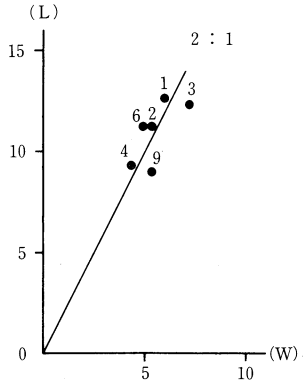


表14　打製石斧の長幅比グラフ

は刃部・基部の両端に磨滅[注1]がみられ，裏面には中間部にまで達する大きな剝離がみられる。

この剝離後さらに，細かな調整剝離が施されている。2は表面に礫面を残し，他のものに比べて厚手である。7は欠損品であるが円刃を呈するものとみなされる。この打製石斧に認められる右側縁中部の磨滅は，敲打によるものか，研磨によるものか明確でない。4・6・9は他に比べやや小形のもので，4・9は表面に礫面を残している。10は左側縁中部に7で認められたような磨滅を残しいる。また，刃部にも磨滅がみられる。この打製石斧は刃部のみを残しているが，I_a類に所属すると考えて良いであろう。11は刃部の表裏に顕著な磨滅を残している。

I_b類（12〜14）

I_b類はI_a類と同じく「短冊形」を基本とするが，右左側縁のどちらかに湾曲する。12は刃部側の両側に磨滅が確認されるが，刃部が欠損しているために左側縁の磨滅がどの範囲にまでおよぶかは判断しかねる。また，裏面の上部にある稜線も磨滅している。13は12・14に比べて幅が狭く，表面には礫面を残している。14は表面右側上部に，わずかに礫面を残しており，表面に3枚の大きな剝離痕が認められる。

II類（15〜19）

刃部が基部よりも広い幅を持つもので，「撥形」を呈する。15・17は円刃，16は直刃を呈し，19については不明である。17は円刃としたが，やや片よりをみせるため偏刃として区別することもできる[注2]。この打製石斧は刃部に著しい磨滅を残し，刃部を整形する剝離の稜線にまでおよんでいる。

III類（21）

「分銅形」で，本遺跡において1点のみ確認された。一見，円盤形石製品のようにも思われるが，側面からみると，欠損面側がもっとも厚くなっていることからIII類として扱った。この打製石斧の刃部には磨滅が認められる。

未成品（20・22）

20は他のものに比べてかなりの厚さを呈し，22は調整剝離が他のものよりも十分に行われていないために，未成品として区別した。しかし22は，礫面を残す表面の左側縁中部に磨滅を残し，右側縁上部には磨滅かあるいは研磨による不明瞭な痕跡がみられる。この痕跡は素材剝取の段階以前のものか以後のものか明確でない。ただ，打製石斧の素材を得るために石皿を石核として再利用されたための痕跡とも考えられる[注3]。また，左側縁にみられる磨滅から，調整剝離を入念に行わずに使用されたことも考えられる。

横刃形石器（第36図　23・24）

「石包丁形石器」「石鎌形石器」と呼ばれるものがこれに相当する。この石器は安山岩製の横長剝片を素材とし，剝片の鋭利な部分を残して背部を形成する。また，調整剝離によって刃部を整えることもある。1次調査で1点，3次調査で2点出土した。

23は大形で薄手の横長剝片を素材としたもので，刃部にわずかな加工があり，右側端部の剝離は円刃を意識したかのようである。左側の端部には磨滅が認められる。24も同じく横長剝片

を素材としたもので，円刃を呈している。

ノミ形石器（第36図　25）

3次調査で1点のみ出土した。側縁に調整剥離を残し，両面に研磨が施されている。研磨の方向は不明である。

礫器（第36図　26）

第3次調査で1点出した。安山岩製の残核を素材に用いたものとも思われるがさだかでない。刃部はa図の右側縁上半部に設けられ，両面から施されている。左側部には礫面を残している。a図は2枚の剥離痕が大部分を占め，2枚ともネガティブな面を呈している。c図に認められる1枚の大きな剥離痕はポジティブな面を呈し，一部節理面がみられる。c図の左側部に認められる上方からの剥離痕は，ポジティブな面の後に施されている。

2次加工剥片（第37図　27～31）

2次調査で3点，3次調査で6点出土した。27は両面に面的な加工を施したもので，一見クサビ形石器のようである。28は末広がりな横長剥片を素材としたもので，左側縁に微細な2次加工を施している。29はネガ面右側縁に大まかな2次加工を施し，ポジ面右側縁には微細な2次加工を施したものである。30は27と同じくクサビ形石器を思わせるような刃部を呈する。31はポジ面側から急角度の2次加工を施したものである。

石鏃（第37図　32～34）

2次調査で1点，3次調査で2点出土している。32・33はサヌカイト質の安山岩製で，34はチャート製である。すべて凹基無茎鏃[注4]として区別され，32は33・34に比べて脚部が長い。

剥片（安山岩製）（第38図　35・36）

35は不定形の大形な剥片で，ネガ面上部には上方からの細かな剥離が多く認められる。ポジ面側にも剥片剥離後の剥離がみられるが，アクシデントによる可能性が高い。36はネガ面に打面側からの剥離痕を有する縦長剥片である。2点とも第3次調査で出土した。

敲石類（第39図　37～39）

第2次調査で1点，第3次調査で5点出土している。敲石類として区別したのは，本遺跡より出土する礫石器に，敲打痕と磨痕の2つが同時に認められるものが存在するからである。37はかなりの破損を受けているが，側縁部に敲打痕を残し，側縁部付近と両面中央部に磨痕が認められる。側縁部付近の磨痕は側縁部にまで達している。38は周縁部と中央部に敲打痕を残しているが，磨痕は認められない。39は完成品で，全周縁とa図中央部に敲打痕を残し，c図中央部には磨痕を残している。断面図（d図）でわかるように，磨石として使用されたために一方が薄くなっている。

石皿（第40図　40・41）

40は第1次調査，41は第2次調査で出土した。40は重量6,500gを計る大形な石皿で，表面の風化が激しいために使用された面が明確でない。この石皿は中央部がくぼみ，下方へと薄手になっている。41はほとんど原形を復原し得ないものであるが，使用された面を残している。

刀剣形石製品(注5)（第41図　41～44）

第2次調査で1点，第3次調査で2点出土した。いずれも両端のどちらか一方を残すもので，表面の風化も著しい。41・43は断面が楕円状となっている。石材はすべて結晶片岩である。

管玉（第41図　45）

中央にややふくらみをもつもので，縦に半割している。孔は両端からうがっており，図面上の上部の方が後に浅く施されている。表面はなめらかに研磨されている。

表採遺物（第42図　46～52）

46はⅠa類の打製石斧である。安山岩製の横長剝片が素材とされ，素材剝取の段階で節理面に沿って加撃されている。刃部は円刃を呈し，磨滅を残している。47は磨製石斧である。刃部のみ残存しており，蛤刃を呈する。研磨の方向は確認できない。48はⅡ類の打製石斧で，刃部付近の表面に磨滅を残し，裏面は刃部を整形する稜線にまで達する磨滅がみられる。49.Ⅱ類の打製石斧で，安山岩製の縦長剝片を素材としたものである。裏面には素材時のバルブを残し，表面は横方向からの大きな剝離痕を残している。また，左側縁中部には刃こぼれ状の小剝離痕が認められる。50は横刃形石器で，端部の両面には磨滅が認められ，さらに研ぎ出しと思われる痕跡も観察される。また，表面のほぼ全面と，裏面の端部付近に研磨が施されている。石材は安山岩であるが，当遺跡で認められるものとは質の異なるものである。51は横長剝片を素材としたもので，刃部は直線状となり，表面中央部の刃部付近の稜線に，刃と平行な線状痕を残している。表面には礫面を残し，裏面には打点も認められる。52は敲石類で，周縁部と両面中央部に敲打痕を残し，周縁部付近には磨痕がみられる。a図右側部とc図左側部には敲打による剝落が認められる。

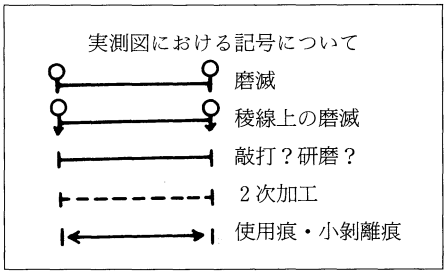
（注1）　磨滅という語を用いたのは，打製石斧に残る痕跡が装着によるものかの区別が不明確なためである。

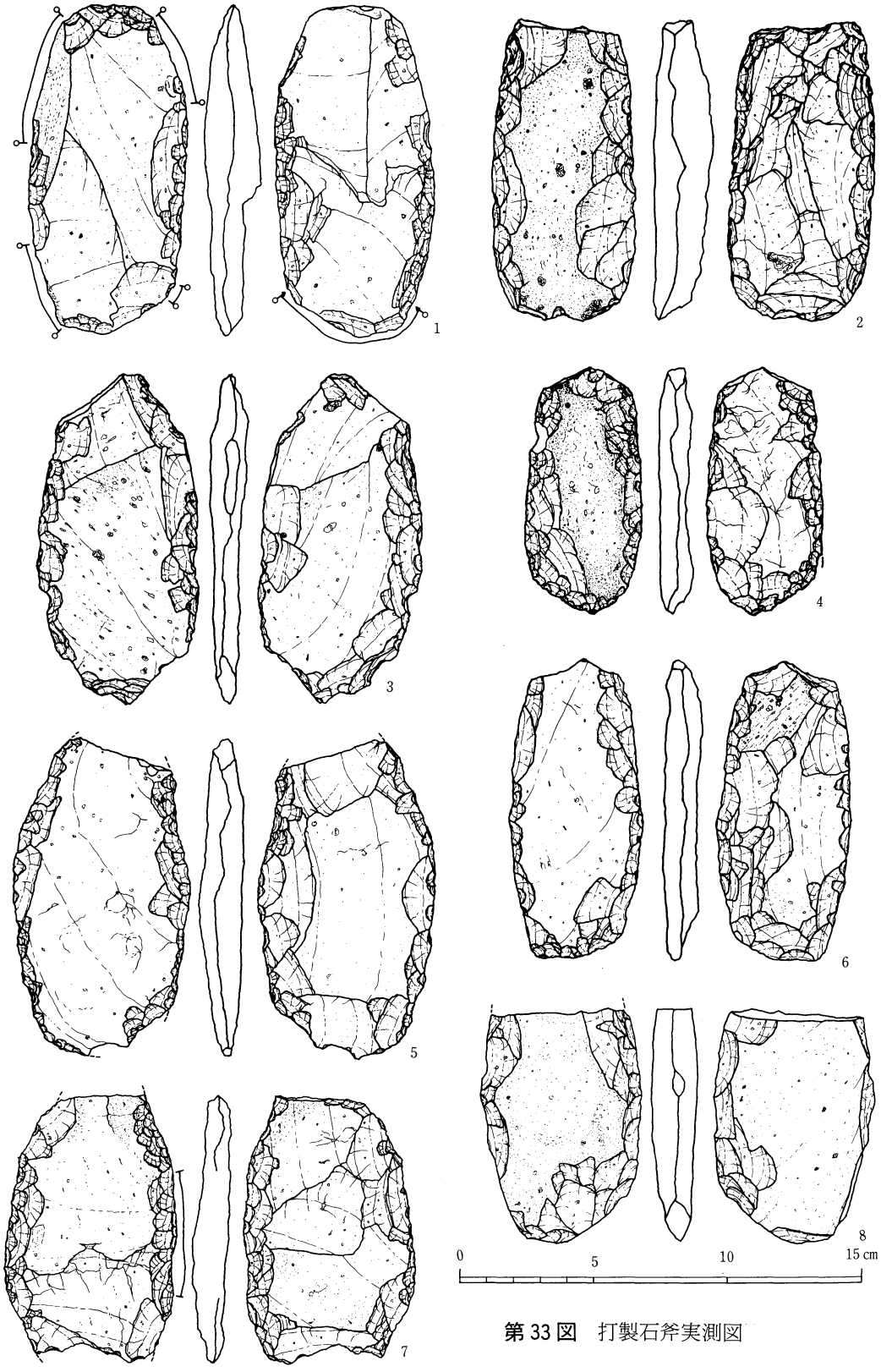
（注2）　佐原真「石斧論―横斧から縦斧へ―」『考古論集　慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集　別冊』の刃部平面形の分類に従った。

（注3）　大分県教育委員会「緒方条里内遺跡」1987　Ⅵ大坪遺跡において，石皿に接合した安山岩製の剝片が報告されている。ここで報告者は，「石質は扁平打製石斧の素材となりうるものであり」と述べ，石皿の再利用を示唆している。

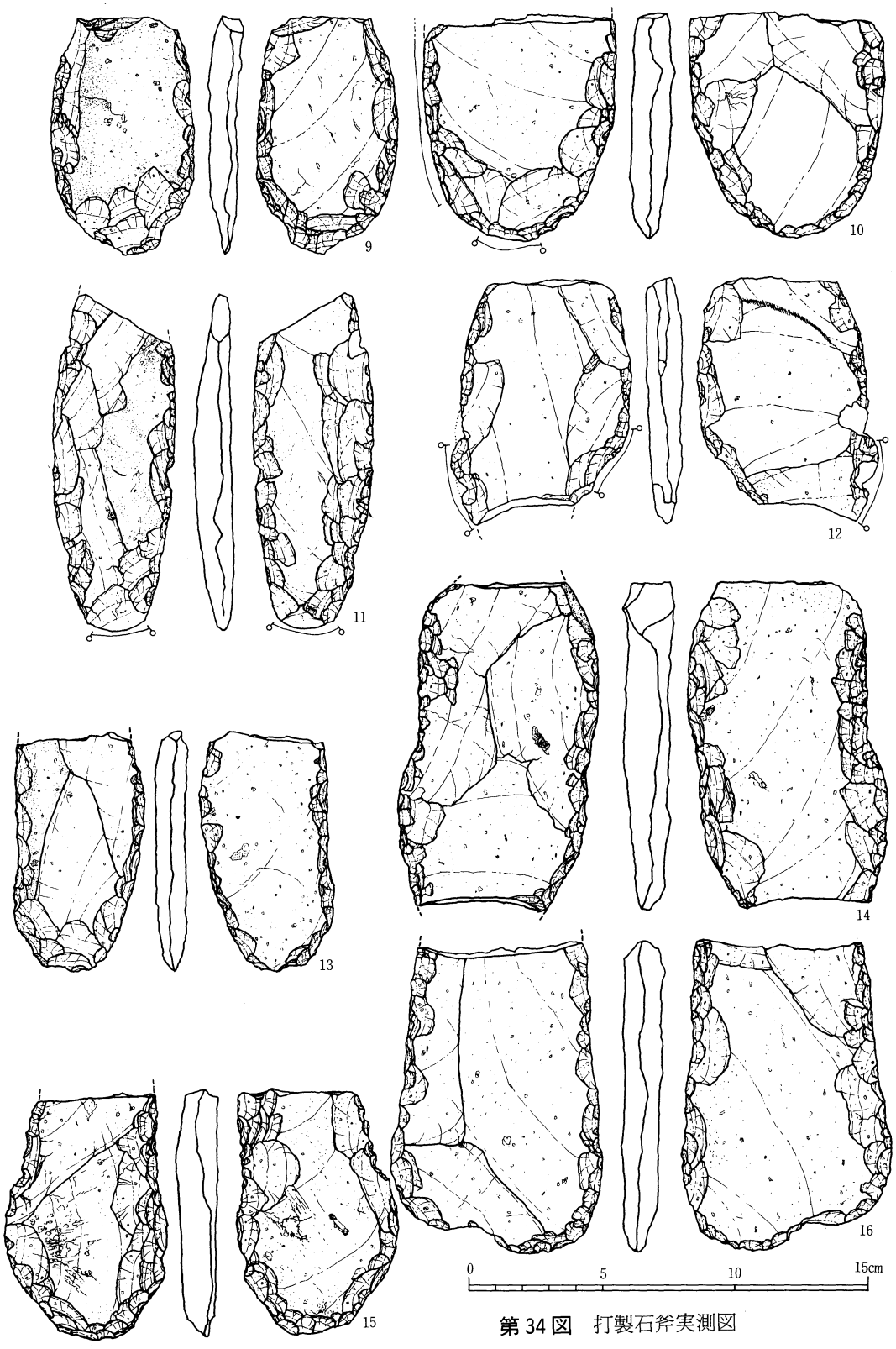
（注4）　鈴木道之助「石器の基礎知識Ⅲ」の石鏃の分類法に従った。

（注5）　後藤信祐「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究(上)(下)」『考古学研究』33-3 1986，33-4 1987の文中においてこの名称を使い，その有意性について述べている。
本報告においては，これらの石器類の残存状況から，石棒・石剣などの区別が不可能であるため，これらを総称し，また，あくまで便宜的にこの名称を用いることとした。

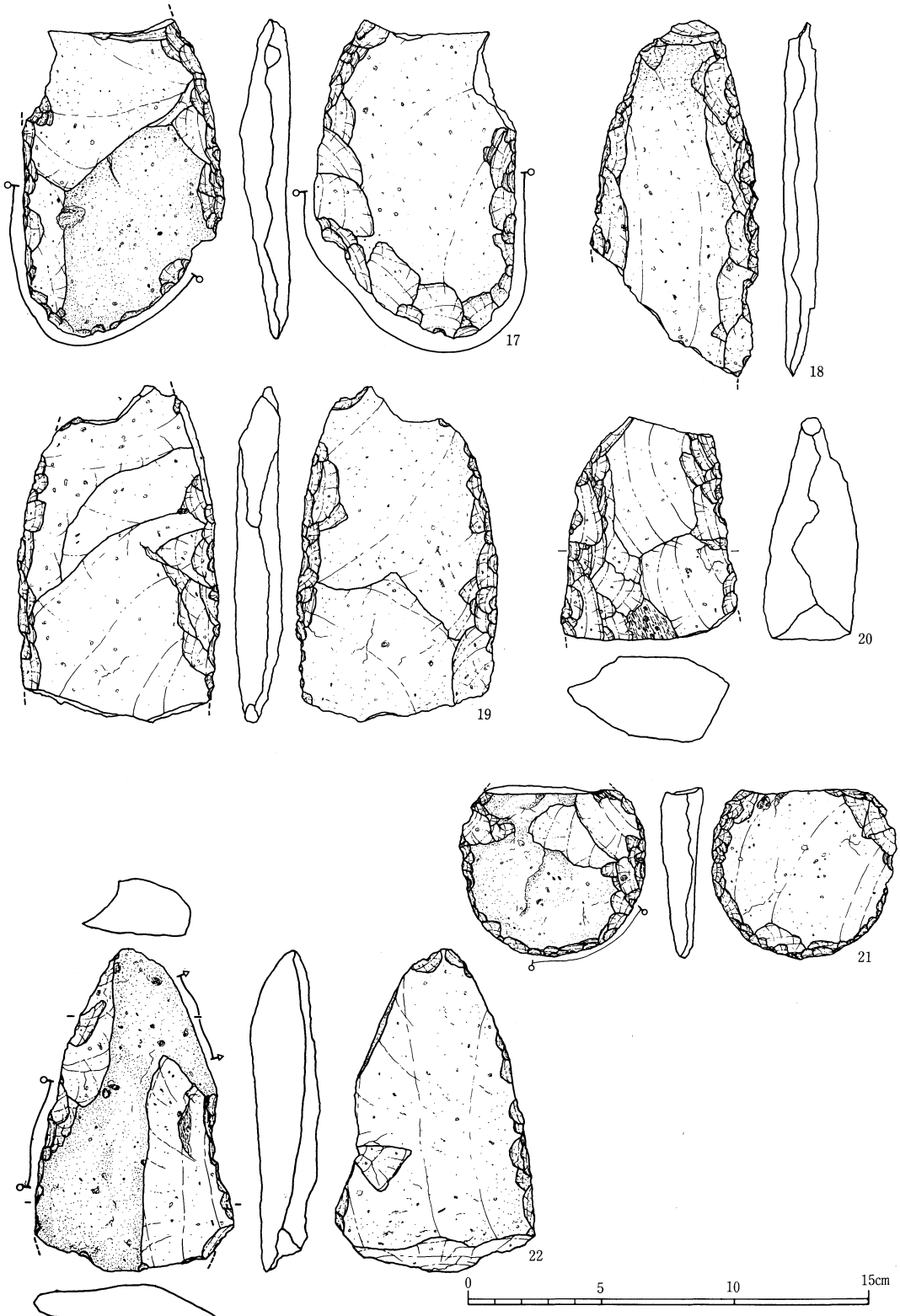




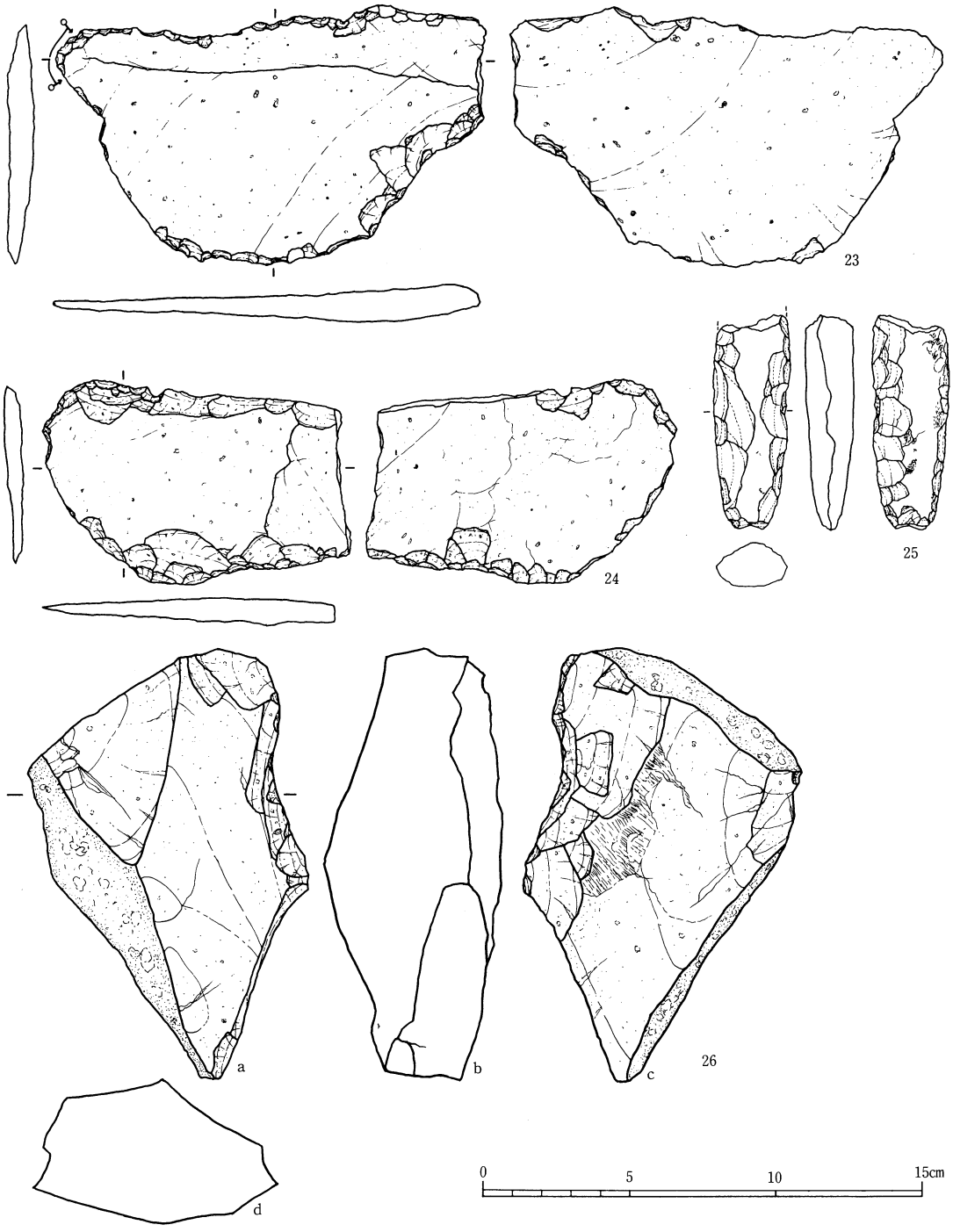
第33図　打製石斧実測図



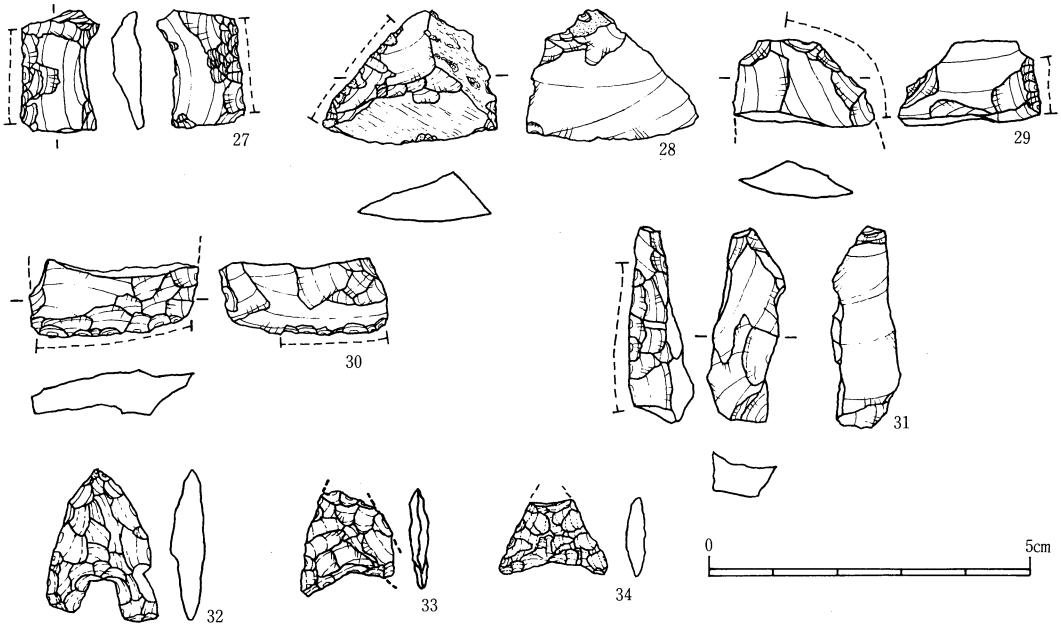
第34図　打製石斧実測図



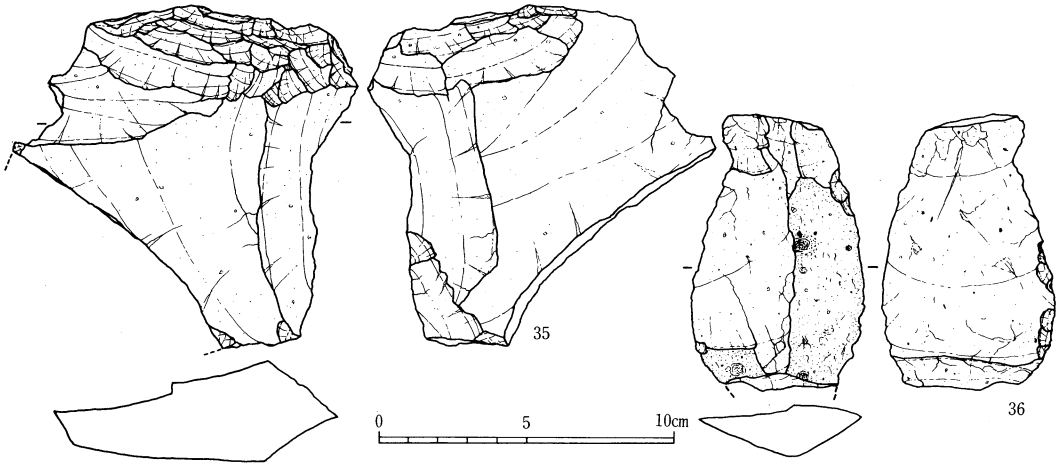
第35図　打製石斧実測図



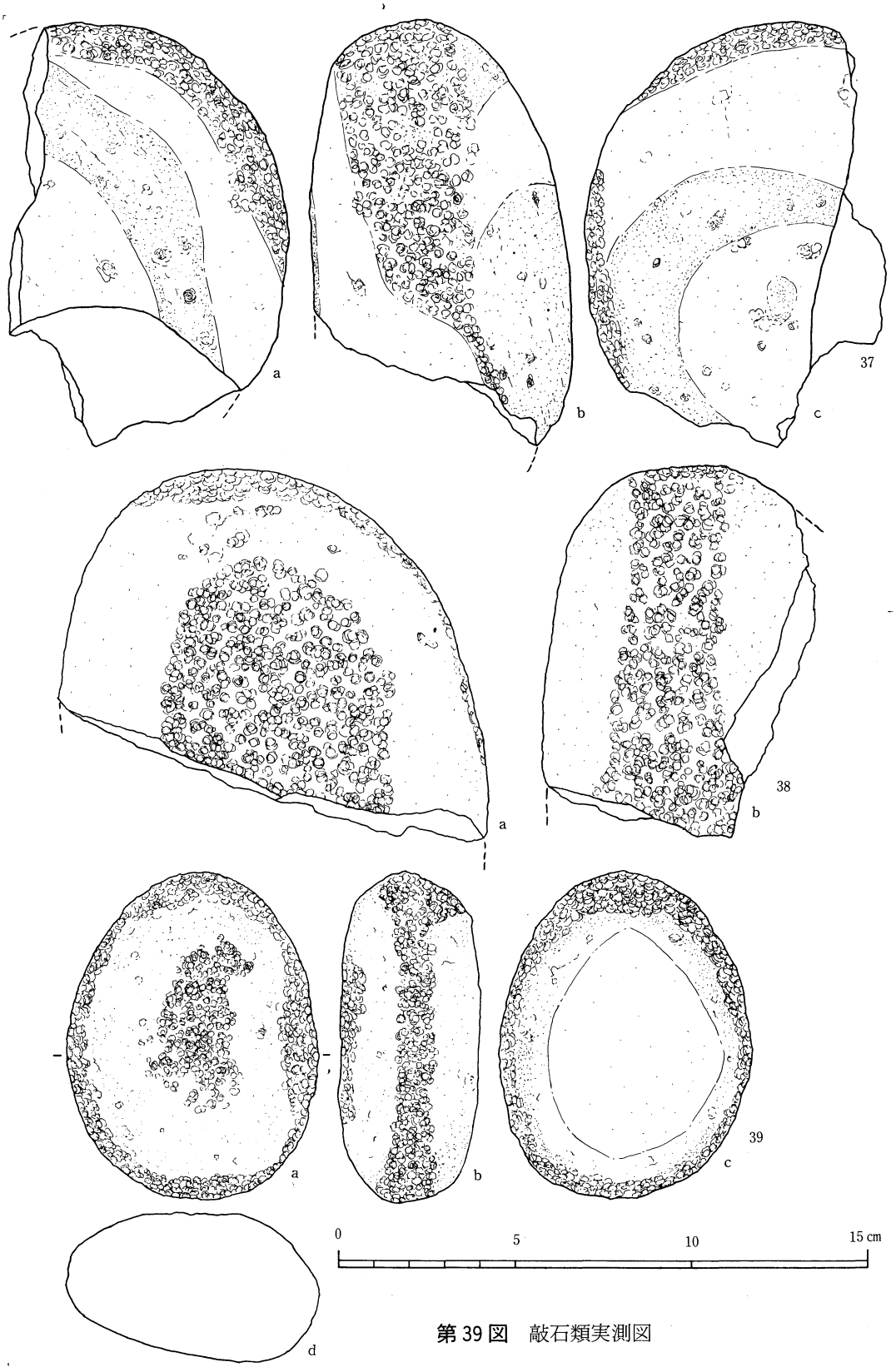
第36図　横刃形石器・ノミ形石器・礫器実測図



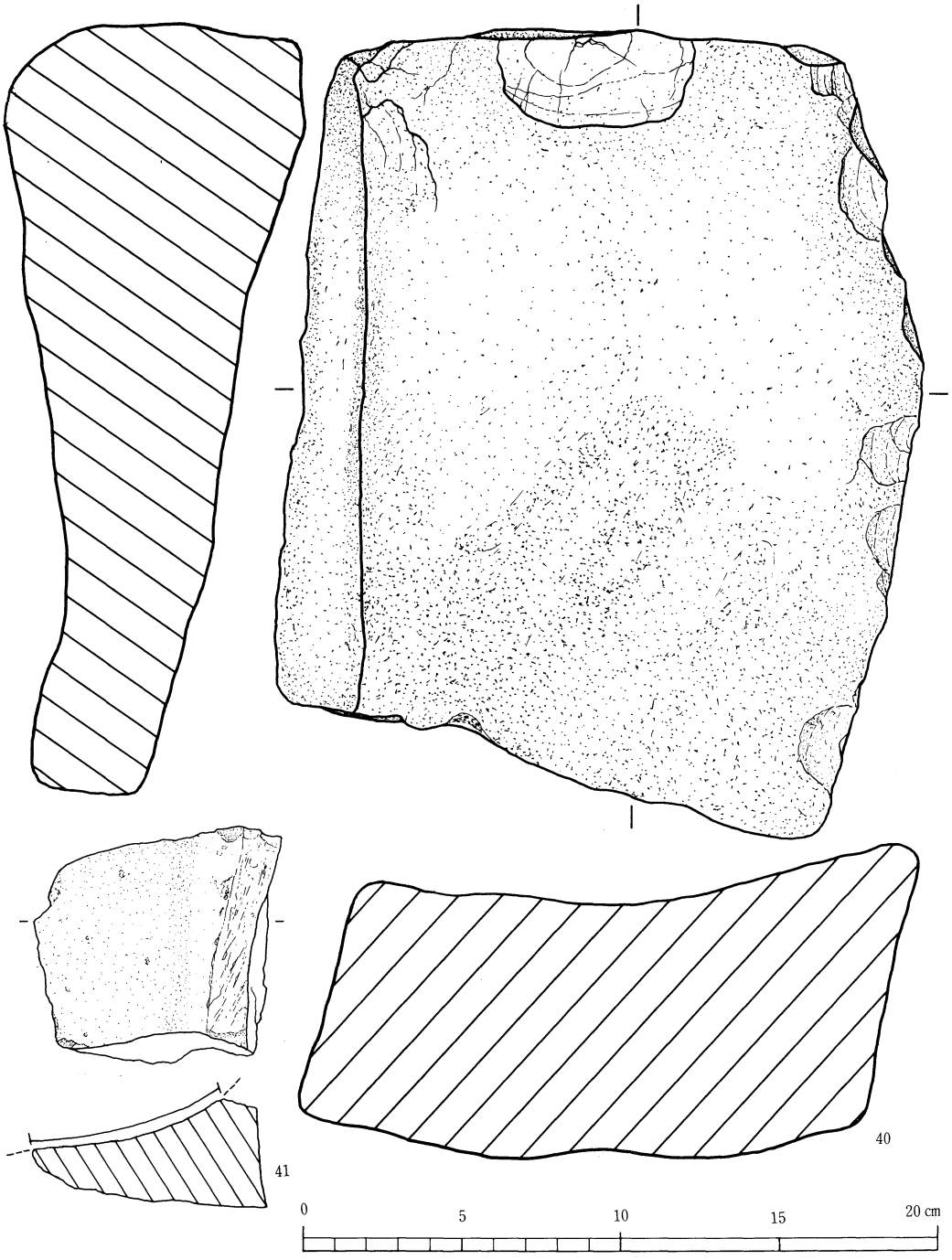
第37図　2次加工剥片・石鏃実測図



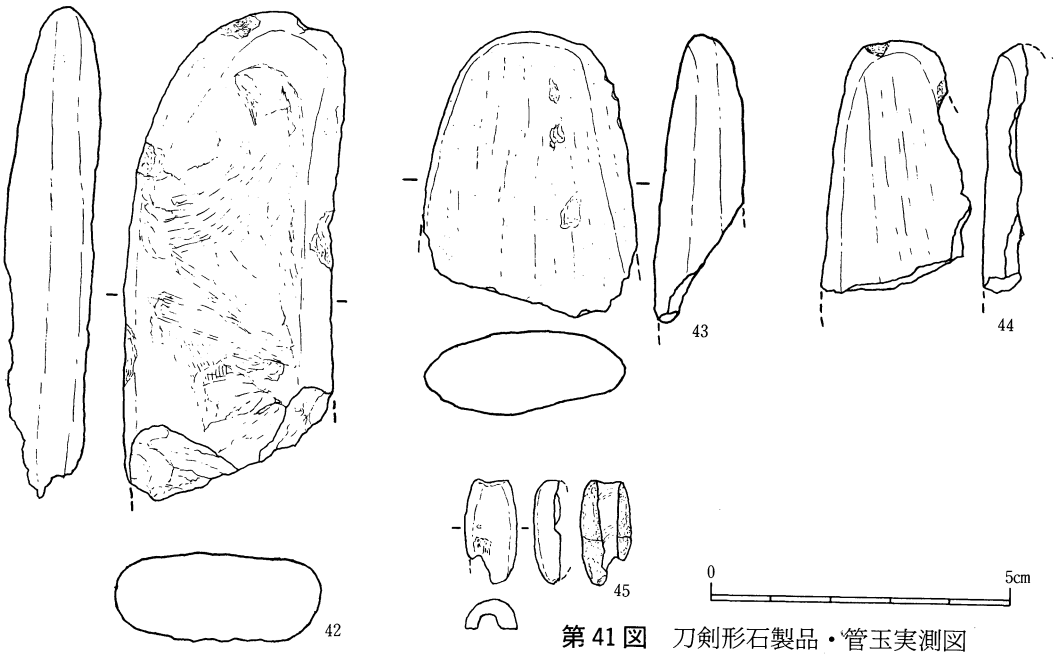
第38図　安山岩の剥片実測図



第39図　敲石類実測図



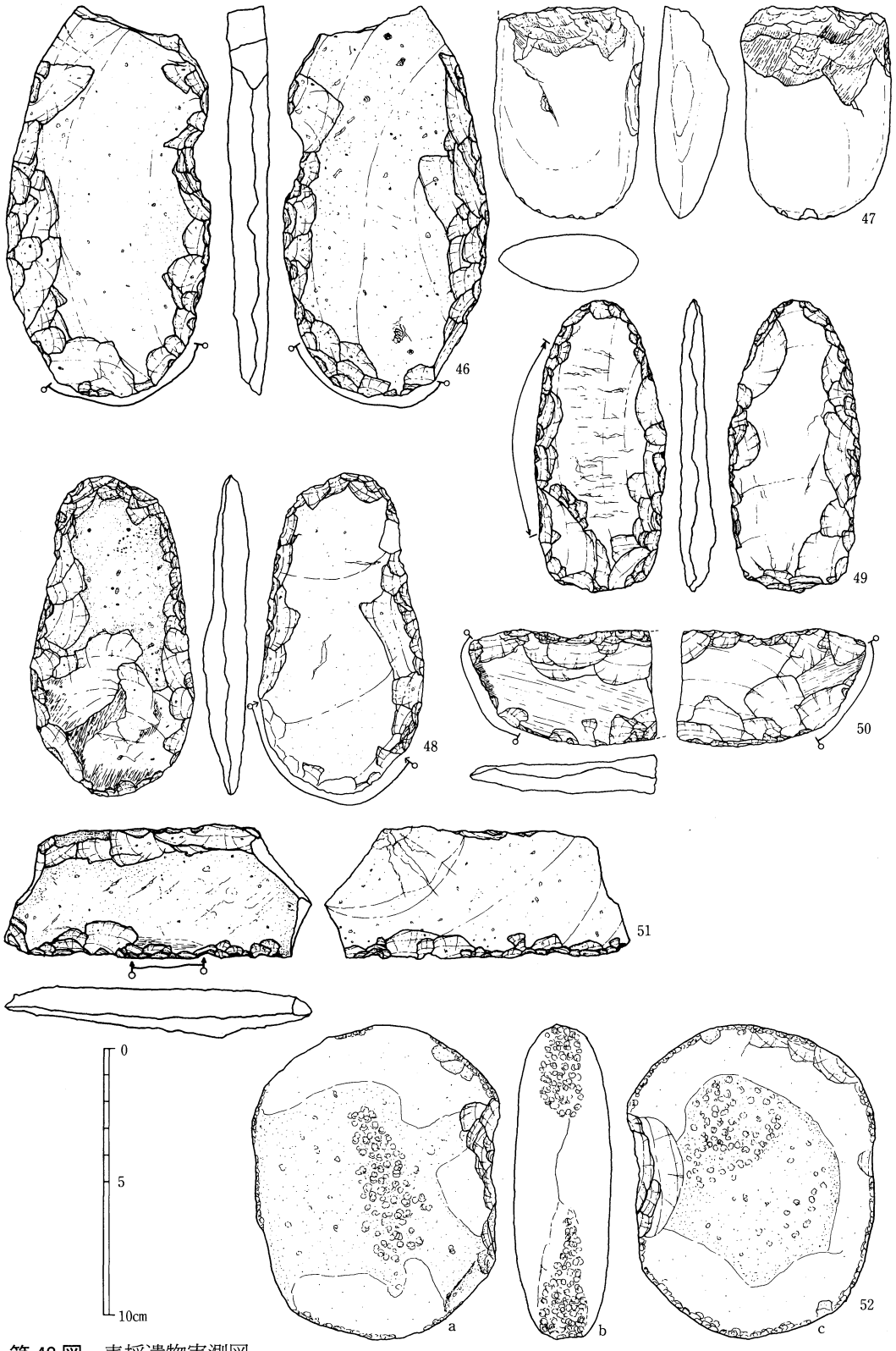
第 40 図　石皿実測図



第41図　刀剣形石製品・管玉実測図

	器　種	形　態	Grid	出土層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	使用痕の部位	残　存
1	打製石斧	Ia	A-15	V	安山岩	12.4	6.0	2.1	147	刃部 基部両側縁	完形
2	打製石斧	Ia	H-16	V	安山岩	11.2	5.4	2.2	204		完形
3	打製石斧	Ia	J-8	V	安山岩	12.3	7.1	1.4	94		完形
4	打製石斧	Ia	ZY-21	I	安山岩	9.2	4.4	1.3	64		完形
5	打製石斧	Ia	H-9	V	安山岩	11.8	6.6	1.6	121		刃部欠損
6	打製石斧	Ia	J-10	V	安山岩	11.2	5.1	1.4	95		完形
7	打製石斧	Ia	J-9	V	安山岩	10.0	6.4	1.4	100	右側縁中部	刃部欠損
8	打製石斧	Ia	J-10	V	安山岩	8.5	6.0	1.7	120		基部欠損
9	打製石斧	Ia	J-10	V	安山岩	9.0	5.4	1.3	72		完形
10	打製石斧	Ia	J-9	V	安山岩	8.5	7.3	1.8	126	左側縁中部 刃部	基部欠損
11	打製石斧	Ia	K-9	III	安山岩	12.6	4.6	1.6	103	刃部	基部欠損
12	打製石斧	Ib	H-9	V	安山岩	9.3	6.8	1.3	99	両側縁	刃部欠損
13	打製石斧	Ib	K-9	IV	安山岩	9.0	4.9	1.1	55		基部欠損
14	打製石斧	Ib	J-9	III	安山岩	12.3	7.5	2.0	189		刃部欠損
15	打製石斧	II	H-9	V	安山岩	9.3	6.0	1.6	102		基部欠損
16	打製石斧	II	H-16	V	安山岩	11.7	7.8	1.6	170		基部欠損
17	打製石斧	II	J-9	V	安山岩	12.0	7.6	1.9	175	刃部	基部欠損
18	打製石斧	II	J-8	V	安山岩	13.3	6.4	1.3	144		刃部欠損
19	打製石斧	II	J-9	V	安山岩	12.6	7.6	1.9	172		刃部・基部欠損
20	打製石斧	未成品	J-8	V	安山岩	8.4	6.7	3.5	220		刃部欠損
21	打製石斧	III	K-9	III	安山岩	6.4	7.0	1.0	90	刃部	基部欠損
22	打製石斧	未成品	H-24	V	安山岩	12.1	7.5	2.6	214	左側縁中部 右側縁上部	刃部欠損

表15　縄文時代の石器観察表



第42図　表採遺物実測図

	器　種	Grid	出土層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
23	横刃形石器	ZY-21	III	安山岩	9.0	14.5	1.3	49	
24	横刃形石器	J-9	V	安山岩	7.0	10.6	0.9	59	
25	ノミ形石器	J-9	V	蛇紋岩	7.3	2.6	1.7	44	刃部を残す
26	礫　器	K-10	V	安山岩	14.7	9.6	6.1	631	残核素材か？
27	2次加工剥片	J-9	IV	黒曜石	1.9	1.3	0.4	1.1	面的加工を施すもの
28	2次加工剥片	J-9	V	黒曜石	2.0	2.7	0.7	2.8	左側縁に加工
29	2次加工剥片	J-9	IV	黒曜石(姫)	1.4	2.2	0.6	1.8	ネガ面右側縁とポジ面右側縁に加工
30	2次加工剥片	J-9	IV	野曜石(姫)	1.2	2.6	0.7	2.0	両面下部に加工
31	2次加工剥片	J-9	V	黒曜石(姫)	3.0	1.2	1.1	2.5	左側部に加工
32	石　鏃	A-15	V	安山岩	23	1.7	0.5	1.2	
33	石　鏃	J-8	V	安山岩	1.5	1.5	0.3	0.7	先端部・下部欠損
34	石　鏃	J-9	V	チャート	1.2	1.7	0.3	0.6	先端部欠損
35	剥　片	J-8	V	安山岩	11.7	9.7	3.7	387	不定形剥片
36	剥　片	J-9	V	安山岩	9.4	5.9	1.7	125	縦長剥片
37	敲石類	K-10	V	安山岩	12.1	8.0	7.4	860	欠損品
38	敲石類	J-9	V	安山岩	10.6	12.2	7.6	1,248	〃
39	敲石類	J-10	V	安山岩	9.3	7.2	4.2	350	完成品
40	石　皿	ZY-21	V	安山岩	25.5	20.2	11.1	6,500	
41	石　皿	A-15	V	安山岩	7.5	7.8	3.4	248	小片
42	刀剣形石製品	K-9	III	結晶片岩	8.2	3.6	1.5	62	
43	刀剣形石製品	H-9	IV	結晶片岩	4.7	3.5	1.3	27	
44	刀剣形石製品	J-8	V	結晶片岩	4.2	2.6	0.7	6.0	
45	管　玉	A-15	V	玉　髄	1.7	0.8	0.4	0.7	

表16　縄文時代の石器観察表

	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重　量(g)	備　考
46	打製石斧	安山岩	14.7	1.6	7.7	210	'84年採集，Ⅰa類，刃部に使用痕
47	磨製石斧	蛇紋岩	7.9	5.6	2.8	164	'84年採集，刃部のみ残存
48	打製石斧	安山岩	12.0	1.6	1.7	130	'84年採集，II類，刃部に使用痕
49	打製石斧	安山岩	10.9	4.9	1.4	79	'84年採集，II類，左側縁に小剥離痕
50	横刃形石器	安山岩	4.4	7.0	1.5	45	'84年採集，研ぎ出しが認められる
51	横刃形石器	安山岩	5.1	11.5	1.9	91	'84年採集，刃部中央に磨滅
52	敲石類	安山岩	11.8	9.2	3.7	628	全周縁と両面中央部に敲打痕

表17　表採遺物の観察表

7章　弥生時代の遺物

1．土　　器

壺形土器・甕形土器・実測可能な土器51点を器種別に分類し，以下紹介を行う。

壺A類（第43図　1）　口縁部は広く外反し，下位に稜を生じるもので，いわゆる板付II式系の土器と思われる。

壺B類（第43図　2・3）　口縁部は外反し，口唇部を二重に肥厚させている。131は口唇部肥厚面に2列，竹管文を施している。

壺C類（第43図　4）　外反する口縁部に断面3角形の突帯を施すものである。

壺D類（第43図　5）　口縁部上半で稜を生じて短く外反するものである。外面から内面上半にかけて赤色顔料が施されている。

壺E類　外反する口縁部内面に粘土を貼り付け，平担な口縁部を形成するものである。

E-1類（第43図　6）　口縁内外面共に無文で，外面がややくぼむものである。

E-2類（第43図　7）　口縁内面には円形浮文が1列張りめぐらせており，外面には貝殻腹縁により山形文が施す。

E-3類（第43図　8・9）　口縁外面端部が垂れぎみに下がるもので，貝殻腹縁による山形文が施されている。9は口縁内面に円形浮文を2列に施す。

壺胴部（第43・44図　10～16）　10・11は胴上半部に2条の突帯を施し，12～14は2本単位の施文具により重孤文または平行文を施す。15は2条の刻目突帯を施すものである。16は横方向にハシゴ状沈線が施文されている。

甕A類（第45・46図　17～33）　口縁下位に断面3角形の張り付け突帯を1条～2条施すものであり，無刻目と刻目のものがある。いわゆる下城式土器もこの類に含まれる。

甕A-1類（第45図　17～21）　口縁部がやや内湾するものである。刻目の見られないもの（17）口唇部外面と突帯につくもの（19），1条ないし2条の突帯につくものがある。（18・20・21）

甕A-2類（第45図　22～24）　口縁部が突帯を施している附近から外湾するもので，すべて口唇部をややくぼめている。

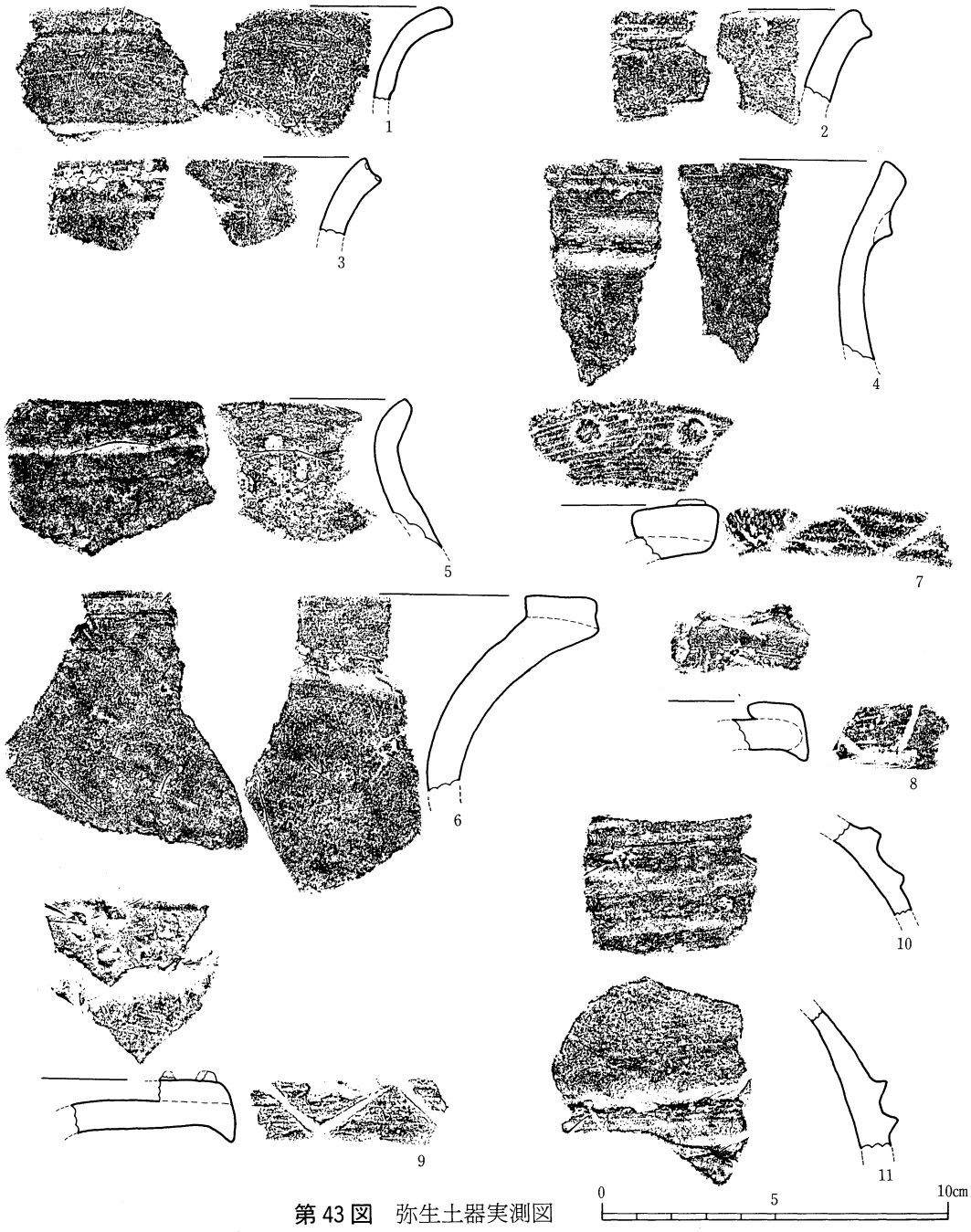
甕A-3類（第45・46図　25～33）　胴部から口縁部にかけて直口する形態である。25は口唇部を丸めに仕上げるなど縄文的要素が残るものである。26・28～31は口唇部をややくぼめるものである。

甕B類（第46図　34）　やや内湾ぎみの口縁部に断面3角形の粘土紐をめぐらせ，「逆L字」状の口縁部に仕上げた，いわゆる城ノ越式土器と呼ばれるものである。

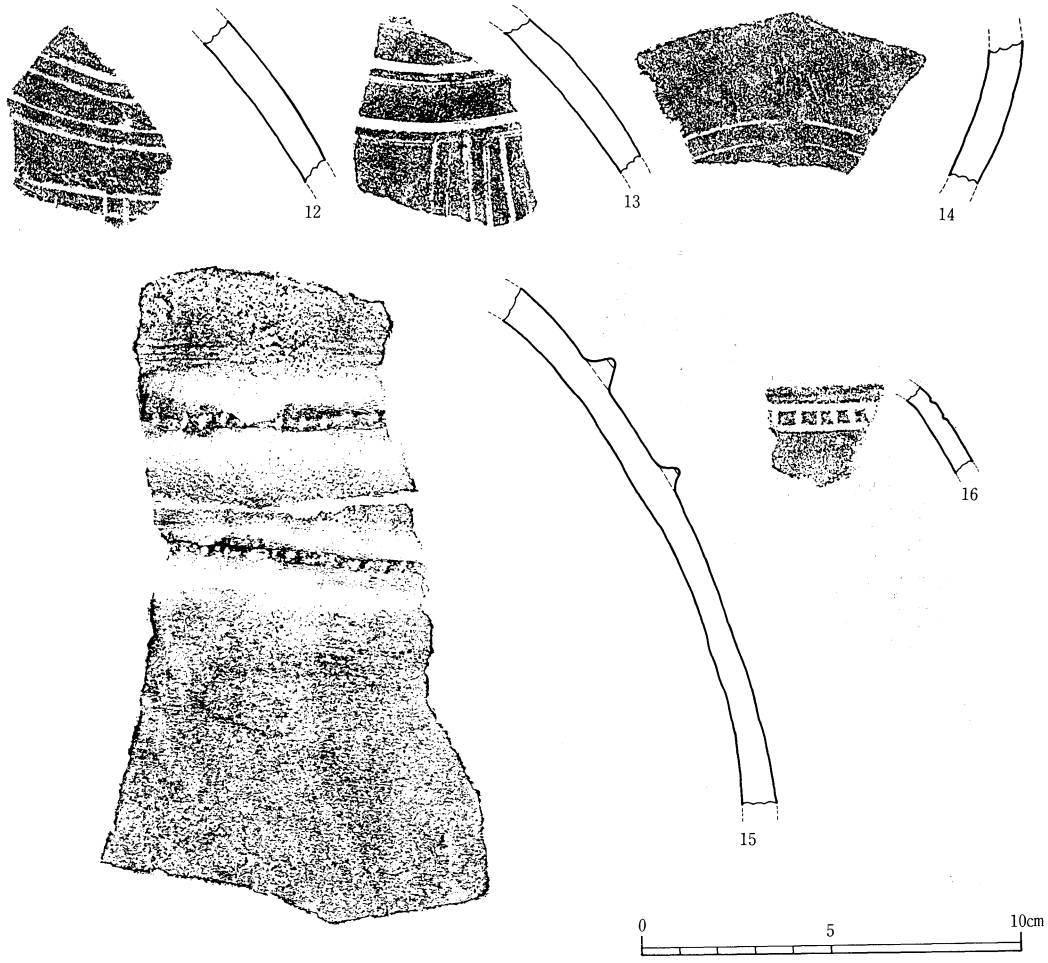
鉢形土器（第46図　35・36）　胴部から口縁部にかけて直線的に大きく外傾しながら至る形態であり，口縁部外面がややくぼむものである。

甕底部（第47図　37～42）　甕形土器の底部である。37は外面刷毛目調整で仕上げ，上げ底である。41は上げ底の発達したもので，42は大野川流域に見られる尖底状を呈する底部である。

壺底部（第47・48図　43～51）　上げ底のものと平底のものに分れ，全体的に底部は肥厚している。50は底部から胴部にかけて極端に開くもので，51は上げ底が発達した形態の土器ということがいえる。



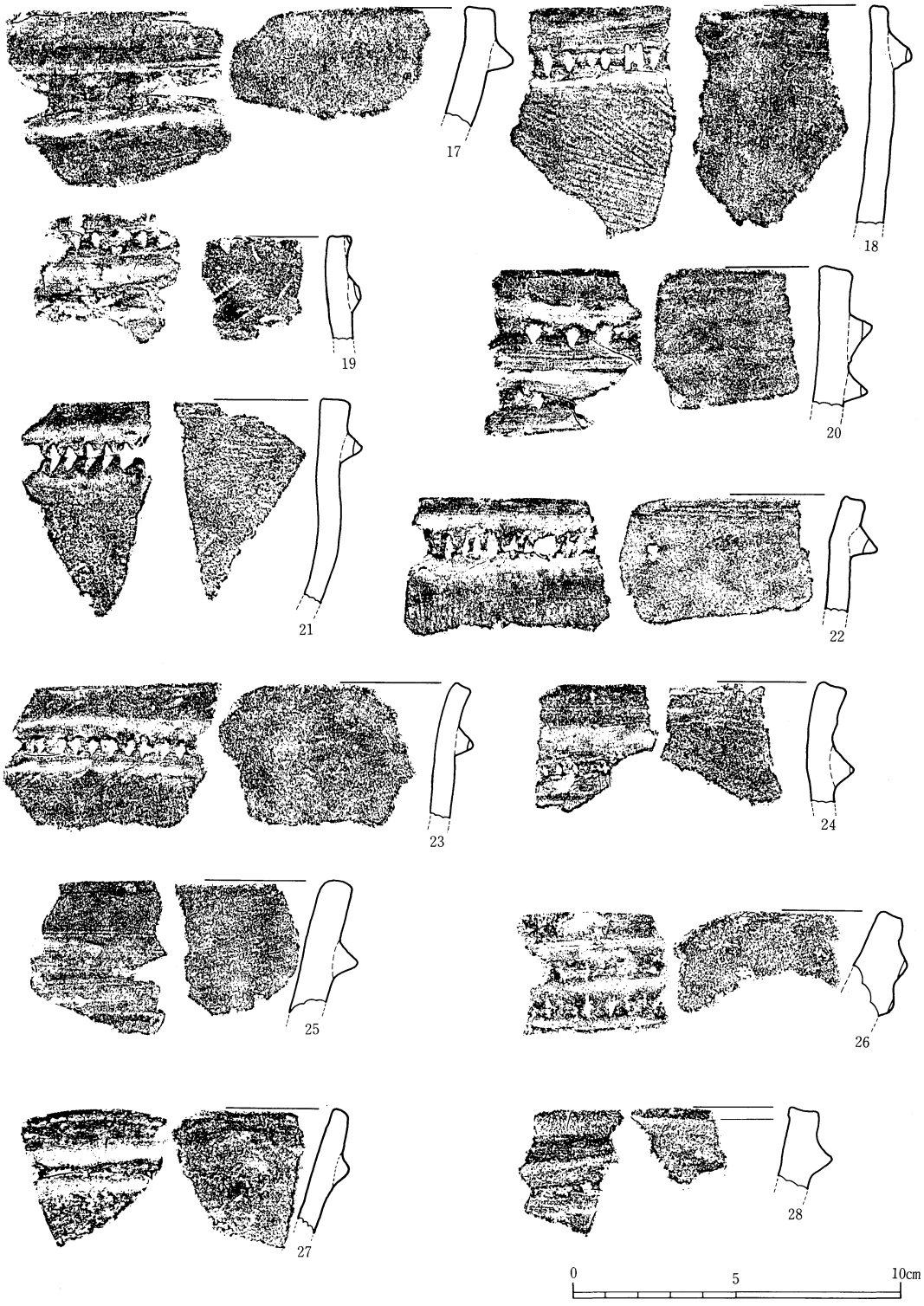
第43図　弥生土器実測図



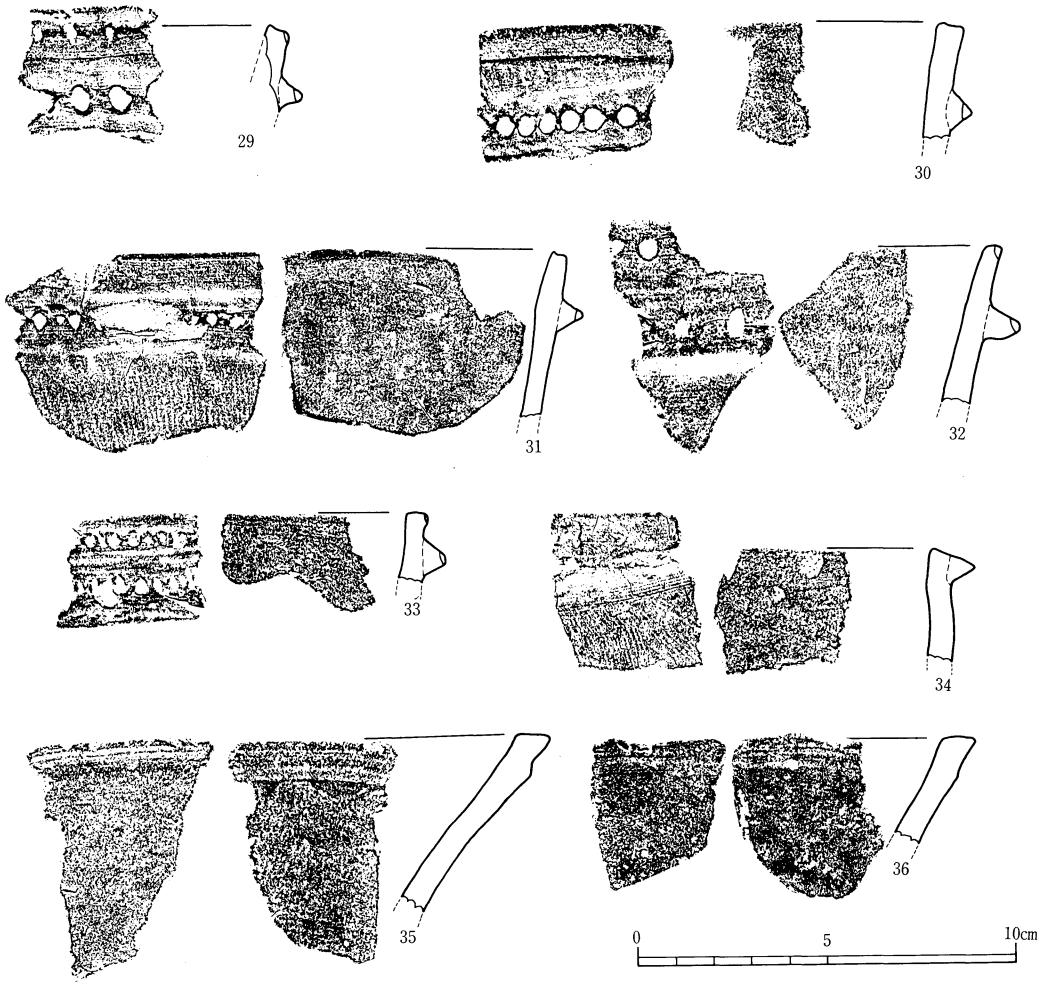
第44図　弥生土器実測図

No.	器種	分類	Grid	層	部位	色調 外面	色調 内面	色調 断面	調整 外面	調整 内面	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 小礫	備考
1	壺	A	K-10	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	○	○	○		
2	壺	B	J-10	IV	口縁部	褐色	明茶褐色	褐色	刷毛目	ヨコナデ	○	○			
3	壺	B	J-9	V	口縁部	明茶色	明茶色	明茶色	ヨコナデ	ナデ			○	○	竹管文を2列もつ
4	壺	C	J-8	V	口縁部	淡黄色	淡灰色	淡灰色	刷毛目	ナデ	○	○			
5	壺	D	J-8	V	口縁部	明燈色	明燈色及び淡黄色	淡黄色	ヘラナデ	ヘラナデ				○	外面および内面に丹塗りを施す
6	壺	E-1	J-8	V	口縁部	暗褐色	黒褐色	明褐色	刷毛目	刷毛目	○	○			
7	壺	E-2	J-8	IV	口縁部	黄褐色	黄褐色	灰褐色	ナデ	ヨコ刷毛目	○	○	○		
8	壺	E-3	J-9	V	口縁部	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	刷毛目	刷毛目	○		○	○	
9	壺	E-3	J-8	V	口縁部	淡黄色	明茶褐色	淡黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	○		○		
10	壺		J-10	V	胴部	黄褐色	暗褐色	暗褐色	刷毛目	ナデ	○		○	○	
11	壺		H-16	V	胴部	黒茶色	黒色	暗褐色	ナデ	ナデ	○				
12	壺		J-8	IV	胴部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ナデ	磨き	○	○	○		
13	壺		J-10	V	胴部	茶褐色	茶褐色	茶褐色	磨き	ヨコナデ	○		○	○	
14	壺		J-9	V	胴部	黒褐色	茶褐色	褐色	磨き	ナデ	○	○	○	○	
15	壺		K-10	V	胴部	黒褐色	茶褐色	暗褐色	磨き	ナデ	○	○			
16	壺		J-8	IV	胴部	黄褐色	暗褐色	黄褐色	磨き	ナデ	○	○			

表18　弥生土器観察表



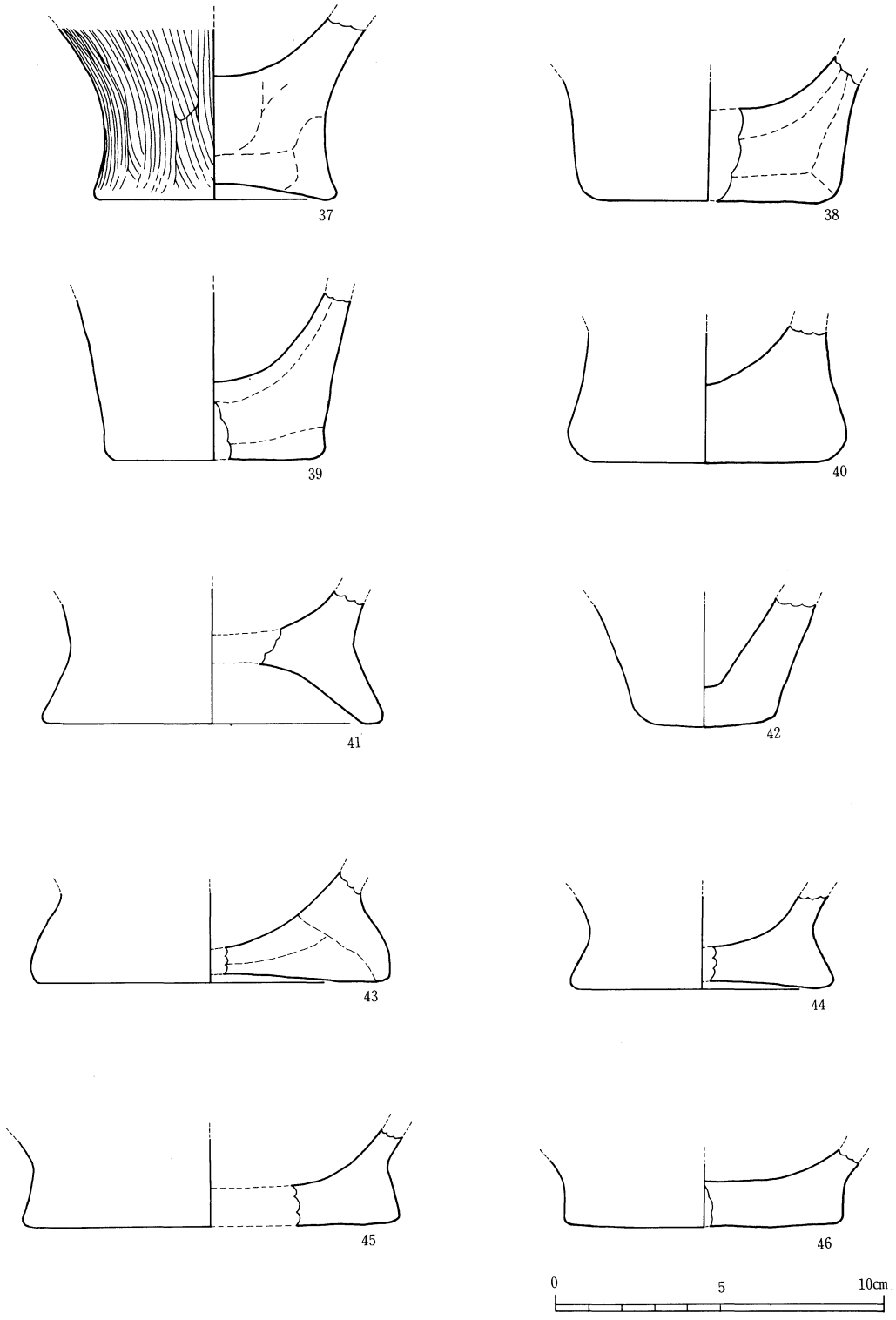
第45図　弥生土器実測図



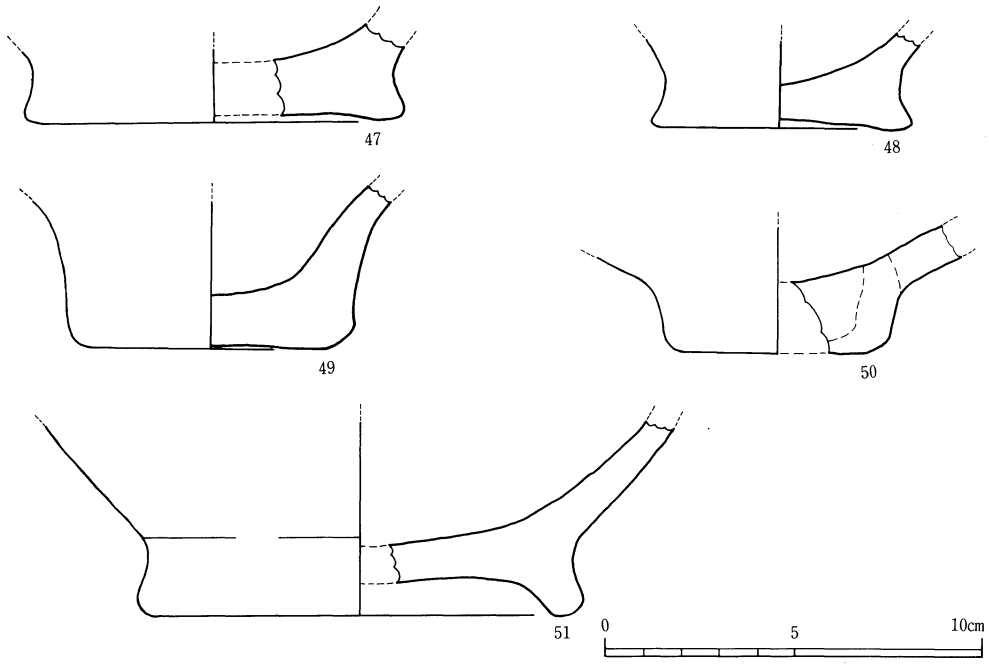
第46図　弥生土器実測図

No.	器種	分類	Grid	層	部位	色調 外面	色調 内面	色調 断面	調整 外面	調整 内面	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 小礫	備考
17	甕	A-1	J-10	V	口縁部	明茶褐色	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ナデ		○	○	○	
18	甕	A-1	H-16	VI	口縁部	灰黒色	暗褐色	黒褐色	刷毛目	ナデ	○	○		○	
19	甕	A-1	J-8	IV	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	○		○		
20	甕	A-1	J-9	V	口縁部	赤褐色	茶褐色	赤褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○		○	
21	甕	A-1	K-10	V	口縁部	淡茶褐色	明褐色	淡茶褐色	磨き	ナデ	○	○	○		
22	甕	A-2	A-15	V	口縁部	明黄色	明黄色	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 磨き		○		○	
23	甕	A-2	J-10	V	口縁部	暗黄色	淡黄色	淡黄色	刷毛目	ナデ	○		○		
24	甕	A-2	J-10	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	ナデ			○	○	
25	甕	A-3	A-15	III	口縁部	暗茶色	暗茶色	暗茶色	ヨコナデ	ナデ	○			○	
26	甕	A-3	H-9	V	口縁部	暗茶色	暗茶色	黒色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	
27	甕	A-3	H-16	V	口縁部	明褐色	明褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○			
28	甕	A-3	H-16	V	口縁部	淡赤褐色	暗褐色	褐色	ナデ	ナデ		○		○	
29	甕	A-3	H-16	VI	口縁部	明褐色	欠損	明褐色	ヨコナデ	欠損		○		○	
30	甕	A-3	J-10	V	口縁部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	ナデ	○	○	○	○	
31	壷	A-3	J-10	V	口縁部	暗黄色	暗黄色	暗黄色	刷毛目	磨き	○	○			
32	甕	A-3	K-10	V	口縁部	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	刷毛目	ナデ	○			○	上下同時に刻目が施文されている。

表19　弥生土器観察表



第 47 図　弥生土器実測図



第48図　弥生土器実測図

No.	器種	分類	Grid	層	部位	色調 外面	色調 内面	色調 断面	調整 外面	調整 内面	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 小礫	備考
33	甕	A-3	K-10	V	口縁部	淡茶色	淡茶色	褐色	ヨコナデ	ヨコ磨き			○		
34	甕	B	J-8	V	口縁部	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	刷毛目	ナデ	○		○	○	
35	甕		J-9	V	口縁部	淡茶色	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ		○		○	
36	甕		J-8	V	口縁部	明茶褐色	淡黄色	淡黄色	ヘラ磨き	ヨコナデ		○	○		
37	甕		H-16	VI	底部	明茶色	黄黒色	黄灰～茶色	刷毛目	ナデ	○	○			
38	甕		J-10	V	底部	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ヘラ磨き	磨き	○	○		○	
39	甕		K-10	V	底部	明茶褐色	暗褐色	明茶褐色	磨き	ナデ	○	○	○	○	
40	甕		K-10	V	底部	明茶褐色	赤褐色	赤褐色	ナデ	ヘラナデ		○		○	
41	甕		K-10	V	底部	暗褐色	黒褐色	暗褐色	磨き	磨き	○	○		○	
42	甕		A-15	V	底部	明茶色	暗茶色	明茶色	ナデ	ナデ	○			○	
43	壺		J-8	V	底部	明茶褐色	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○		○	
44	壺		H-24	V	底部	暗褐色	明黄色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○			
45	壺		J-8	V	底部	暗褐色	暗褐色	暗褐色	刷毛目	ナデ	○	○		○	
46	壺		J-8	V	底部	赤褐色	褐色	暗褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○		○	
47	壺		J-10	V	底部	赤褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	ヨコナデ	ナデ	○	○		○	
48	壺		J-10	V	底部	淡黄色	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	磨き	○		○		
49	壺		J-10	V	底部	褐色	暗褐色	暗褐色	刷毛目	ナデ	○	○	○		
50	壺		J-10	V	底部	暗褐色	暗茶褐色	暗褐色	ヘラ磨き	磨き	○	○		○	
51	壺		H-9	V	底部	暗茶色	茶色	茶～暗茶色	ヘラケズリ		○	○			

表20　弥生土器観察表

以上の分類に際しては口縁部の形態の特徴をとらえ，壺形土器を5分類，甕形土器を3分類に細分した。それらの各土器についてまとめてみる。

壺形土器

A類　口縁部下位に明瞭に段を残すもので，いわゆる板付II式系の壺形土器である。大野川中流域では今まで板付II式の出土は報じられていないが，千歳村高添遺跡群で板付II式の壺棺(注1)が，さらに竹田市小高野遺跡では刻目突帯文甕とともに出土(注2)しており，弥生時代前期後半に位置する板付II式の壺形土器が大野川流域へ浸透していたことが示唆される。

B類　上下に厚味を加えた土器は，白潟遺跡の壺2類に比定されるもの(注3)で，別府湾沿岸地域に類例がみられる。

C類　弥生時代中期の壺形土器には頸部・胴部などに3角突帯を張りつけた土器が盛行している。出土量はわずかに1点のみであり，全形を知り得ないが，この類は弥生時代中期中葉の時期に相当するものと思われる。

D類　ただ1点赤色顔料が施されている土器片であるが，全形を知り得ることはできない。口縁部形態の特徴から，大野川上流域に位置する竹田市石井入口遺跡で類似する壺形土器がみられ，弥生時代中期に比定されるものであろう。

E類　大きく外反する口縁内面に平担面を形成する壺形土器は弥生時代中期前葉～後期前葉にかけて広く県内でも出土をみる。大野川中流域では，大野町近中遺跡でE-1類に比定できると思われる胴部上半と下半にそれぞれ3角突帯を施した壺形土器が出土している(注4)。同じくE-2類に比定される土器片も出土しており，E-1類およびE-2類は同時期に使用されていたと思われる。

E-3類としたものはE-1・E-2類に比べ後出的な要素を持つものである。口縁端部が垂下する現象は大野町松木遺跡出土土器にもみられ(注5)，時期的には弥生時代後期前葉まで存続するものと思われる。次に出現する後期複合口縁の前段階に位置づけられるものであろう。

次に138～144の胴部土器片はB類以降の壺形土器に相当するものであり，3角突帯または2本単位の施文具により施文されたものである。

甕形土器

A-1類　A-1類としたものは口縁が内湾し，146を除きナデ調整で仕上げるなど古式の下城式土器に形態が類似するものである。弥生時代前期末に別府湾沿岸で成立した下城式土器は，若干時期が遅れて大野川流城に浸透していったものと考えられ，本遺跡では弥生時代中期初頭の時期を考えたい。

A-2・3類　A-2類は外湾，A-3類は直行するものであるが，共に中期中葉に相当するであろう。151・159・160は外面刷毛目調整を施すなど，いわゆる下城式土器で，その他の土器もナデ調整等がみられ，形態的特徴から同時期併行と推定される。

ただ153～156は器壁が厚いことや口縁部を丸めに仕上げたうえ，ナデ調整を施す点を考慮に入れると，上記の土器群に比べ先行する可能性がある。大野原台地の中では遺跡数が少数なこともあり，詳細な検討が加えられない。

課題の１つとして今後の資料数の増加を待ちたい。

Ｂ類　やや内湾ぎみの口縁部に「逆Ｌ字状」の平担面を作るなど北九州で発達をみせた城ノ越式土器に相当するものである。時期は中期初頭に位置づけられるであろう。城ノ越式土器は宇佐市台ノ原遺跡に多くの類例がみられ(注６)，また県南の白潟遺跡でも出土しており，宇佐平野，別府湾沿岸域から大野川流域へ浸透してきたと考えられるが，まだ資料数は少ない。

Ｃ類　Ｃ類とした２点の土器片は，縄文時代後晩期の遺物の可能性もある。しかしながら胎土の特徴から，宮地前遺跡において縄文土器に石英が含まれることはなく，164の土器片には石英を含む点からどちらの時代の遺物とも言い難い。他に類例もなくこの時点では不明としておく。

（注１）「高添遺跡群―千歳地区遺跡群発掘調査概要Ⅱ―」　千歳村教育委員会　1988年
（注２）「大分県史―先史編Ⅰ」　大分県教育委員会　1983年
（注３）「白潟遺跡」　佐伯市教育委員会　1958年
（注４）「大野原の遺跡　近中遺跡」　大野町教育委員会　1980年
（注５）「大野原の遺跡　松木遺跡」　大野町教育委員会　1980年
（注６）「台ノ原遺跡」　大分県教育委員会　1975年

8章　平安博物館調査地点の先土器時代石器群

古代学協会研究員　　鈴　木　忠　司

1．調査ならびに発表の経過

平安博物館では，1973年3・4月，宮地前遺跡の発掘調査を実施した。これは，渡辺誠氏（現名古屋大学文学部）を団長とし，『日本文化の源流の研究』の一環として実施されたものであった。研究の主旨からして，調査は縄文時代晩期の文化層の発掘に主眼が置かれていた。

発掘調査は，ⅠからⅤまでの5本のトレンチを設け，トレンチ内の2×2m四方の発掘区12個所を発掘した（第3図）。この結果，多量の打製石斧，土器，竪穴住居址を検出することができた。調査の終盤に至って，作業進捗の早かったⅠ-7・Ⅴ-7区において土層観察の目的でローム層を掘り下げたところ，Ⅰ-7区において，細石刃文化層を検出するところとなった。(注1)

その後，同遺跡を別府大学が3次にわたる発掘調査を実施し，先土器時代の好資料を検出した。今度，その報告書を作成するにあたり，平安博物館の調査資料も同時に報告したい旨の要請があり，角田文衛博士・渡辺誠両氏の諒解を得て，先土器時代資料に限って，その概要を作成することになった。

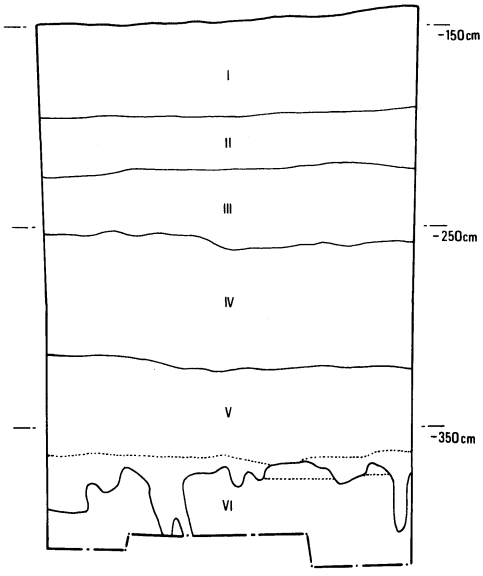
（注1）渡辺誠編『大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報』（平安博物館，1973年）。

2．土　　層

Ⅰ-7区の土層は，Ⅰ～Ⅵ層に区分される。東壁土層断面によって，その層相を記すと，以下のようになる（第49図）。

Ⅰ層　耕作土層。畑作に伴う耕作によって，ふかふかした軟らかい土層となっている。厚さ約50cm。縄文土器細片を出土する。

Ⅱ層　暗褐色～黒褐色土層。耕作が及んでいないため，Ⅰ層に比べしまっている。厚さ約30cm。縄文土器の出土が増加する。



第49図　Ⅰ-7区東壁土層断面図
（深度はS.L. 250mを基準とする）

III層　黒色土層。下底面の凹凸が
激しい。厚さ約 40 cm。下半部から，出土遺物が目立って増加する。

IV層　茶褐色土層。軟らかいがかなりしまった層である。厚さ約60cm。上半部で出土遺物がきわだって多く、打製石斧の出土量の増加が注目された。

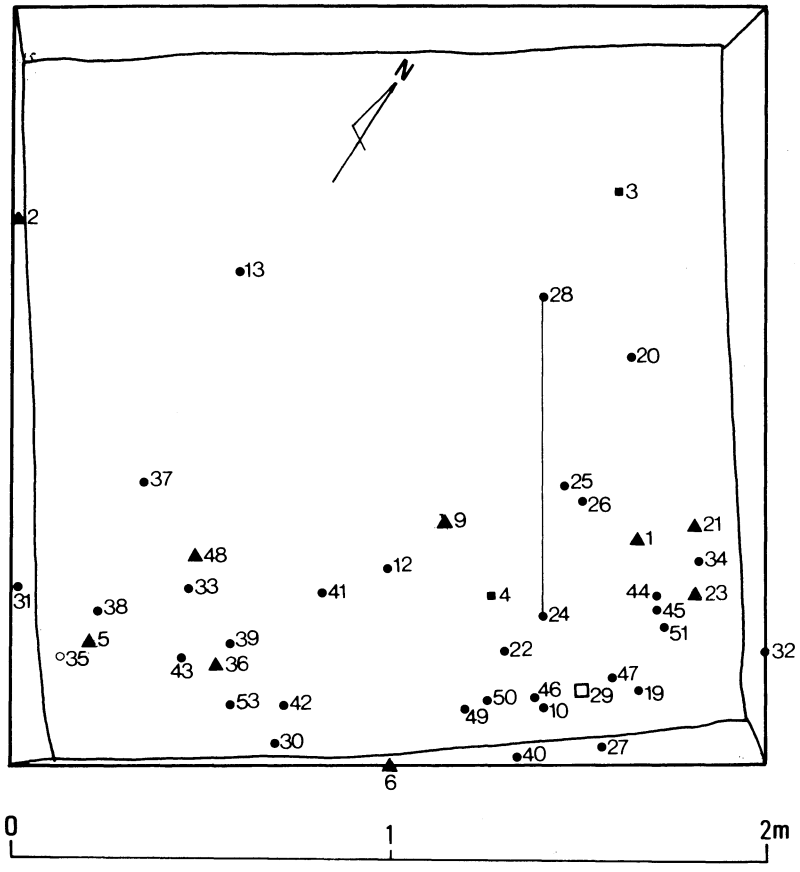
V層　黒褐色土層。IV層との境界面ははっきりしないが，土色が一段と黒味を増すために，IV層と区別しV層とした。下半部に黄褐色のロームブロックを含む。厚さ約50～70cm。遺物量は急減する。

VI層　黄色ローム層。全体に固くよくしまっている。最上部に軟質部を認めうる部分が一部にある。本層は30～50cmを発掘した。細石刃石器群の包含層である。

3．出　土　状　態

I－7区出土遺物の平面的分布状況は，南東半部に片寄っていた。北壁寄りでは，ほとんど遺物の出土が認められなくなるので，ブロックの中心部から外縁部・ブロック外にかけての一画が調査されたものと考えられる（第50図）。極めて狭い範囲から出土した少数の遺物の分布状況を記録しえたにすぎないので，分布状況の意味や器種別の分布傾向の差などについて言及することはできない。

遺物の出土レベルについても厳密な記述をなしえない。調査終了間際の発掘であったため，正確なレベル



第50図　I－7区石器・礫分布図
（▲トゥール，●剥片，■石核，○砕片，□礫
なお，図中の番号は，一覧表の通し番号と一致）

の測定をなしえなかったものを多く含むからである。ただし，発掘はVI層上面から7cmごとにイ～ヘまでのレベル区分をしながら実施したので，概略の傾向を知ることができる。これによれば，ローム層上面から約30cmの範囲に出土が多く，これ以下で急激に減少すると理解してよい。

上記の水平・垂直両方向の出土状態からみて，同一文化期の同一ブロックに所属する石器群であると判断される。

4．遺　　物

I－7区VI層から出土した遺物は，総数53点である。その内訳は，ツゥール類10，剥片類37，砕片類1，石核類3，礫1点，今回の報告作成の時点で未確認のもの1点となる。トゥール類には，細石刃（2）・掻器（1）・削器（3）・使用痕ある剥片（4）を含み，石核類に2点の細石核を含んでいる。石質は流紋岩を主とし，一部に黒耀石・安山岩を含む（表21）。

石器の性状

細石刃（第51図　1・2）

1例は流紋岩製の中間部（同図2），他の1例は黒曜石製で頭部を欠いた例（同図1）である。後者の例は右側と末端に礫面を留めており，細石刃としてはやや形の整わぬ印象がないではないが，その他の特徴から見て細石刃として大過ないであろう。細石刃剥離作業面の右端から剥離されたもので，石核の側縁に未調整の自然面を留めた黒曜石製細石核が存在したことを推測させる資料である。

掻器（第52図　3）

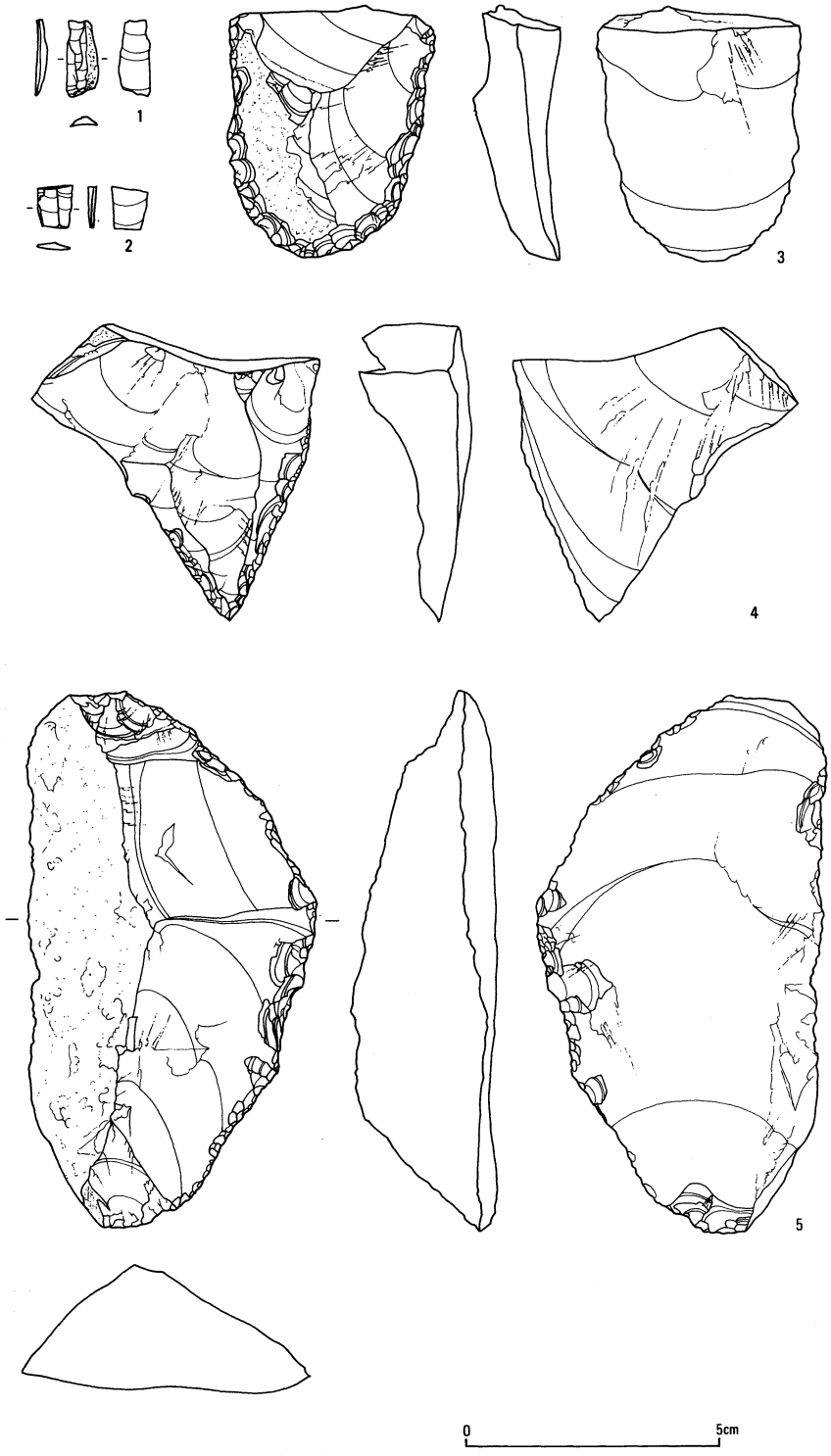
幅広で厚い大きな打面を留める，厚手の縦長剥片を用いた掻器である。左右両側縁と弧状の先端刃部に急峻な調整加工を入念に施している。

削器（第52図　4・5，第52図　1）

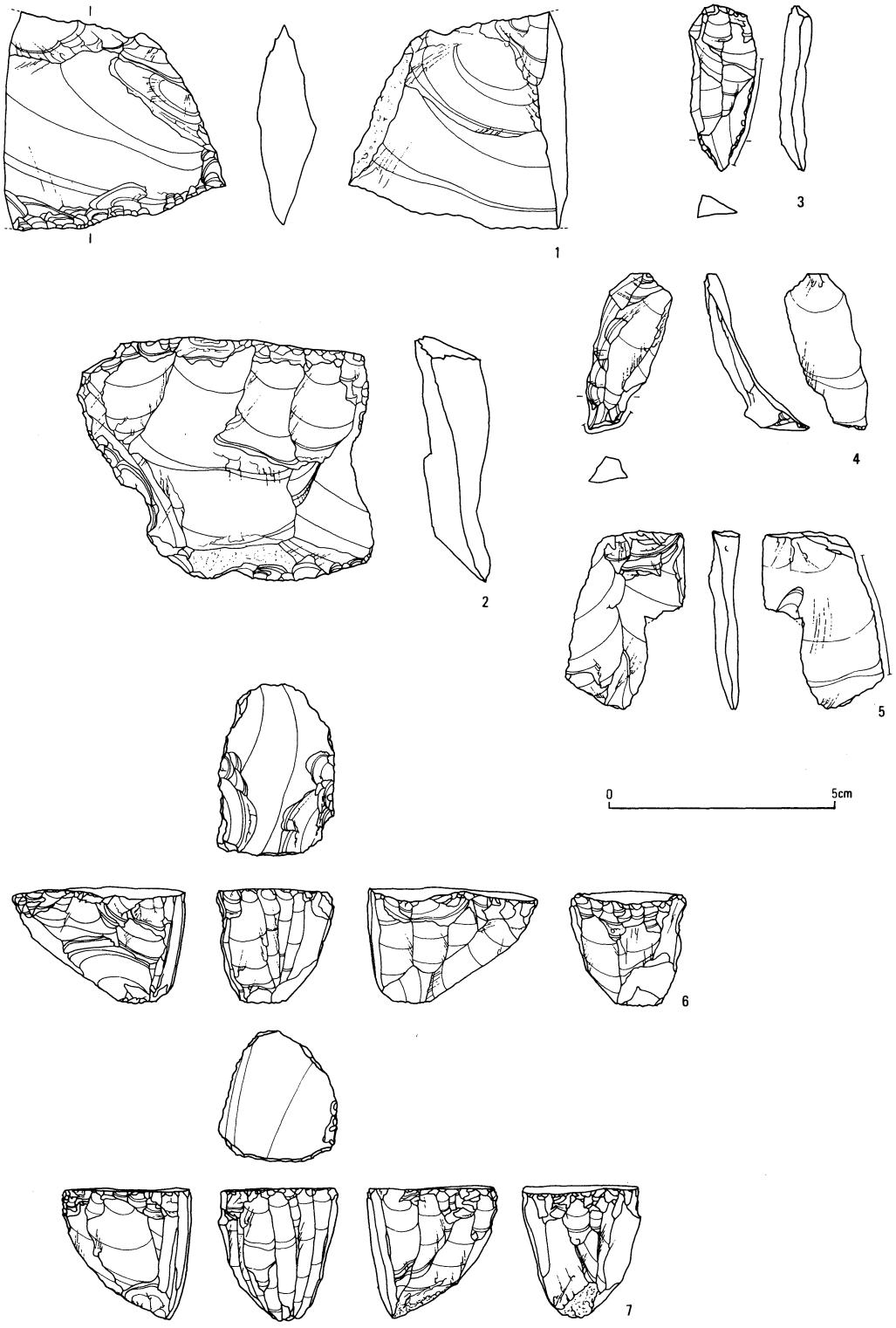
いずれも大型の剥片を素材にし，剥片の1側縁または，一端に調整加工を施し，削器とした例である。第3図4は，厚くて大きな打面を留める逆3角形状の剥片の先端を，剥片本来の形状を生かしながら尖頭状に調整加工した特徴的な尖状削器である。同図5は，大型剥片の背面右側縁全体に加工を加え削器としたものであるが，加工は簡単である。腹面側の剥離痕は，削器の作用部の作出の結果によるというよりは，ステップし，はじけたような特徴を有する点から見て，むしろ使用痕・ダメージととらえた方がよいのかもしれない。大形剥片の重量を利用しつつ，削り剥ぐというよりは截断するような作業に適した1例という印象を受ける。

使用痕ある剥片（第52図　2～5）

小型の縦長剥片を使用したものと，大きな打面を留めた大型で幅広い剥片を用いたものとがある。小型の剥片を用いた例はいずれも縁辺の一部に微細だが明瞭な使用痕を認めることができる。大型の剥片を素材とした例（同図2）は，打面部を除く全縁辺に大小の使用痕が不規則に認められる。縁辺の剥離痕の不規則さから削器ではなく，使用痕ある剥片として扱った。



第51図　先土器時代石器実測図



第52図　先土器時代石器実測図

石核（第52図　6・7，第53図　4）

船野型細石核2例と不定形剝片石核1例とがある。第52図6は，分割礫の凸面を打面とし，全体を舟底形に整形し、一端において入念な細石刃剝離作業を実施した例である。打面角85度。左側面には下端からの側面調整痕があり，打面には両側面からの剝離痕がある。打面の剝離痕はその位置から見て，細石刃剝離作業の準備のためのいわゆる打面細調整と見なすには無理があろう。もう一つの細石核の側面に接した打面上の小剝離痕と同様に，あるいは，細石刃剝離作業の際に石核保持の安定化を計るための補助手段であった可能性も考えられるのではないだろうか。

同図7は，分割礫の凸面を打面として，全体を舟底形に整形し，一端で入念な細石刃剝離作業を行った細石核である。打面角86度。左側面には下端からの剝離痕が認められ，打面には右側面に接した細かな剝離痕がある。打面上の剝離痕は細石刃剝離作業面に接していないので，先に述べたような意味付けの方が無理が少ないのではないだろうか。

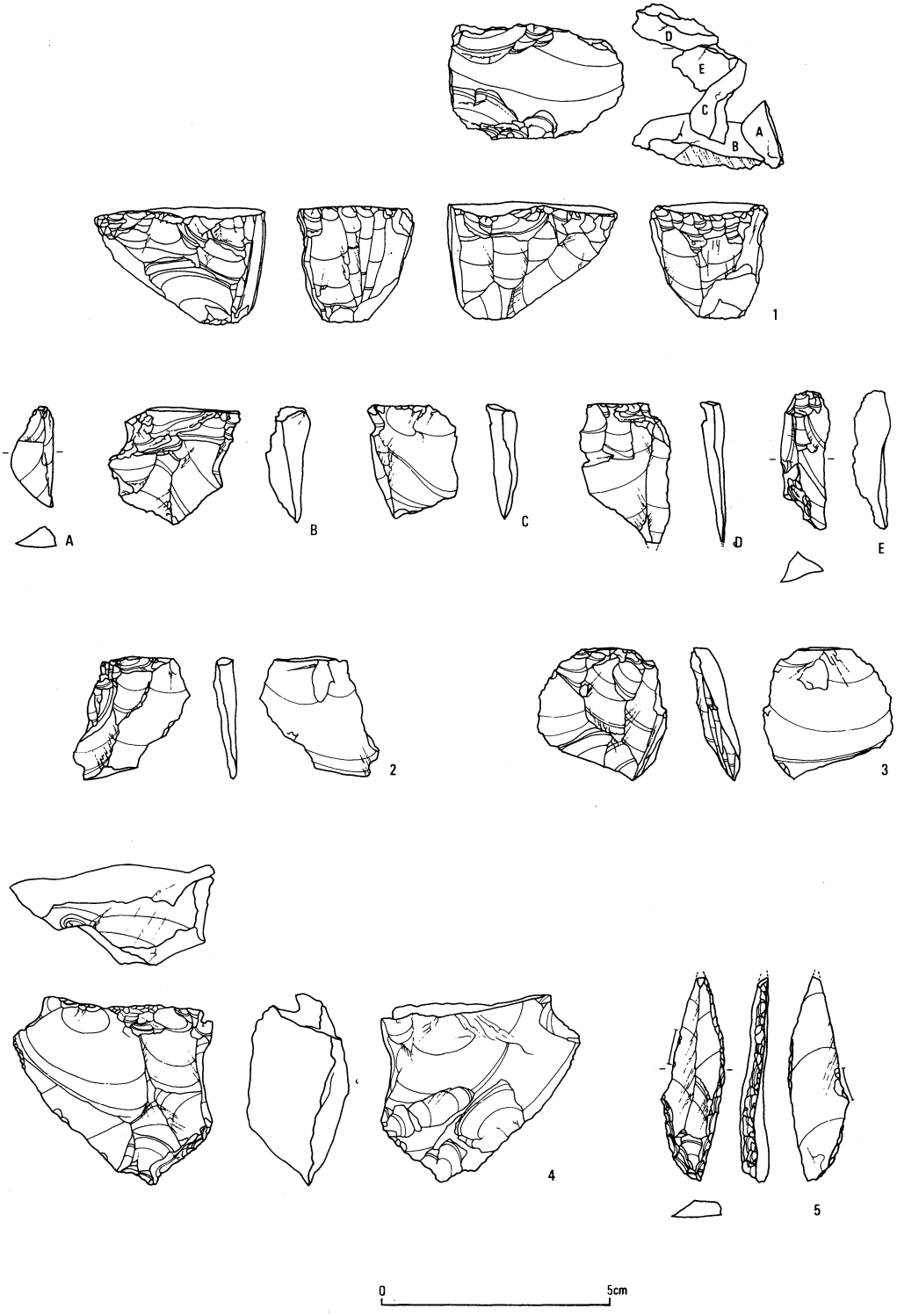
第53図4は，表裏両面で不定形剝片の剝離が行われた石核である。表面側では，右側下端からの作業の後，上端からの剝離作業が認められる。裏面側には，下端からの小剝片の剝取の跡が見られる。ただし，これ自体も一個の剝片であり，剝片素材の石核の表裏両面で剝片の剝取を行ったとも解しうるし，また，より大きな石核からいったん剝離された大型剝片が石核として再利用されたとも考えうる。後者の場合は，剝片再利用後の石核における剝片剝離作業は，裏面側において実施されたと見なすのが自然であろう。なお，第3の理解として，本例は元来剝片素材の石核であって，裏面側の小剝片剝離痕は表面側の作業に対するいわば打面調整と見ることもなお可能であろう。

剝片（第53図　A～E，2・3）

本遺跡出土品中でもっとも多いのが剝片である。ここで剝片としたのは，トゥール以外の資料から石核・砕片を除外したものを一括しているので，この中には当然多様な性格のものが含まれることになる。ここでは，細石核第1例と同一個体で，接合の結果，細石核の体側部の調整過程を示す5点の調整剝片について言及しておくことにしたい。

A～Eまでの5点のうち，Aは単独資料の場合，細石核の調整剝片とは認め難いであろう。Eは，いわゆるクレステッドフレイクまたは稜付剝片（石刃）で，石刃技法との関連でも生じうるが，本遺跡では石刃技法は認められないので，単品の場合でも，どのような作業過程で生じたものかは推測がつく。類例は，使用痕ある剝片の内の2例（第52図3・4）および№30（ミI7・G13，その1；表21参照）を挙げることができる。

B～Dは，剝片自体の特徴の中に，船野型細石核の体側部調整過程で生じた剝片であることが明瞭にうかがわれる例である。すなわち，幅広で水平の打面を留めた逆3角形状の剝片で，背面側には主として打面から加えられた大小の剝離痕を留め，打面と接した頭部には細かな剝離痕の密集が認められる点がその特徴である。類例は，第53図2・3にもある。ことに同図3の例は右側縁にフルーティングの痕跡を留めており，石核正面の細石刃剝離作業面に接した側



第53図　先土器時代石器実測図

面から剝ぎ取られた調整剝片であることがよく分る。このような剝片の特徴については，静岡県広野北遺跡の例で詳しく述べたことがある。(注1)

砕　片

黒曜石製の微細片1例（表21№35）がある。ただし，本例は細石刃の頭部破片であるかもしれない。

礫

拳大の円礫が1点ある。受熱の痕跡も使用・加工痕も認められない。何らかの目的で遺跡内に運び込まれた自然礫である。

ナイフ形石器（第53図　5）

石刃（状剝片）を素材としたナイフ形石器が，本遺跡から1点得られている。V－3区縄文時代遺物包含層から発掘されたものである。本来ローム層中に包含されていたものが，縄文時代の遺構構築の際に浮き上ったものと推測される。

（注1）鈴木忠司・黒坪一樹・徳永裕「第IV章　細石刃文化」（『広野北遺跡』所収，京都，1985年）。

接合資料

I－7区出土の石器52点の中には，同一個体に属すると判断される資料2点以上で構成される個体別資料が8例ある。このうち細石核を含む7点の資料からなる個体別資料№1は，5点の接合資料を有している。本例によって，宮地前遺跡の細石刃剝離技法の一端をうかがい，あわせて本遺跡の剝片剝離技法一般についても言及しておきたい。

第53図1の打面の右側に，A～Eの調整剝片5点の接合状態の上面観を図示した。A～Eの剝片と石核本体とは接合しないので，両者の間には当然空隙の存在が予想される。この空隙がどれほどのものであるかは想像の域を出ないが，石材中の縞文様などから図示したような位置関係を想定しておきたい。

5点の接合資料のうち，断面3角形で中央に稜を持つクレステッドフレイク（E）は，石核背面中央稜線の延長上に位置すると考えられ，この周辺に石核側部の調整剝片A・B・Dと中央よりのCが位置している。したがって，この5点の接合資料は，分割礫の打面から外縁を剝離加工し，舟底形の母形を作出する過程の最終段階で，細石刃を剝取する直前までの作業段階を示す一群と理解することができる。この後，石核本体と接合資料群との間に存在する1.5cmほどの空隙で，細石刃剝離作業が実施されたものと予想される。

空隙の中では，A～Eの調整作業直後の細石刃剝離作業に後続した作業として，A～Eの接合資料同様の調整加工が行われ，現存する石核本体の背面を残したことになったのであろう。この点はA～Eの接合群の幅が3.6cmで，石核本体の幅2.6cmより，1cm程広いことからも予想される。すなわち，A～Eの接合群の剝離の後細石刃の剝離におよび，この後の再度の石核調整は，現石核の背面の延長上（細石刃剝離作業面部分）と側面の双方で実施されたはずであり，この際の側面における調整作業の間に，上記の幅1cmの差が生じたものと考えられよう。このように考えると，図示した空隙はもう少し大きかったのかもしれない。石核の現正面側での作業

経過を考えると，この石核の本来の長さは，現存値の数倍の大きを有していた可能性すら考えられ，その幅も残核よりも相当大きかったと考えて支障ないであろう。

現存する石核と調整剝片の接合例から，上述のような作業過程を予測した。したがって，本石核は，正・背面両端において，細石刃の剝離を実施した例として理解できることになる。石核本体それ自身には，細石刃の剝離作業の痕跡を留めない背面側に，接合作業の結果細石刃の剝離作業を認めえた同様の例は広野北遺跡にもあり，残核において観察される例よりも一層多くの場合に，両端において細石刃剝離作業を実施するのが，船野型細石核の実体であるのかもしれない。

細石核２例の打面角は，それぞれ85・85度であり，ほぼ打面角が直角で水平打面になったところで作業は中止されている。打面角と作業面再生作業との関連については，広野北遺跡の報文の中でも詳しく触れたので，ここでは，この作業にかかわる資料に関してのみ言及しておきたい。作業面再生作業によって生じたフルーティングの痕を留める作業面再生剝片は，ここで報告する資料中には認められないが，細石刃剝離の直前に，細石刃剝離作業面の中央で取られたと考えられる剝片としてクレステッドフレイクがある（第52図３・４，第53図Ｅ）。これは作業面再生剝片ではないが，細石刃の剝離を開始した時点での打面角を知る材料となるという点で注意しておく必要がある。第52図３・４および№30（表21）の剝離角は，それぞれ113・114・114度であるので，打面角はそれぞれ，67・66・66度ということになる。したがって，水平打面になって，細石刃剝離作業が中断されるまでの，細石刃剝離に有効な打面角は，約65度から90度までの約25度の間であるということになる。

以上の観察所見から，宮地前遺跡検出の船野型細石核の作業過程は，残核から予想されるよりも相当に大きな細石核母型から出発し，打面角65度前後から90度前後までの細石刃剝離有効打面角を保つ間の細石刃剝離作業を経て，再度石核の正面と側面側で調整剝離を加えて，再び細石刃剝離を実施するという過程の繰り返しが予想されるところとなった。この間に，細石核は前後方向に大きく長さを減少させ，同時に当初に比べて相当幅も狭めつつ，残核に至ることになる。この際，作業面は正・背面の両端で実施されることが意外に多いことも考慮される必要がある。

細石刃以外にも当然ながら，多数の剝片が生み出されている。これらは，いわゆる不定形剝片であって，掻器・削器の製作のための特別な素材を供給する剝片剝離作業があったとはにわかにいいがたいが，見方によっては剝片の中に一定の共通要素を見出すことも可能のように思われるので，この点についても触れておきたい。

剝片の中にいわゆる石刃はない。したがって石刃技法の存在は予想しえない。しかし，剝片の大小，縦長，横長を問わずまず目につく特徴は，非常に大きな打面を留めているという点である。この打面の幅は，剝片自体の幅とほぼ同じか，打面の幅が剝片の最大幅を示すとでも誇張して差しつかえないほどである。厚さについても同様である。こうした特徴は，剝片の平面形が逆３角形または逆台形を示す例が多いことと軌を一にしている（第51図３・４，第52図２・５）。

不定形剝片としかいいようのない剝片（第51図5，第52図1）があることはもちろんだが，上記の特徴は，明確な作業過程と目的剝片に対する意識があり，細石刃技法とは別の剝片剝離作業の存在を予想させるに十分なものであるように思われる。第53図4に図示した石核も上記の特徴に合致する要素を含んでおり，これが石核自体として好例とはいえないまでも，こうした剝片剝離技法の一端を示しているのかもしれない。いずれにしろ、ここで取り扱う資料はあまりにも少ない。別府大学調査資料との照合や今後の調査によってこの点は明らかになろう。

5．おわりに

2m四方に満たない小さな面積の発掘結果ではあるが，ここに報告した資料群は，その後の別府大学調査資料とあわせて考察されることによって，東九州の細石刃文化の研究に少なからぬ貢献をなしうる好資料であると思う。本資料の意義については，かっても触れたことがあったが、(注1)ここにその全容をほぼ示すことができ，やっと肩の荷を下した思いである。我々の調査ブロックも含めて，今後も調査が継続され，宮地前遺跡の集落の全体像が明らかにされることを期待したい。最後に発表の場を御提供いただいた橘昌信先生に末尾ながらお礼申し上げる次第である。

なお，この間の作業には，以下の方々に御参加をいただき御協力を賜った。御芳名を記して，お礼申し上げたい。

徳永　裕・黒坪一樹・土江伸明・安部慎一・竹内義治・湯村　功・宮内智加・高田里美・早瀬貴代・山口晴子　（順不同・敬称略）

（注1）鈴木忠司「東海地方の細石刃文化について」（『日本古代学論集』所収，京都，1979年），27ページ。

表21　I－7区出土遺物一覧表（平安博物館調査）

No.	遺物番号	類別	出土層	レベル	位置 N(cm)	位置 W(cm)	個体No.	挿図No.	石材
1	ミI7C15	A Sc	VI	−377.3(イ)	140	165	(2)	51-4	R
2	C16	A Sc	VI	イ	55	1	(3)	52-1	R
3	C17	D Mc	VI	−388.5(ハ)	48	160		52-7	R
4	C18	D Mc	VI	−394(ハ)	155	126	(1)	52-6	R
5	C19	A Sc	VI	−380(イ)	168	20		51-5	R
6	C20	A ESc	VI	−389(ハ)	200	100	(2)	51-3	R
7	ミI7・G6その1	A UF	VI					52-2	R
8	その2	B	VI				1	53-1D	R
9	G8その1	A UF	VI(最上)	−370(イ)	136	114		52-3	R
10	その2	B	VI(最上)	〃	184	140	(2)		R
11	その3	遺物未確認	VI(最上)	〃	190	130			
12	その4	B	VI(最上)	〃	148	100	(2)		R
13	その5	B	VI(最上)	〃	70	60		53-2	R
14*	その6	B	VI(最上)				(2)		R
15	その7	B	VI(最上)				1	53-1A	R

No.	遺物番号	類別	出土層	レベル	位置		個体No.	挿図No.	石材
					N(cm)	W(cm)			
16	その8	B	VI(最上)				(4)		R
17	その9	B	VI(最上)				1	53-1C	R
18	その10	D	VI(最上)				(8)	53-4	R
19	G9その1	B	VI	イ	180	165	(2)		R
20	その2	B	VI	イ	92	163	(3)		R
21	G10その1	A UF	VI	ロ	137	180	(8)	52-4	R
22	その2	B	VI	ロ	170	130			R
23	その3	A MB	VI	ロ	155	180		51-1	OB
24	その4	B	VI	ロ	160	140	1		R
25	その5	B	VI	ロ	126	145	(5)		R
26	その6	B	VI	ロ	130	150	(5)		R
27	その7	B	VI	ロ	195	155			R
28	G11	B	VI	ハ	76	140	1	53-1B	R
29	G12	自然礫	VI	ロ	180	150			AD
30	G13その1	B	VI	イ	194	70			R
31	その2	B	VI	イ	153	2			A
32	その3	B	VI	イ	170	200			R
33	その4	B	VI	イ	153	47	(7)		R
34	その5	B	VI	イ	146	181			R
35	その6	C	VI	イ	171	13			OB
36	G14その1	A UF	VI	ロ	173	54	(4)	52-5	R
37	その2	B	VI	ロ	125	35	(6)		R
38	その3	B	VI	ロ	159	23	(5)		R
39	その4	B	VI	ロ	168	58	(3)		R
40	G15その1	B	VI	ハ	198	133		53-3	R
41	その2	B	VI	ロ	155	82	(3)		R
42	その3	B	VI	ハ	184	72	(6)		R
43	G16その1	B	VI	ニ	172	45	(7)		R
44	その2	B	VI	ニ	155	170	(1)		R
45	その3	B	VI	ニ	158	170			R
46	その4	B	VI	ニ	182	138			AD
47	その5	B	VI	ニ	177	158			R
48	その6	A MB	VI	ニ	145	49		51-2	R
49	その7	B	VI	ニ	185	120	(7)		R
50	その8	B	VI	ニ	183	125			R
51	その9	B	VI	ニ	163	172	(7)		R
52	その10	B	VI	ニ					R
53	G17	B	VI	ヘ	184	58			R

A：トゥール類，B：剝片，C：砕片，D：石核，SC：削器，ESC：掻器
UF：使用痕ある剝片，MC：細石核，MB：細石刃，
R：流紋岩，OB：黒曜石，AD：安山岩
イ～ヘ：6層上面から7cmごとにイ・ロ・ハ…とする。したがってヘは6層上面から35～42cmの間の出土品であることを示す。レベルは第49図参照。
個体No.のうち（ ）のあるものは非接合，（ ）のないものは接合資料であることを示す。

9章　ま　と　め

1．旧石器時代

今回の宮地前遺跡の発掘調査において出土した旧石器時代の石器群の総数は，127点であり，その数は必ずしも多くない。

それらの石器群の出土層位は，Ⅵ層からⅧ層上部にかけて出土した細石刃を主体とする第1文化層，Ⅷ層中部から出土した縦長剥片の第2文化層の2つの文化層の存在が予想されよう。ただ2つの文化層は層位的に接近しており，しかも第2文化層と推測される石器群の数が極めて少数で，定型的な石器が認められないことから，その認定に明確さを欠く。

第1文化層の生活面については，台石・礫などの出土状況から，Ⅷ層上部すなわちハードローム層の上部が想定できよう。細石刃もⅧ層上部に集中する傾向が見られる。

細石刃の他に，スクレイパーと使用痕のある剥片があり，スクレイパーは，この時期に特有な急角度で鋭利な刃部を持つものである。今回の調査で細石核は出土していないが，剥片の中には，細石核の側面調整の剥片と考えられるものがある。この調整剥片や細石刃の打面の形状，流紋岩の石材などから予想される細石核の形態は，宮崎県の船野遺跡で注目された「船野型細石核」と考えられる。実際，平安博物館が行った宮地前遺跡の発掘調査で，船野型細石核の好資料が発見されている。

細石刃を主体とする宮地前遺跡の細石器文化の時期については，その出土層位から判断する限り，Ⅷ層すなわちハードローム層の上部に生活面が考えられることから，東九州における細石器文化の中では古い段階が予想される。大野川流域において，船野型細石核が層位的に出土している遺跡として，大野郡三重町の上下田遺跡，大野町小牧遺跡，犬飼町松山遺跡などが知られているが，いずれもソフトローム層への漸移層からソフトローム層中にかけて主要な文化層である。この点からすると，宮地前遺跡での包含層はより下位に存在することになる。ただ，宮地前遺跡では大野川流域での基本的な層序で認められるソフトローム層の堆積が薄い事が問題として残るであろう。

第2文化層については，出土点数が極端に少なく，細石刃などの出土層と接近していることなどから，別の文化層の認定するには無理があろう。ただ，表面採集のナイフ形石器の存在を考慮すると，ナイフ形石器の文化に伴う文化層が予想されるかも知れない。

以上のように，細石器文化の古い段階や細石器文化とナイフ形石器文化の2つの文化が存在する可能性が予想されるものの，発掘面積が限られた狭い範囲ということもあり，今回の調査では不明である。

昭和48年の平安博物館の調査で，細石器文化の文化層が確認され，50点余の遺物が出土したI-7区の調査区と，今回の発掘調査で細石刃を主体とする遺物が出土したH-9とJ-8・9・10とは，

極めて接近した地点と考えられ，数メートルも離れていないであろう。このことは土地の所有者の話や，前回および今回の地形測量図からも明らかである。しかしながら，前回調査の掘りかた（発掘区の痕跡）は今回の調査区のいずれの個所においても確認できなかった。I-7区とH-9，J-8・9・10で出土している石器群はおそらく平面的遺物集中域（ブロック・ユニット）として，把握できると思われるが，今の時点では明確な判断を下すことはできないであろう。この点についても，ある程度広い範囲を調査区に設定した発掘調査が望まれる。

2．縄文時代晩期の土器

宮地前遺跡は縄文時代遺物については早期～晩期まで連続してみられるが，出土量のもっとも多いのは晩期の土器である。そこで，宮地前遺跡出土の晩期土器についてこれまでの編年に準じて編年的位置を与えてみたい。(注)

Ⅰ期は，御領式土器の伝統下に，今まで大石式および晩期Ⅰ$_a$式とされてきたものである。

深鉢は，口縁部が垂直に立ち上がるA-1類と，口縁部が屈曲して立ち上がり，1条の細い沈線文をもつB類，そして口縁部が直線的に開くC類がこの時期にみられるようである。C類に関しては形態的変化に不明瞭な点を残すものであるが，Ⅰ期～Ⅲ期までの時期幅に置いておく。

浅鉢も，御領式土器の伝統下に，凹線文から沈線文へと変化を生じ，口縁部が垂直に立ち上がるA類および，口縁部が波状を呈するE類が相当するものである。

Ⅱ期は，大石式・晩期Ⅰ$_b$式・浦久保式とされている土器の時期に相当する。

深鉢は，A-1類よりも口縁部が外傾し，口縁部内面の立ち上がりに不明瞭さを持つA-2類が相当する。

浅鉢は，B-1類がこれに相当し，口縁部は垂直に立ち上がり，1条の沈線文を施す。さらには，口縁下端と，胴部屈曲部に凹点を施している。また内面に沈線文を施すF類も含まれるであろう。

Ⅲ期は，黒川式晩期Ⅱ式の時期に編年される。

深鉢は，A-2類で外湾気味であった口縁部が，広くなり，沈線文も多条化してきたA-3類が相当する。

また浅鉢は，Ⅱ期のB-1類に比較すると，やや外湾気味に立ち上がっておりB-2類をこの時期に相当させたい。

このⅢ期をもって口縁部外面に沈線文を施す深鉢A類は出現を終え，次の無刻目突帯文土器の出現を迎えることになる。

Ⅳ期は，これまでの黒川式晩期Ⅱ式に加え，上菅生B式がこの範囲に入る。

Ⅳ期の深鉢は，上菅生B式の単純期である。いわゆるD類としたものであるが，量的にももっとも多く，晩期深鉢41点中，19点がこの類を占めている。

口縁部がわずかに外反する類（33～41）と外傾しながら直口する類に分れる（42～51）。さらには突帯断面コの字状になるものと，3角形を呈するものなどがあるが，この貼り付け突帯の形

態と時期差に関しての属性は見いだしていない。

また，口縁部が外反するもの，内反するもの，直口するものが知られているが，全形態を知り得る資料が少ないだけに，この型式は時期幅，セットとしてとらえられる浅鉢，分布域も含めて確定できない部分が残る。

Ⅳ期の浅鉢として，口縁部が簡略化され，頸部と一体化したB-3類および口縁部がやや肥厚しているC類がこの時期に相当すると考えられる。他にD類，G類，H類もこの期に含めた。もっとも，D類は早くから上菅生B式に伴う浅鉢として周知されていた類である。

以上，宮地前遺跡における晩期前半の編年を試み，説明を行った。しかしながら今回の調査で得た出土資料は10cm足らずの小さな土器片ばかりであり，今後さらに検討を加える必要があろう。

(注)　高橋信武・安藤栄治「大分県宮地前遺跡の採集資料—大分の晩期前半を中心にした土器編年—」赤れんが2　1983年
坂本嘉弘「大野川中流域における縄文後・晩期土器の編年」大野原台地の先史遺跡　大野町教育委員会　1984年

3．縄文時代の石器

縄文時代の石器は，1次調査から3次調査を通じて約400点出土した。石器組成は，打製石斧・横刃形石器・敲石類・2次加工剝片（黒曜石製）などで，小数ではあるが，石鏃・刀剣形石製品などもみられる。

石材は安山岩が多く用いられ，打製石斧・横刃形石器・敲石類・石皿にはすべて安山岩が使われている。その他，刀剣形石製品には緑泥片岩，石鏃にはサヌカイト質の安山岩やチャート，2次加工剝片には阿蘇産と推定される黒曜石や，姫島産の黒曜石が利用されている。姫島産の黒曜石を素材とした石器・剝片などの出土点数は安山岩製の石器類に比べて多いが，その大部分は細片である。

打製石斧は黒曜石製の剝片につぐ出土点数である。これら打製石斧はI_a類がもっとも多く，ついでI_b類，II類と続く。III類は1点のみ出土したが，破損品であるために，その実体はつかめない。未成品と考えられる資料中にはそのまま使用された可能性のあるものが含まれる。

横刃形石器は，円刃や直刃を呈するものがそれぞれ出土し，刃部に使用痕と思われる痕跡を残すものも出土している。採集資料の中には研ぎ出しが認められるものもあり，この石器の製作技法の一端が知れる。

ノミ形石器は1点出土している。この石器は刃部を残すのみである。石材は蛇紋岩。

礫器は1点のみ出土した。石材は安山岩で，打製石斧や横刃形石器と同質のものである。

2次加工剝片にはバリエーションがある。27と30に共通する事は，くさび形石器を思わせる刃部を形成していることである。2次加工剝片には，姫島産の黒曜石が多く用いられている。

石鏃は出土点数が少なく3点のみで，しかも2点が欠損品であるために明確な判断をしかね

る。石材は2点が安山岩で1点がチャートであり，黒曜石製の石鏃は認められなかった。

敲石類は37・39・52が敲打痕と磨痕を残し，機能，用途の幅広さを思わせる。

刀剣形石製品はすべて緑泥片岩を素材としている。すべて破損品のために全容を知るのは不可能である。

以上のように宮地前遺跡出土の縄文時代の石器で，もっとも特徴的なものは，偏平打製石斧と横刃形石器（石包丁形石器）であり，量的にも勝っている。

偏平打製石器・横刃形石器は，大野原台地の夏足原遺跡・駒方遺跡・二本木遺跡・片島遺跡などにおいて発見されている。この石器は宮地前遺跡の調査例でも明らかなように，縄文時代晩期前半の時期に盛行する特徴的な石器であるが，その出現の時期は後期後半にまでさかのぼる。先に挙げた夏足原遺跡F地区は後期中ごろから終末にかけての土器に伴っており，また，駒方遺跡C地区では後期後半の土器に伴って出土している。

大野原台地を始め，大野川流域の火山灰台地においては，後期後半から晩期前半にかけて特徴的に出土するこれらの偏平打製石斧・横刃形石器の存在は，当地域における原始的な農耕を示唆するものとして注目されている。

一方，当地域では晩期後半から弥生時代前半にかけての遺跡は，前の時期に比較して，その数は極端に減少している。この時期の単純遺跡の発掘例はきわめて少なく，土器セットや石器組成は不明な部分が多く，偏平打製石斧や横刃形石器の存在やそのあり方についても不明といわざるを得ない状況である。

4．弥　生　土　器

宮地前遺跡出土の弥生土器は，弥生時代前期後半に位置する板付II式の壺形土器片1点を除いてすべて弥生時代中期初頭から中期中葉に位置づけられるものである。

大野原台地において，この時期の良好な遺跡については調査例が少なく大野町宮迫遺跡，同町近中遺跡で弥生時代中期の遺物と住居跡2基が報告されているにすぎず，十分な資料が得られていない。

この点，本遺跡の出土土器は弥生時代前期後半から中期中葉まで一連の土器群の出土例をみることができる。ただ，出土遺物はすべて撹乱を受けた包含層から出土したもので，土器片も小さく明確なセット関係および遺跡内における編年を組むまでには至らなかった。

宮地前遺跡の弥生土器については以前，表採資料が報告されたことがあり，下城式土器および須玖式土器など弥生時代中期初頭～中期中葉の土器群が紹介されている。今回の調査資料の中には須玖式土器は含まれていないが，同時期併行の土器群と考えられる。

本遺跡の弥生土器は中期に主体を占めており，大野原台地内の弥生時代中期の様相を知るうえで良好な資料とされよう。

今後は，大野川流域で縄文晩期終末，弥生時代前期末から中期まで一環した流れの中で，海岸部から山間部へ土器文化がどのように広がったのかの究明が大きな問題となるであろう。

おわりに

宮地前遺跡は，大野原台地における縄文時代晩期および細石器文化の重要な遺跡として古くから知られているものである。別府大学付属博物館では，宮地前遺跡の数度の分布調査と試掘調査を行い，それに基づいて２回の発掘調査を実施した。今回発掘を実施した調査区は，作付けや厚い盛り土の関係で，十分な発掘面積を確保できず，そのため初期の目的を全部は果たすことができなかった。

この宮地前遺跡については，弥生時代中期，縄文時代晩期，旧石器時代終末の細石器文化，さらにそれ以前のナイフ形石器文化の存在も予想される複数の文化層を持っている重要な遺跡だけに，将来，本格的な発掘調査が必要であろう。

今回の宮地前遺跡の調査およびその整理と報告書作成は，別府大学史学科の考古学専攻生の熱心な協力のもとで実施された。また，報告書の執筆についても，時元省二・高松永治・藤本啓二・宮下貴浩・多田仁君らの協力で進められた。

さらに，この報告書の中に、昭和48年に平安博物館で実施した調査の先土器時代（旧石器時代）の貴重な成果を収めることができた。

ご多忙中，ご執筆いただいた鈴木忠司先生，それに報告について快諾をいただいた角田文衛博士，渡辺誠先生に心からお礼を申し上げたい。おかげでこの報告書を充実することができた。

分布・試掘・発掘など一連の調査において，土地所有者である河野秋政氏，河野幸繁氏をはじめこの地区の方々にお世話になった。

（なお，この調査の一部は，59･61年度の文部省科学研究補助金によるものである。）

発掘調査参加学生

国井和哉・田中正弘・木村暢孝・原裕司・長友郁子・岡崎幸子・白石美紀・時元省二・下田章吾・高松永治・藤本啓二・宮下貴浩・多田仁

昭和63年11月

別府大学文学部教授
別府大学付属博物館学芸員
橘　　昌　信

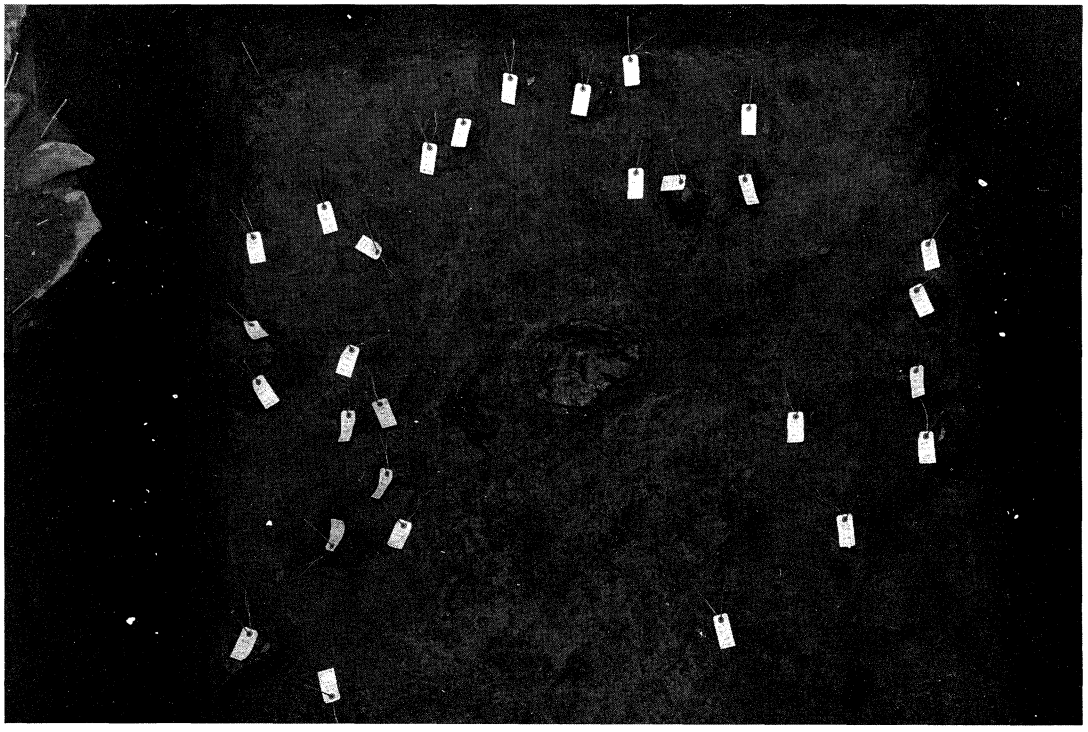
図版1

(1) 調査区遠景（南より）

(2) 調査区遠景（北より）

図版2

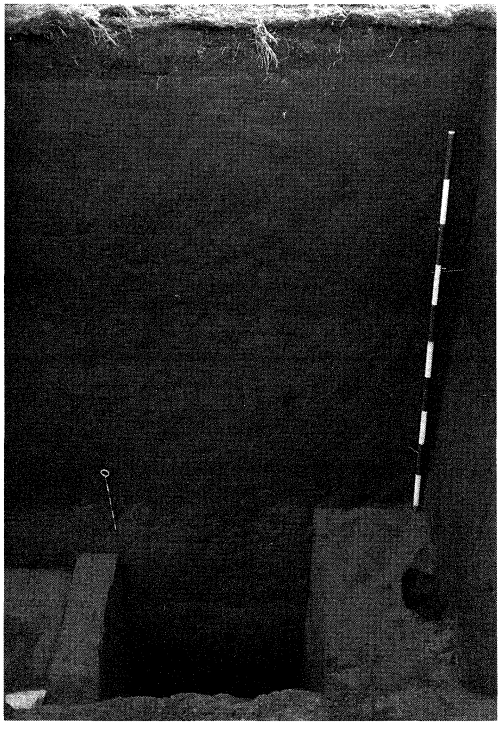
(1) 遺物の出土状況（H-16グリッド）



(2) 遺物の出土状況（H-9グリッド）

図版3

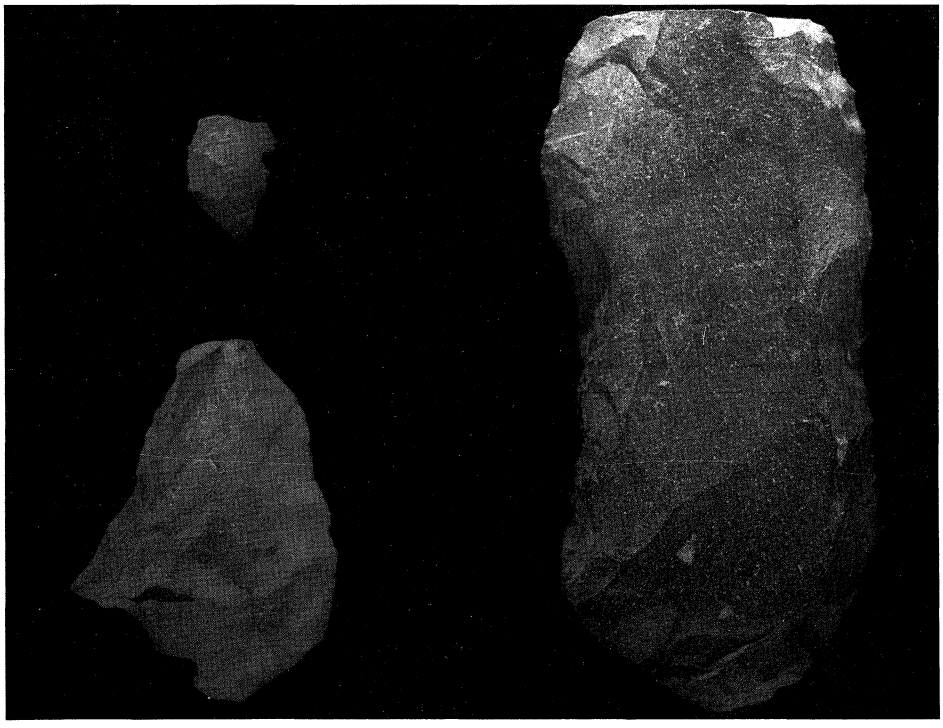
(1)　J－8・9グリッド土層断面



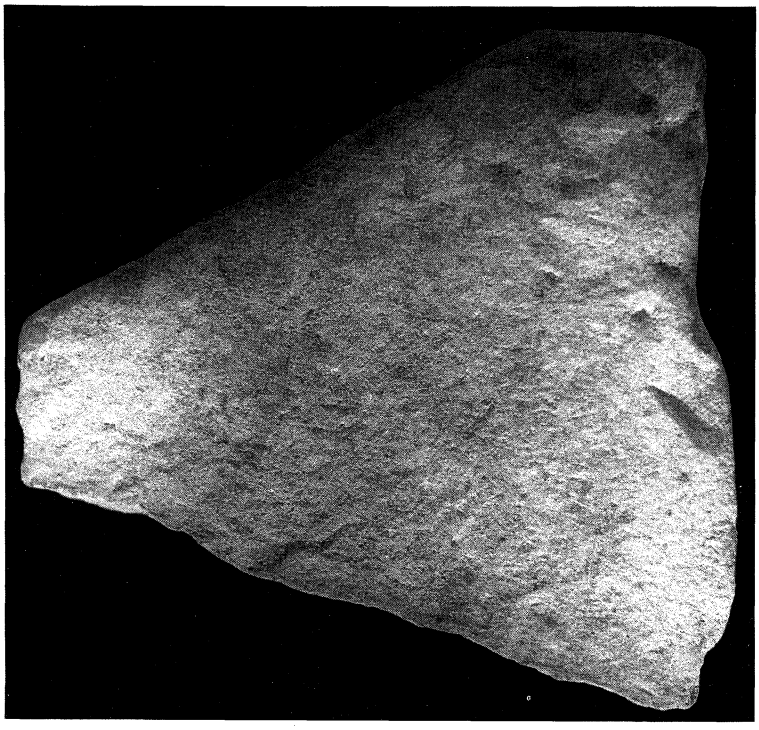
(2)　J－10グリッド土層断面

図版4

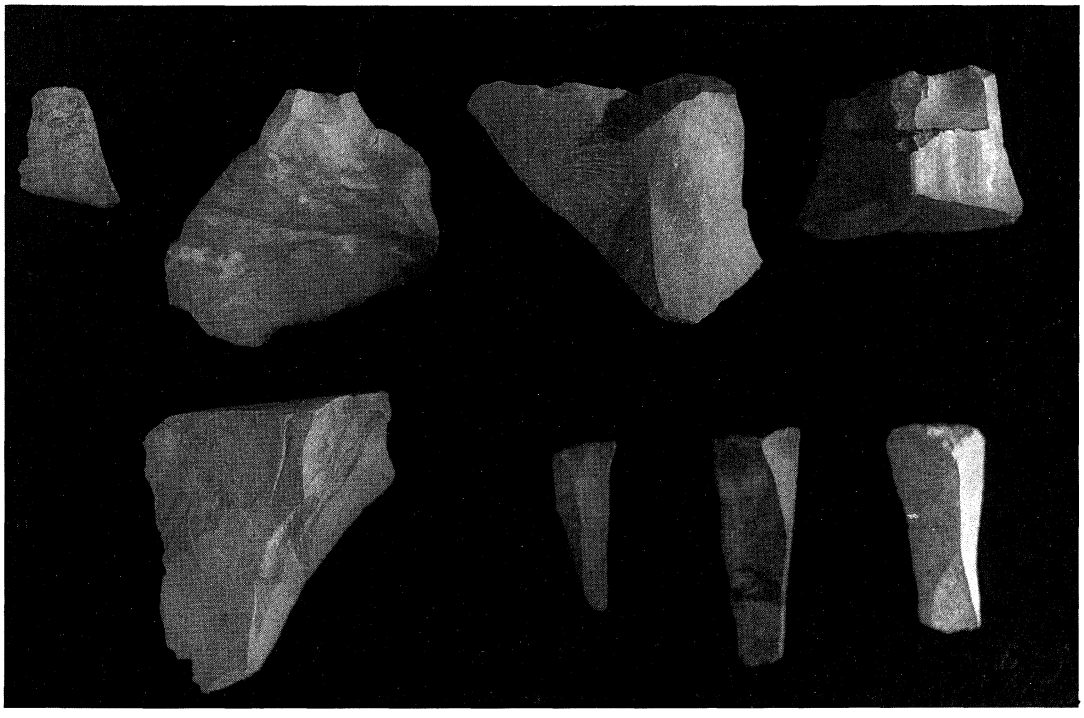
(1) 旧石器時代の遺物（細石刃）



(2) 旧石器時代の遺物 （スクレイパー・使用痕剝片）



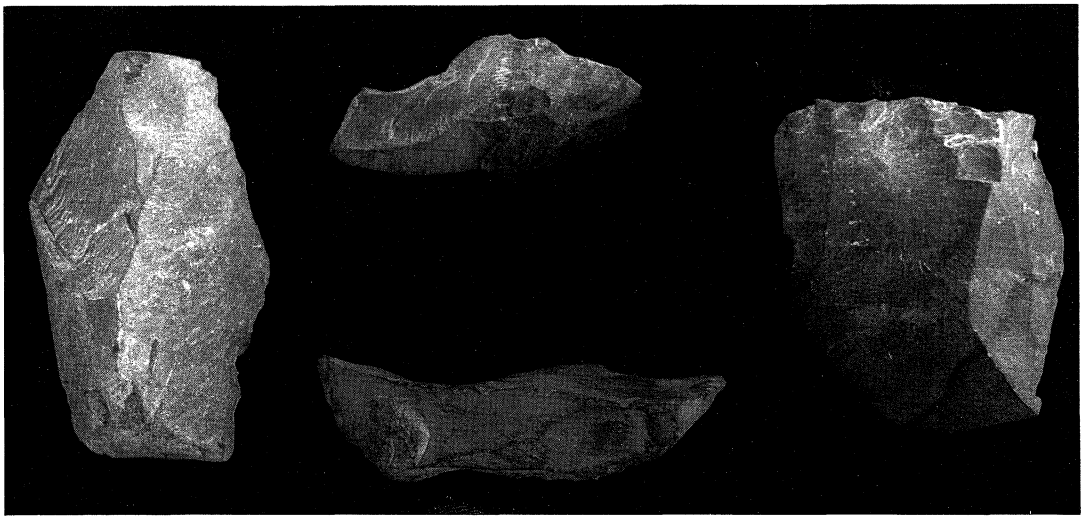
(1) 旧石器時代の遺物（台石）



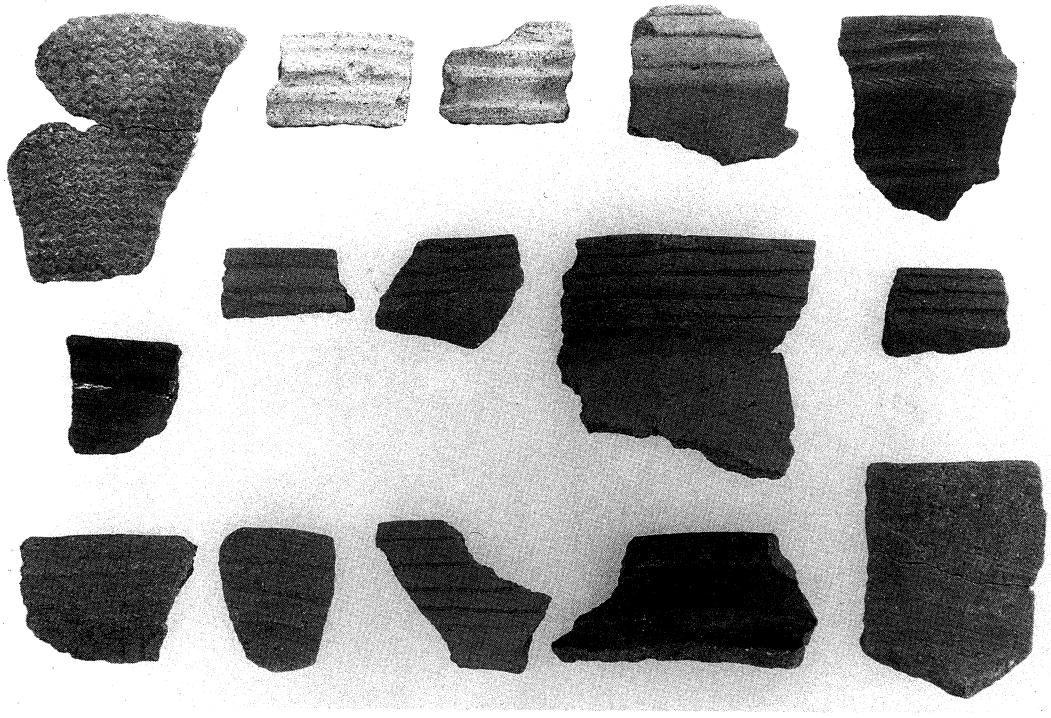
(2) 旧石器時代の遺物（剝片）

図版6

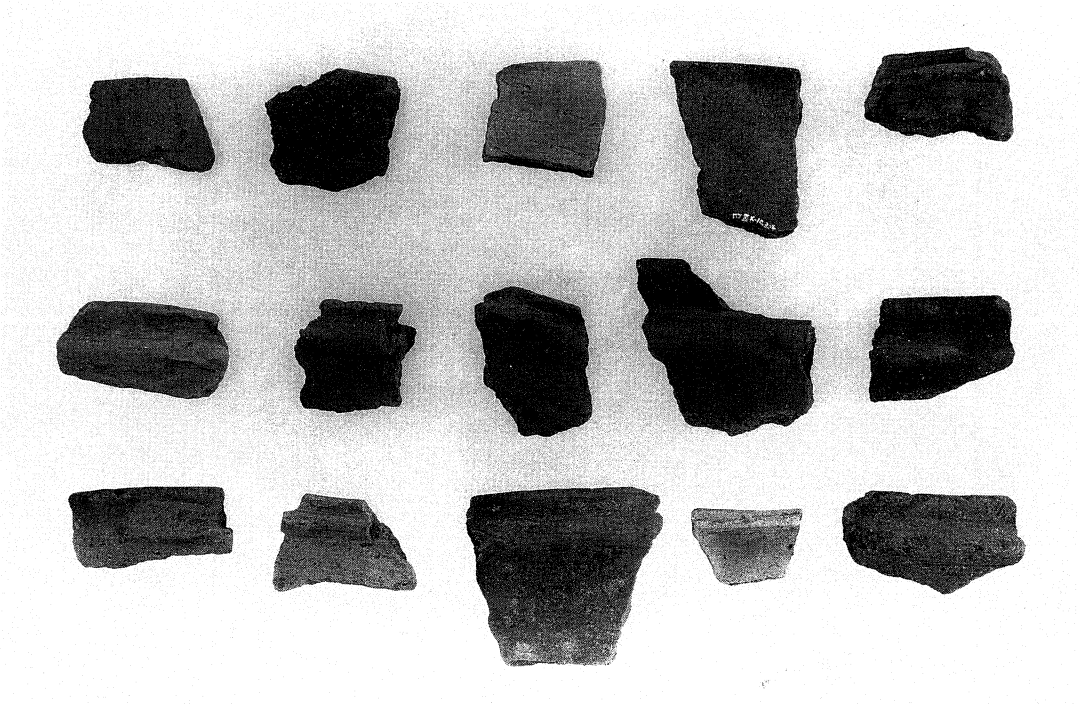
(1) 旧石器時代の遺物（表採遺物）（細石刃・ナイフ形石器・スクレイパー・尖頭器）



(2) 旧石器時代の遺物（表採遺物）（２次加工剝片・石核・剝片）

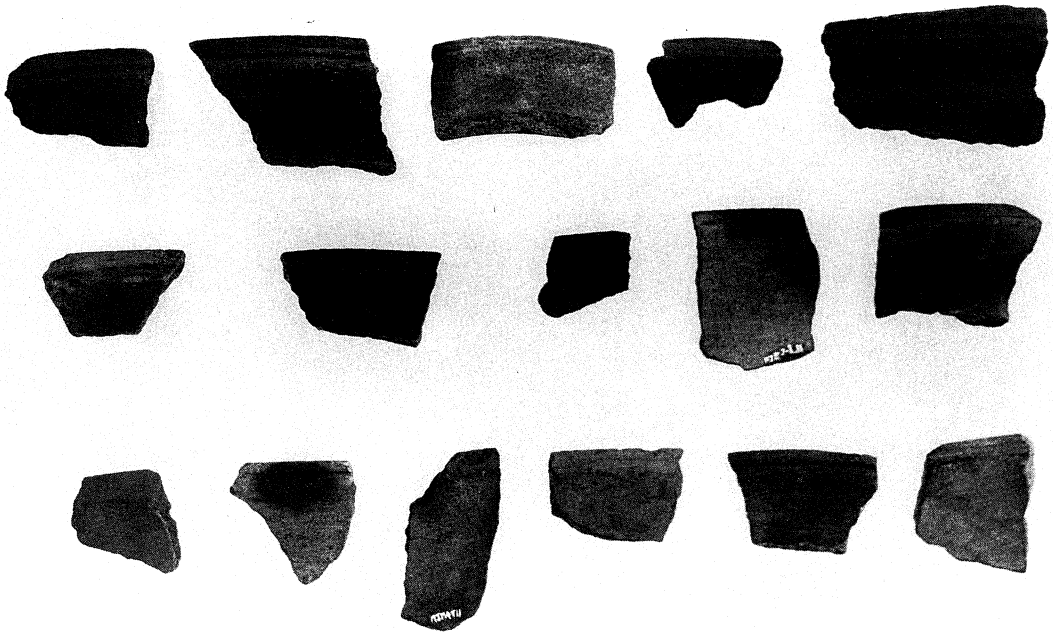


(1) 縄文土器（早期・後期）



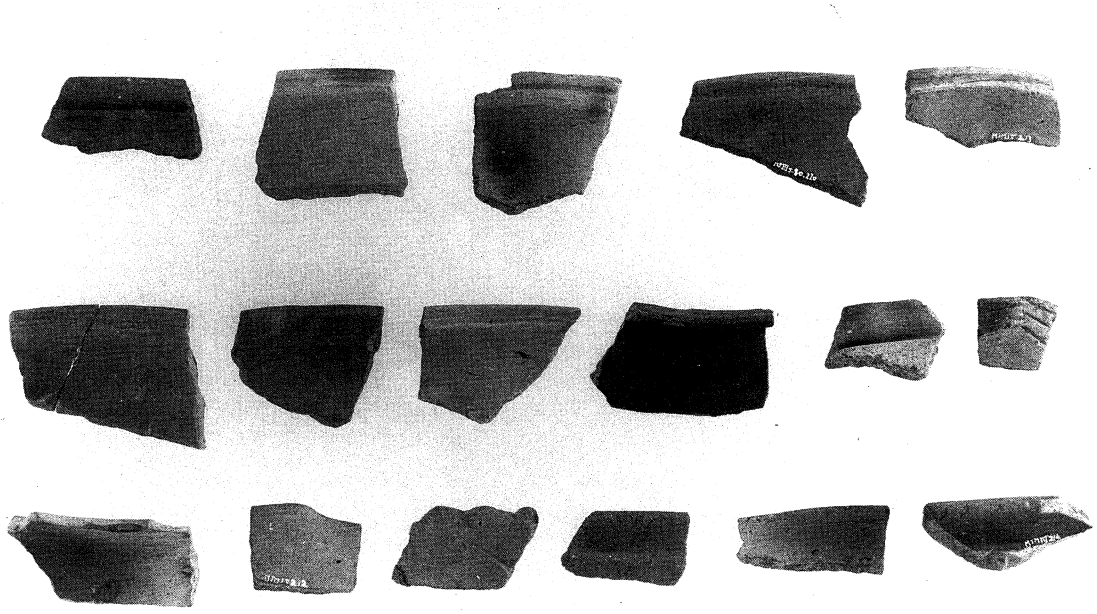
(2) 縄文土器（晩期）

図版8

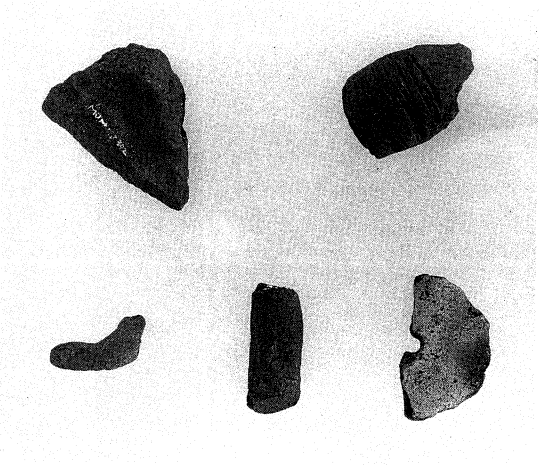


(1) 縄文土器（晩期）

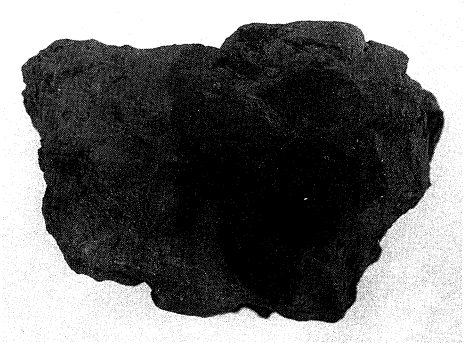
(2) 縄文土器（晩期）



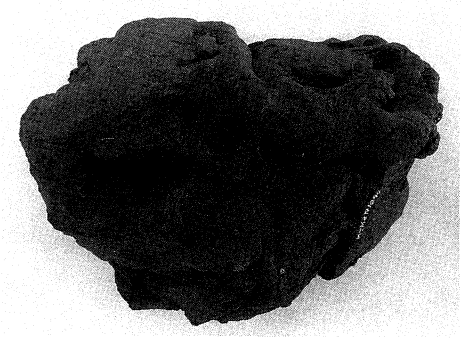
(1) 縄文土器（晩期）



(2) 土製品（土偶・紡錘車）

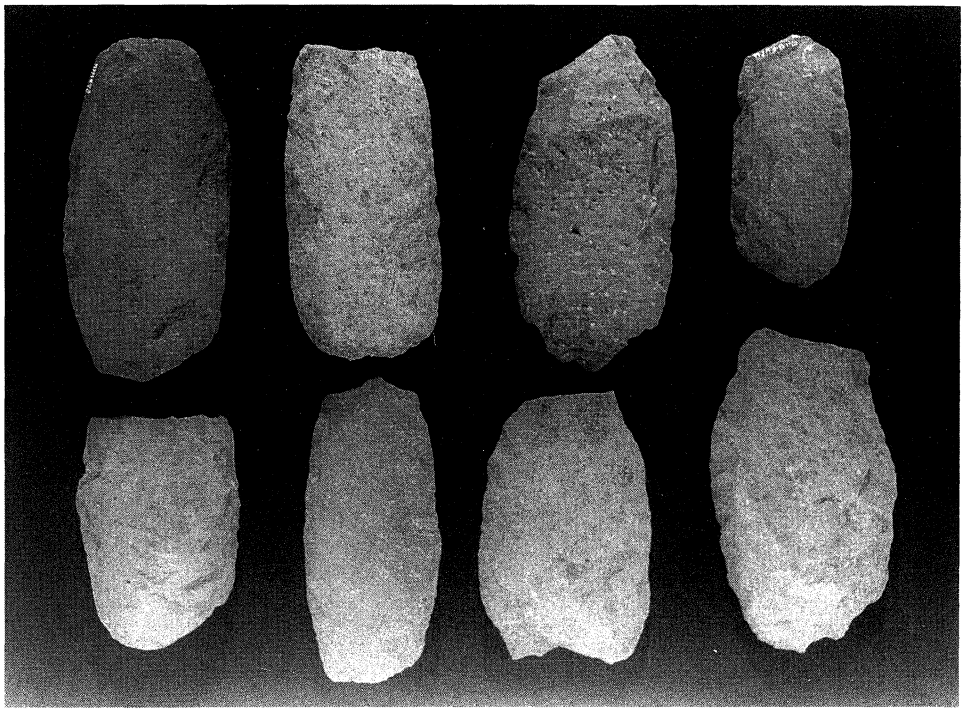


(3) 粘土塊

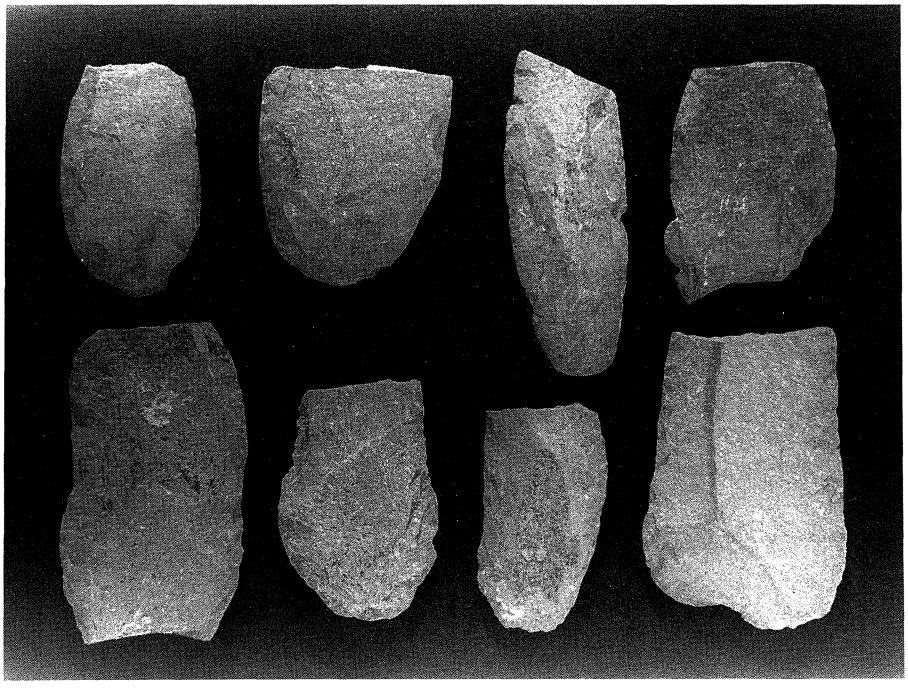


(3) 粘土塊

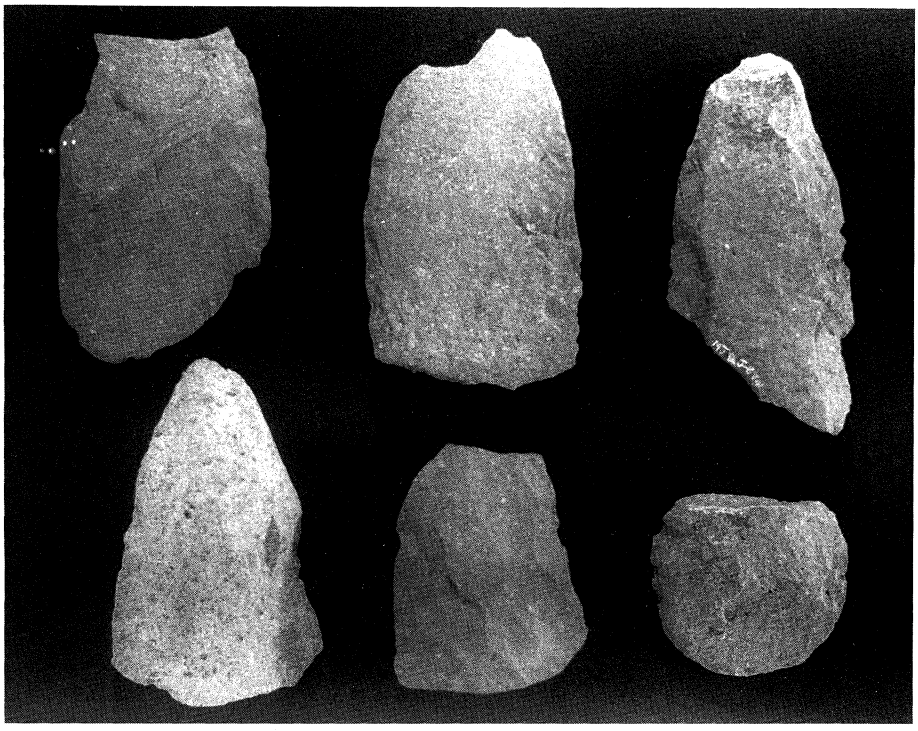
図版10



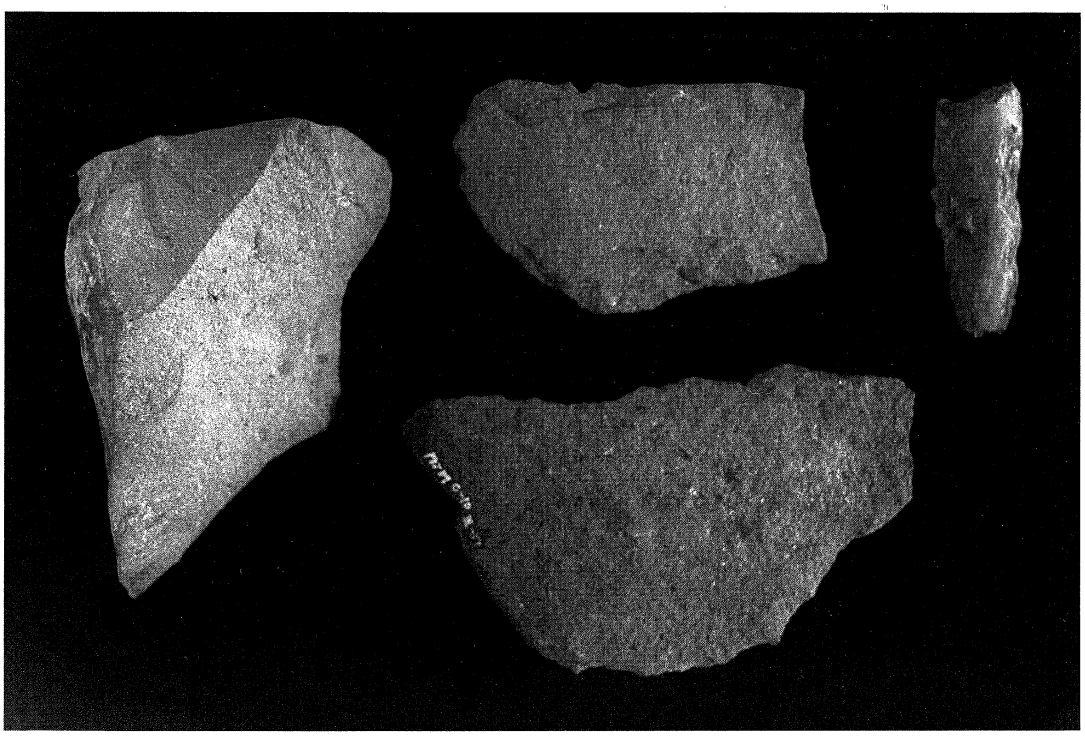
(1) 縄文時代の石器（打製石斧）



(2) 縄文時代の石器（打製石斧）

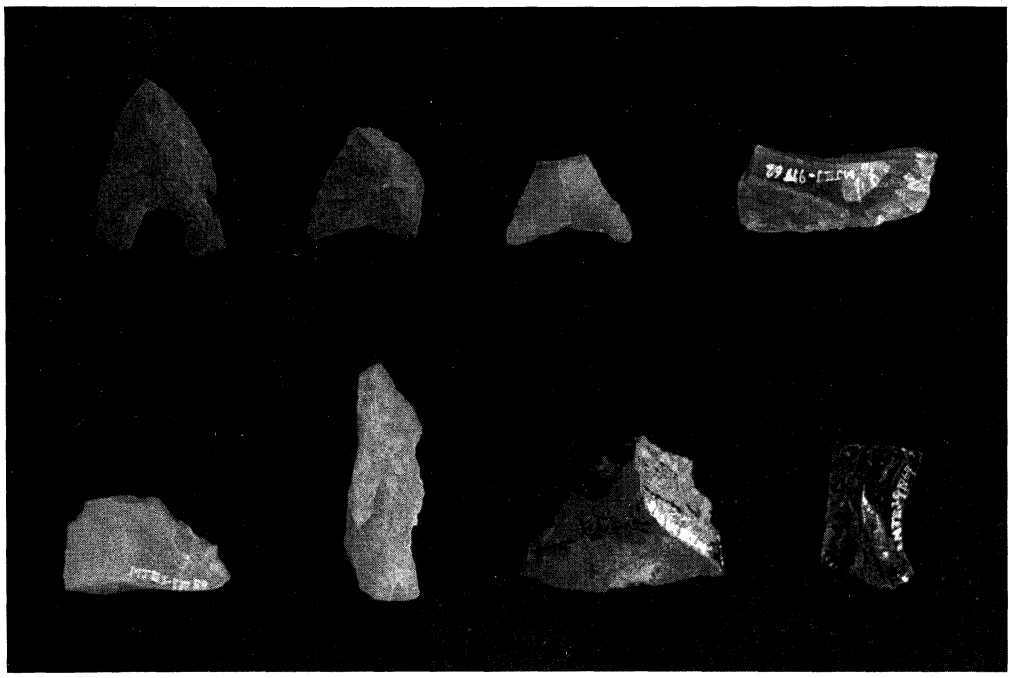


(1) 縄文時代の石器（打製石斧）



(2) 縄文時代の石器（横刃形石器・礫器）

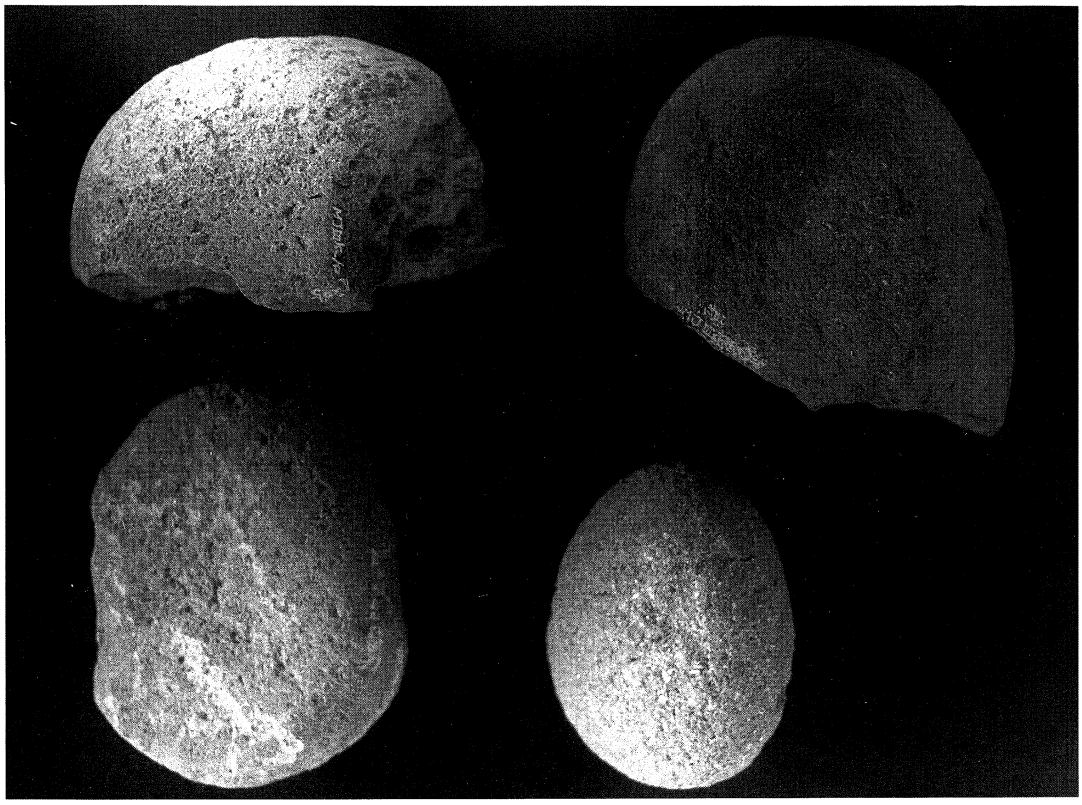
図版12



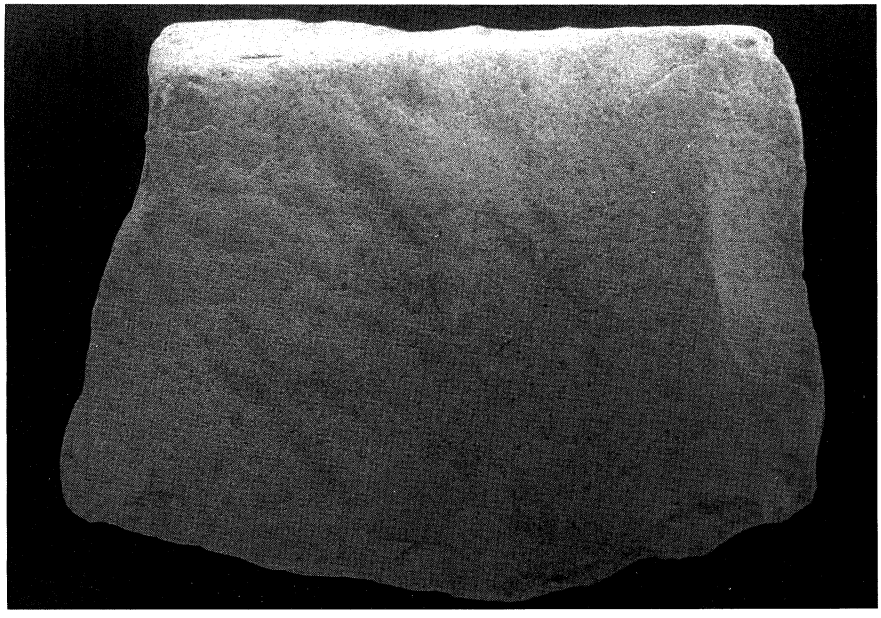
(1) 縄文時代の石器（石鏃・２次加工片）

(2) 縄文時代の石器（安山岩製の剝片）

図版13

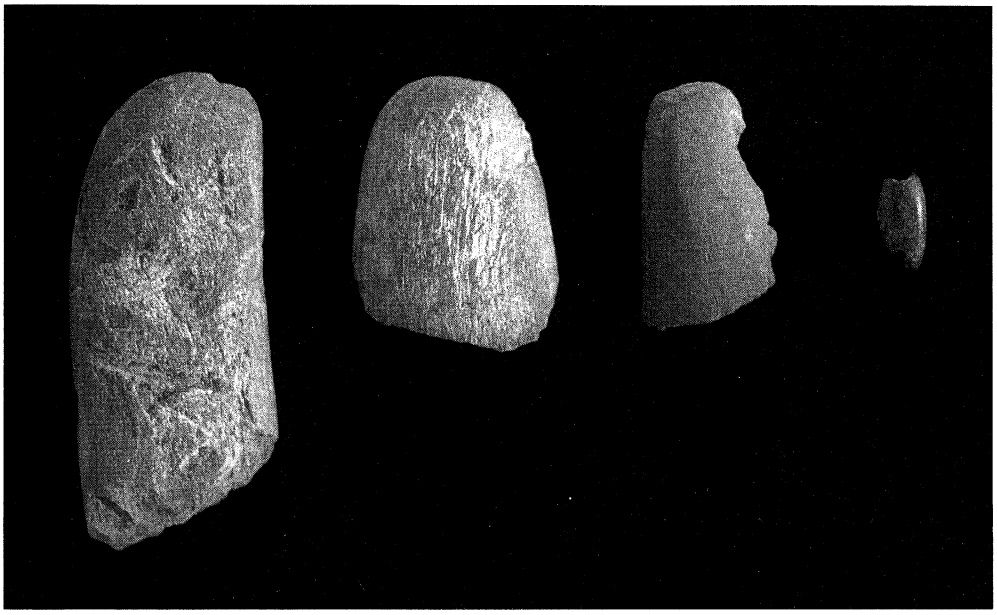


(1) 縄文時代の石器（敲石類）

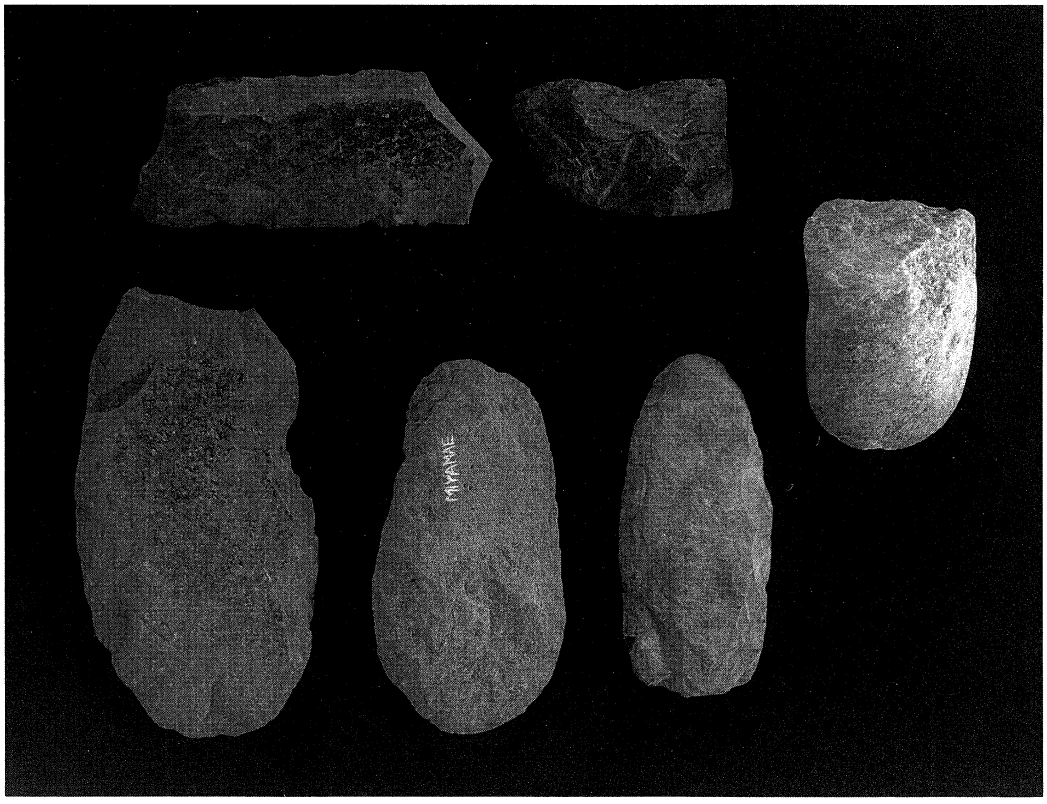


(2) 縄文時代の石器（石皿）

図版14

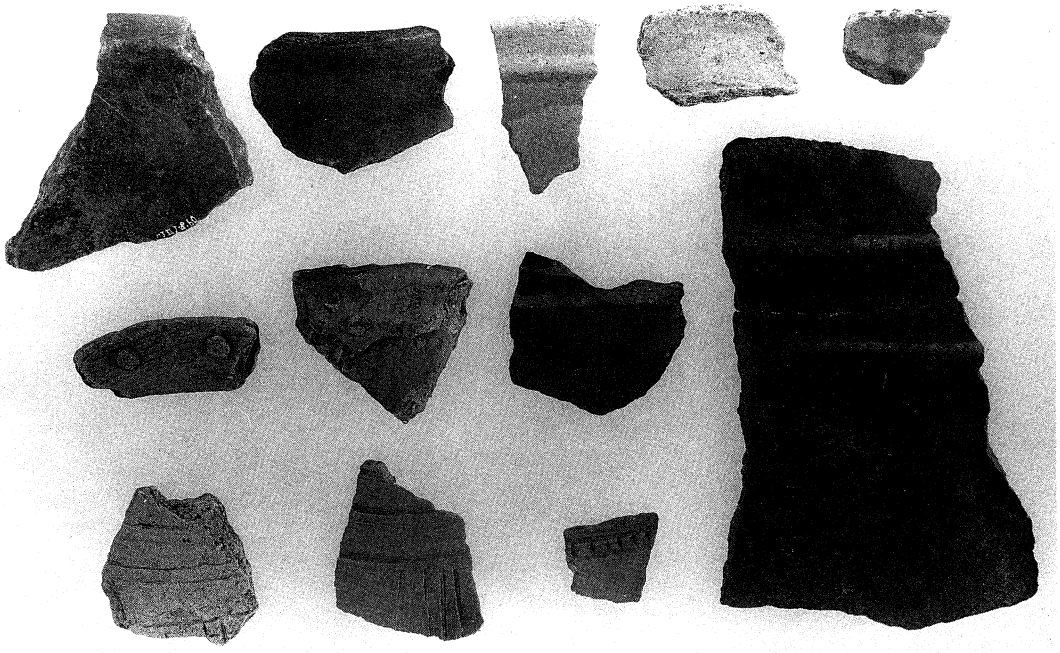


(1) 縄文時代の石器（刀剣形石製品・管玉）

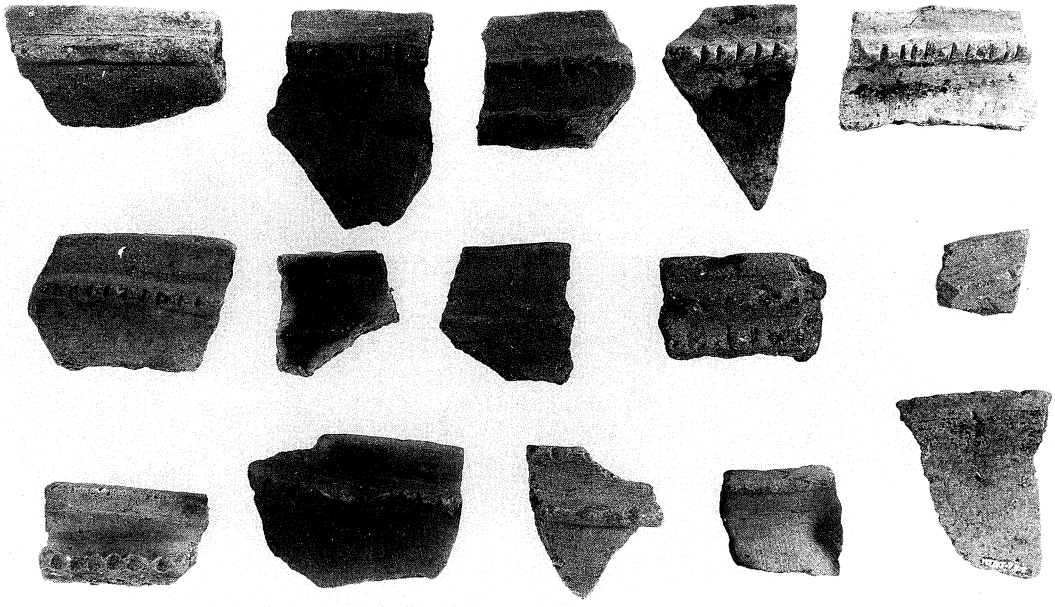


(2) 縄文時代の石器（表採遺物）

図版15

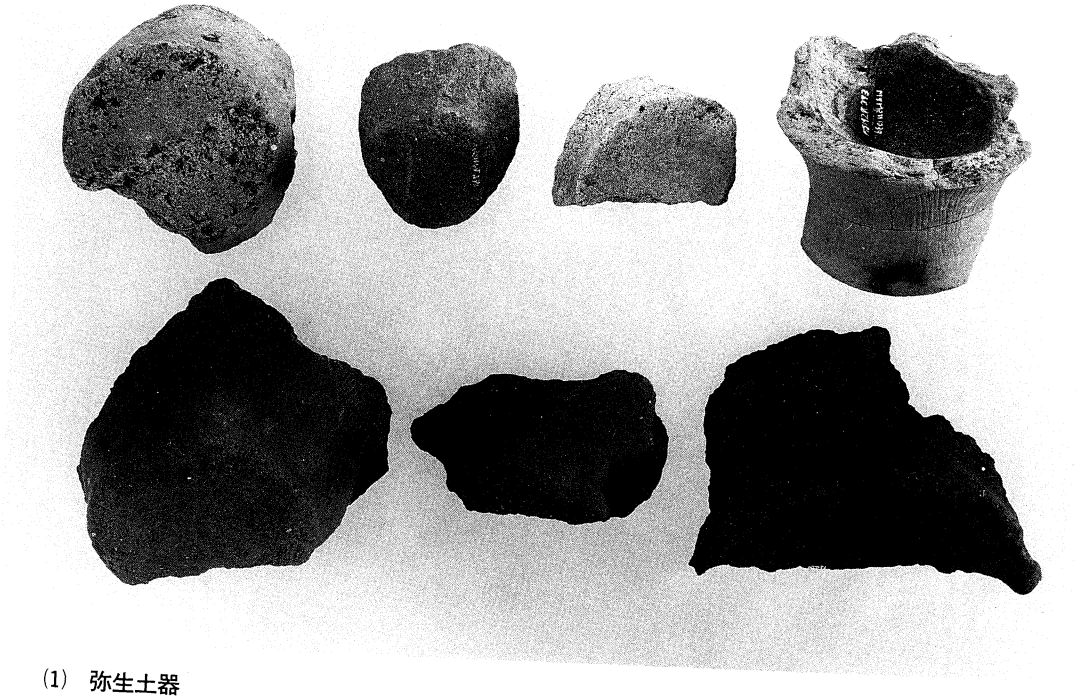


(1) 弥生土器



(2) 弥生土器

図版16



(1) 弥生土器

宮 地 前 遺 跡

昭和63年12月 5 日　印刷
昭和63年12月10日　発行

編　著　　橘　　昌 信
発行所　　別府大学付属博物館
874-01　別府市北石垣82

印刷所　　佐伯印刷株式会社
大分市古国府1155の 1

賀川光夫文庫

宮　地　前　遺　跡

— 大分県大野郡大野町 —

1 9 8 8

別府大学付属博物館

賀川光夫文庫

目　　次

1章　立　地 …… 3
　1．歴史的環境 …… 3
2章　調　査 …… 5
3章　層　位 …… 8
　1．基本層序 …… 8
　2．土層の対比 …… 11
4章　遺物の遺存状況 …… 13
　1．旧石器時代 …… 13
　2．縄文・弥生時代 …… 16
5章　旧石器時代の石器群 …… 22
　1．出土遺物 …… 22
　2．表採遺物 …… 27
6章　縄文時代の遺物 …… 31
　1．土　器 …… 31
　2．土製品 …… 46
　3．石　器 …… 47
7章　弥生時代の遺物 …… 62
　1．土　器 …… 62
8章　平安博物館調査地点の先土器時代石器群 …… 71
9章　まとめ …… 82

挿図目次

第1図　大野川流域の地形と宮地前遺跡 …… 3
第2図　宮地前遺跡周辺の遺跡分布図 …… 4
第3図　ほ場整備以前の地形と平安博物館の調査区位置図 …… 5
第4図　ほ場整備後の地形と別府大学による調査区位置図 …… 6
第5図　調査区（グリッド）配置図と土層断面図の位置 …… 7
第6図　宮地前遺跡土層柱状図 …… 8
第7図　各調査区（グリッド）土層断面図 …… 9・10
第8図　土層対比図 …… 12
第9図　旧石器時代遺物の分布状況（H-9） …… 14
第10図　土層断面と旧石器時代遺物の垂直分布（H-9、東より投影） …… 15
第11図　旧石器時代遺物の分布状況（J-8、J-9、J-10） …… 17・18
第12図　土層断面と旧石器時代遺物の垂直分布（J-8、J-9、J-10、北より投影） …… 19・20
第13図　遺構平面図（J-8） …… 21
第14図　旧石器時代遺物実測図 …… 23
第15図　旧石器時代遺物実測図 …… 25
第16図　旧石器時代遺物実測図 …… 26
第17図　旧石器時代遺物実測図 …… 27
第18図　表採遺物実測図 …… 29
第19図　表採遺物実測図 …… 30
第20図　縄文土器実測図 …… 32
第21図　縄文土器実測図 …… 33

第22図　縄文土器実測図 …… 34
第23図　縄文土器実測図 …… 35
第24図　縄文土器実測図 …… 36
第25図　縄文土器実測図 …… 37
第26図　縄文土器実測図 …… 38
第27図　縄文土器実測図 …… 39
第28図　縄文土器実測図 …… 40
第29図　縄文土器実測図 …… 41
第30図　縄文土器実測図 …… 42
第31図　縄文土器実測図 …… 43
第32図　土製品実測図 …… 47
第33図　打製石斧実測図 …… 52
第34図　打製石斧実測図 …… 53
第35図　打製石斧実測図 …… 54
第36図　横刃形石器・ノミ形石器・礫器実測図 …… 55
第37図　２次加工剝片・石鏃実測図 …… 56
第38図　安山岩製の剝片実測図 …… 56
第39図　敲石類実測図 …… 57
第40図　石皿実測図 …… 58
第41図　刀剣形石製品・管玉実測図 …… 59
第42図　表採遺物実測図 …… 60
第43図　弥生土器実測図 …… 63
第44図　弥生土器実測図 …… 64
第45図　弥生土器実測図 …… 65
第46図　弥生土器実測図 …… 66
第47図　弥生土器実測図 …… 67
第48図　弥生土器実測図 …… 68
第49図　I-7区東壁土層断面図 …… 71
第50図　I-7区石器・礫分布図 …… 72
第51図　先土器時代石器実測図 …… 74
第52図　先土器時代石器実測図 …… 75
第53図　先土器時代石器実測図 …… 77

図表目次

表１　旧石器時代遺物の出土深度 …… 13
表２　旧石器時代遺物の層序別組成表（第２・３次調査） …… 16
表３　細石刃の長幅比グラフ …… 24
表４　旧石器時代遺物観察表 …… 24
表５　旧石器時代遺物観察表 …… 28
表６　旧石器時代遺物観察表（表採遺物） …… 28
表７　縄文土器観察表 …… 43
表８　縄文土器観察表 …… 44
表９　縄文土器観察表 …… 45
表10　土製品観察表 …… 46
表11　第１次調査における層序別石器組成表 …… 48

表12　第２次調査における層序別石器組成表 …… 48
表13　第３次調査における層序別石器組成表 …… 48
表14　打製石斧の長幅比グラフ …… 48
表15　縄文時代の石器観察表 …… 59
表16　縄文時代の石器観察表 …… 61
表17　表採遺物の観察表 …… 61
表18　弥生土器観察表 …… 64
表19　弥生土器観察表 …… 66
表20　弥生土器観察表 …… 68
表21　Ｉ-７区出土遺物一覧表（平安博物館調査） …… 80・81

図版目次

図版１　(1)　調査区遠景（南より） …… 87
　　(2)　調査区遠景（北より） …… 87
図版２　(1)　遺物の出土状況（Ｈ-16グリッド） …… 88
　　(2)　遺物の出土状況（Ｈ-９グリッド） …… 88
図版３　(1)　Ｊ-８・９グリッド土層断面 …… 89
　　(2)　Ｊ-10グリッド土層断面 …… 89
図版４　(1)　旧石器時代の遺物（細石刃） …… 90
　　(2)　旧石器時代の遺物（スクレイパー、使用痕剥片） …… 90
図版５　(1)　旧石器時代の遺物（台石） …… 91
　　(2)　旧石器時代の遺物（剥片） …… 91
図版６　(1)　旧石器時代の遺物（表採遺物） …… 92
　　(2)　旧石器時代の遺物（表採遺物） …… 92
図版７　(1)　縄文土器（早期・後期） …… 93
　　(2)　縄文土器（晩期） …… 93
図版８　(1)　縄文土器（晩期） …… 94
　　(2)　縄文土器（晩期） …… 94
図版９　(1)　縄文土器（晩期） …… 95
　　(2)　土製品（土偶・紡錘車） …… 95
　　(3)　粘土塊 …… 95
図版10　(1)　縄文時代の石器（打製石斧） …… 96
　　(2)　縄文時代の石器（打製石斧） …… 96
図版11　(1)　縄文時代の石器（打製石斧） …… 97
　　(2)　縄文時代の石器（横刃形石器・礫器） …… 97
図版12　(1)　縄文時代の石器（石鏃・２次加工品） …… 98
　　(2)　縄文時代の石器（安山岩製の剥片） …… 98
図版13　(1)　縄文時代の石器（敲石類） …… 99
　　(2)　縄文時代の石器（石皿） …… 99
図版14　(1)　縄文時代の石器（刀剣形石製品・管玉） …… 100
　　(2)　縄文時代の石器（表採遺物） …… 100
図版15　(1)　弥生土器 …… 101
　　(2)　弥生土器 …… 101
図版16　(1)　弥生土器 …… 102

はじめに

大分県のほぼ中央を東流する大野川の流域は，先史時代から人々の主要な生活の舞台となっている所である。

別府大学付属博物館では，昭和54年から博物館の研究活動の１つとして『大野川流域における先史時代の調査研究』をテーマに，継続的な調査活動を継続している。この宮地前遺跡の発掘調査もその一貫として実施されたものである。

宮地前遺跡の学術調査は，昭和48年，平安博物館によって行われ多大な成果を挙げており，宮地前遺跡は当地域の縄文時代晩期および細石器文化の遺跡として重要視されている。

宮地前遺跡の周辺地域は，昭和50年代の初めに大規模なほ場整備事業が実施され，それ以前と同様に，畑地で，縄文・弥生時代，さらに旧石器時代の遺物が数多く採集された。

別府大学付属博物館で継続的に行っていた大野原台地一帯の分布調査で，この宮地前遺跡周辺についても数度の表面採集を実施した。その後，遺跡の広がり，文化層の層位的な把握などを目的に試掘および２回の本調査を行ったのである。

この調査では，ほ場整備事業による削平や盛り土，さらに土地所有者の作付けなどの関係で，宮地前遺跡の台地全体におよぶ遺物包含層の確認までには至らなかった。その意味では，さらに試掘調査や本調査を継続的に実施する必要のあることを痛感している。今回の調査によって，今後の宮地前遺跡調査の新たな指針を得ることができたので，機会を作り再度調査を試みたい。

1章　立　　地

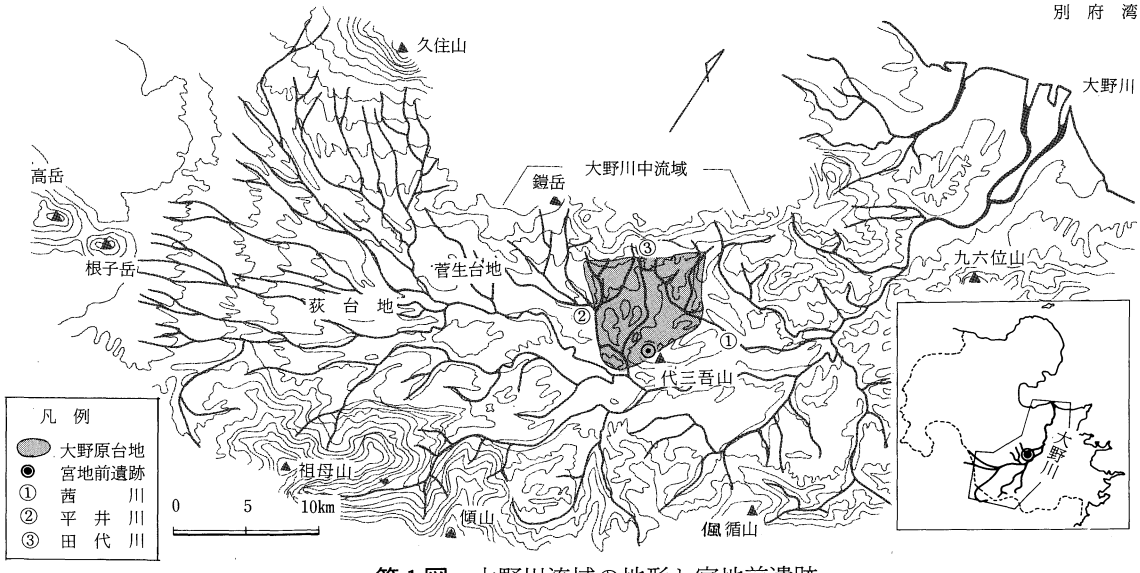
大野川中流域の北側に位置する大野町は，その南半分に標高200～300mの凝灰岩台地が開けており，一般に「大野原」あるいは「大野原台地」と呼ばれている。この一帯は阿蘇山の噴火活動に伴う火砕流堆積物（A_{so}-4）が大野川の本流や支流により侵食されており，複雑な舌状台地が展開している。この台地上には火山起源による降下堆積物（テラフ）が厚く堆積している。（第1図）

大野原台地は茜川水系の北東部と平井川水系の南西部に大別できる。宮地前遺跡は平井川の支流である田代川の東側の台地に立地しており，その標高は約250mである。遺跡の所在地は大分県大野郡大野町大字片島字宮地前である。（第2図）

1. 歴史的環境

ここでは，宮地前遺跡の周辺に所在する旧石器時代から弥生時代の遺跡・遺物について簡単に触れてみる。

旧石器時代の遺跡では，駒方古屋遺跡第1・2地点（別府大学による調査）からはナイフ形石器やスクレイパーなどを含む，AT下位の石器群が出土し，松木遺跡（大分県教育委員会による調査）からはナイフ形石器や三稜尖頭器，片島道下遺跡（別府大学による調査）からはナイフ形石器や台形様石器，今峠遺跡（別府大学による調査）からは小形で幾何形をしたナイフ形石器や台形様石器などが出土している。旧石器時代の遺跡は，標高200～300mの大野原台地のほぼ全域に認められ，その数は発掘調査・試掘調査ならびに分布調査の結果，50個所を超えている。遺跡は特に

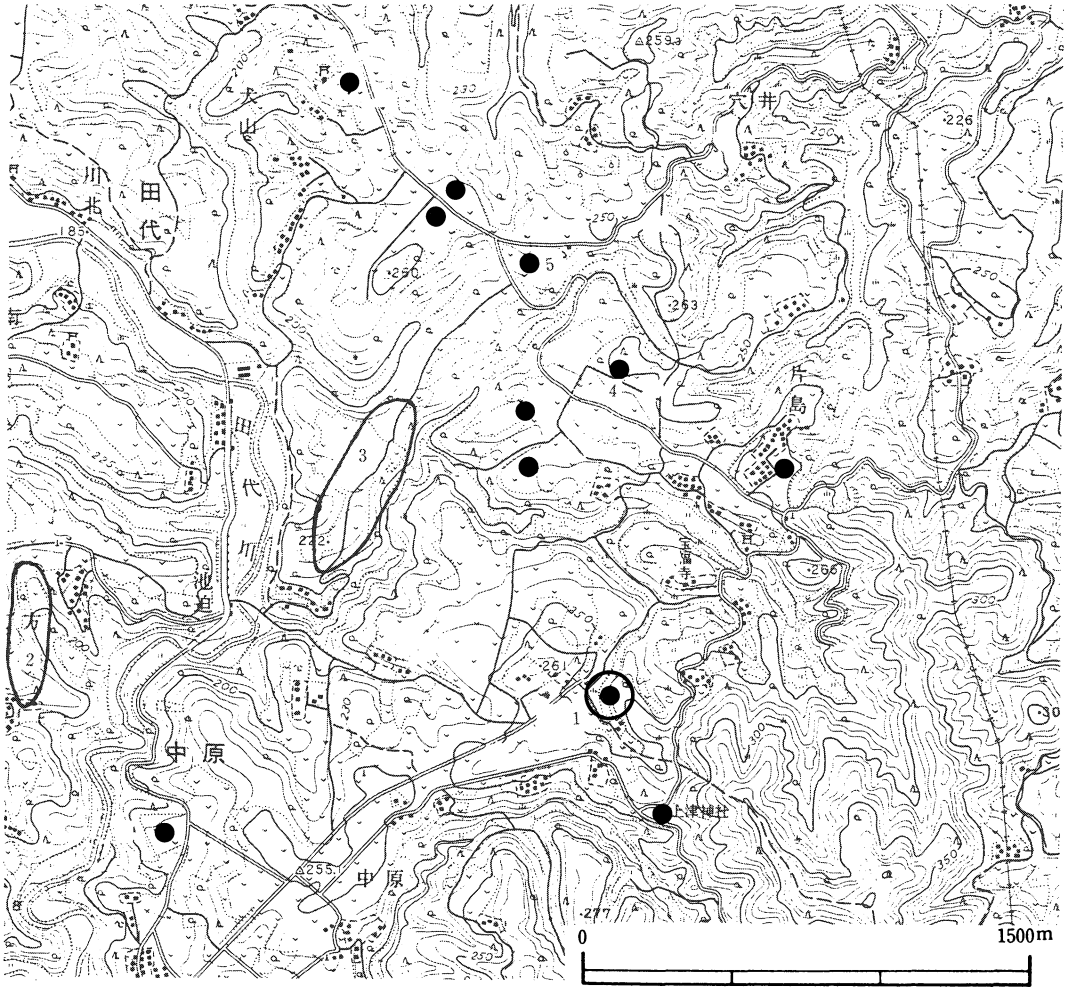


第1図　大野川流域の地形と宮地前遺跡

田代川を挟んで，その東西の両台地に集中する傾向がうかがえる。

次に縄文時代の遺跡としては，後期後半の三万田式土器単純期である駒方遺跡C地点（大分県教育委員会による調査）が挙げられる。出土遺物は土器のほか，偏平打製石斧・石包丁形石器・十字形石器・土偶の頭部などである。また，駒方遺跡B地点（大分県教育委員会による調査）出土のいわゆる刻目突帯文土器は当該地域における縄文時代から弥生時代への過渡的な様相を示していると思われる。

弥生時代の遺跡では，後期の集落遺跡である松木遺跡が挙げられる。この遺跡からは，安国寺式（壺）や大野川上・中流に特有の粗製甕と呼ばれる土器のほか，鉄器類，方格規矩鏡片が出土している。

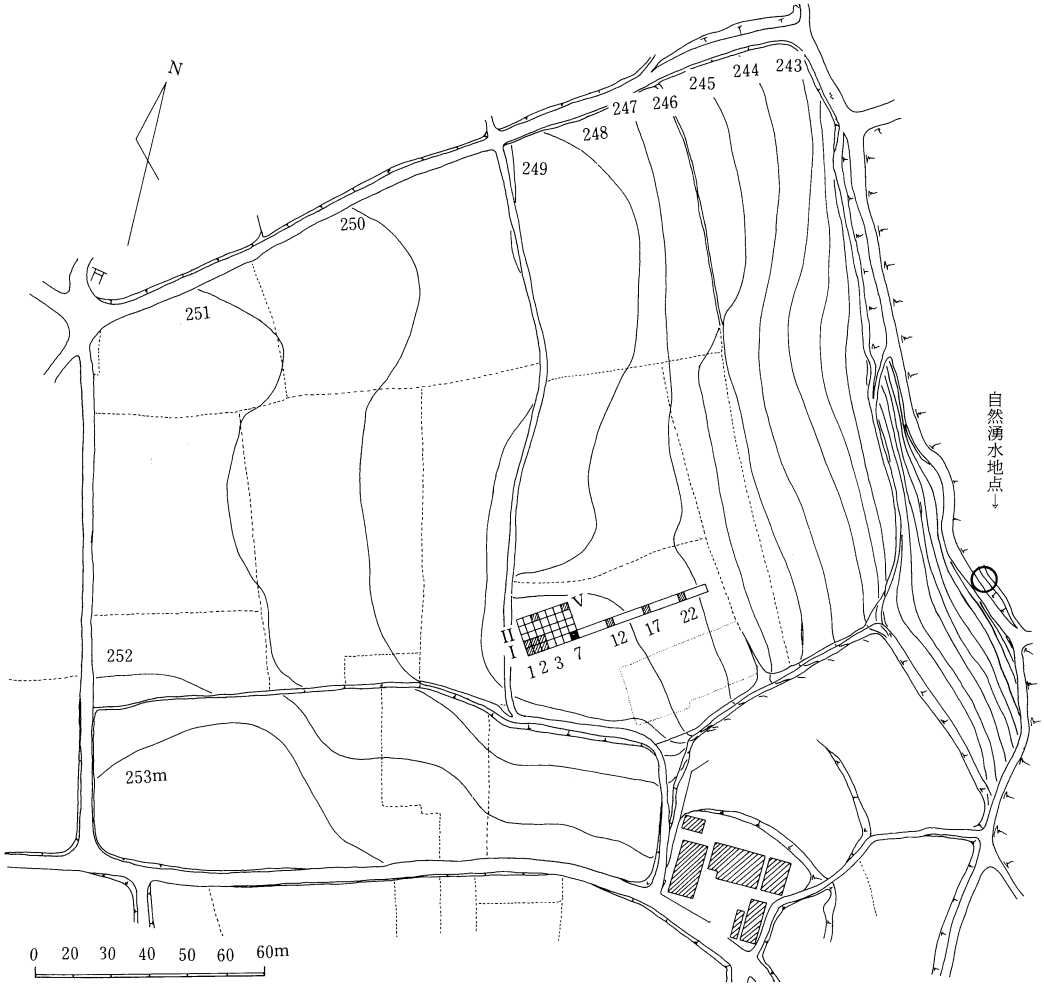


第2図　宮地前遺跡周辺の遺跡分布図　1.宮地前遺跡　2.駒方遺跡　3.松木遺跡　4.片島道下遺跡　5.今峠遺跡
●は旧石器時代の遺跡である。

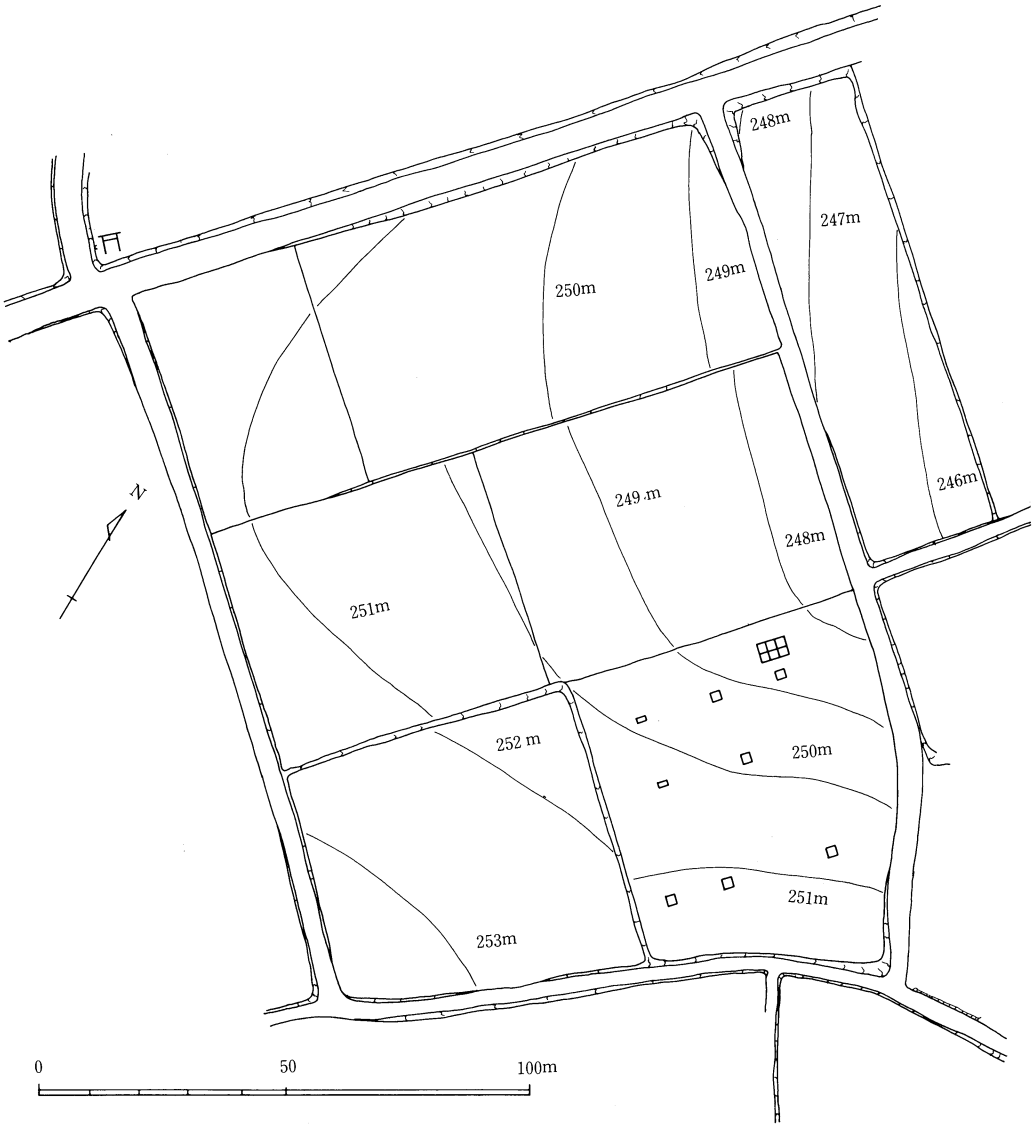
2章　調　　査

宮地前遺跡が所在するこの一帯の台地は，昭和40年代から，偏平打製石斧を始め縄文時代晩期土器片，それに流紋岩製の石片などが表面に露出し，地元の研究者や高校生などによって，盛んに表面採集が行われていた。

この宮地前遺跡の最初の学術発掘調査は，昭和48年，平安博物館によって実施された。この調査では，台地西側の標高249mから247mにかけての緩斜面に調査区が設定された。この調査区において，縄文時代の晩期の遺物包含層が確認され，縄文時代晩期土器，偏平打製石斧などが出土し，さらに竪穴住居跡と考えられる遺構が検出されている。また1-7区では，ローム層上部において細石器の文化層が確認され，細石核・スクレイパーなど旧石器時代終末の細石器



第3図　ほ場整備以前の地形と平安博物館の調査区位置図



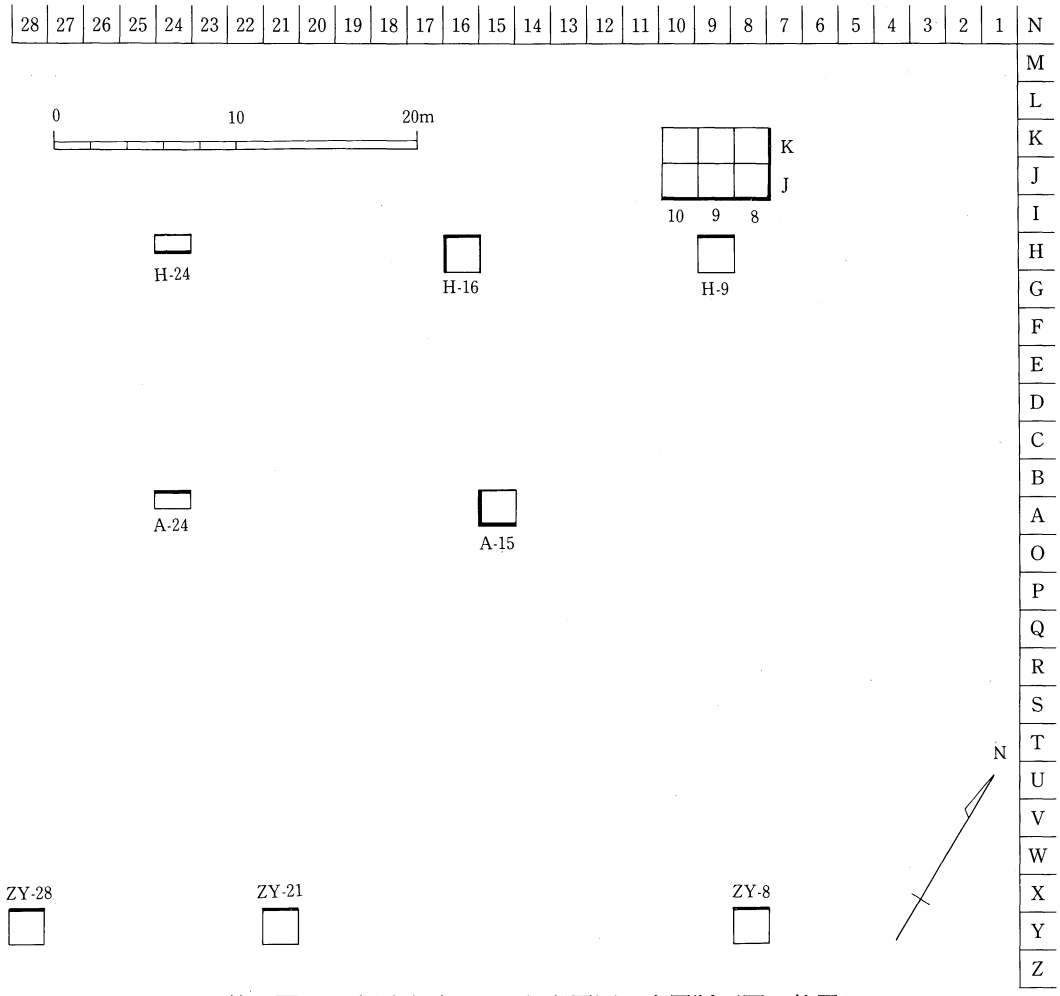
第4図　ほ場整備後の地形と別府大学による調査区位置図

文化の石器類が出土している。

宮地前遺跡のあるこの一帯は，昭和50年代の始めに大規模なほ場整備事業が実施され，それによって，台地の高い部分が削平され，その土は西側谷部に盛られ，道を新たに作るなどして，地形は以前と著しく変貌している。そのため，地形測量図から平安博物館の調査グリッドを正確におさえる事が困難なほど変化している。

このほ場整備事業によって，弥生時代・縄文時代の文化層の一部がこわされており，表面に今まで以上に遺物が露出していた。

別府大学付属博物館では，昭和55年から数度にわたる表面調査を実施して，遺物の収集に努めた。



第5図　調査区（グリッド）配置図と土層断面図の位置

58年8月24日から26日までの第1次調査では，宮地前遺跡の台地全体における遺物包含層確認を目的に，まず，それまでに資料が採集されている範囲のもっとも北側の標高251mの平坦地に，西側からZY-8・ZY-21・ZY-28の3つの2×2mの調査グリッドを設定し，文化層の確認と土層の堆積状況を観察した。

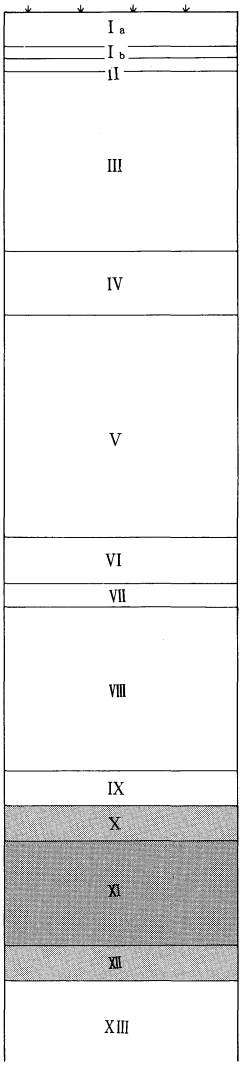
その結果，ZY-8ではローム層上部の耕作土・黒色土の堆積は非常に薄く，しかも遺物は全く出土しなかった。東側のZY-28は厚い堆積が見られ，弥生・縄文の遺物が若干出土したが，文化層の状況は良くなかった。

昭和59年11月7日から12日に6日間第2次調査を実施した。第1次調査区の約20m北側に2×2mのA-15と2×1mのA-24の2つの調査区と，さらに約12m北側に2×2mのH-9・H-16，それに2×1mのH-24の3つの調査区をそれぞれ設け，土層の堆積状況および文化層の確認を行った。

A-15では縄文時代，H-9では地表下約2.3mに細石器の文化層が，さらにH-24では弥生時代の包含層がそれぞれ確認された。

第3次調査は昭和61年12月17日から12月30日までの15日間行った。H-9の直ぐ北側に4×6mのJ・K-8～10の調査区を設定した。ローム層の直上までに約2mの堆積が見られ，弥生・縄文の両時代の遺物が出土したが，両者の文化層は層位的に明確でない。ローム層の上部において，細石器・スクレイパーなど旧石器時代の遺物が発見されたがその数は多くなかった。

第3次調査および第2次調査のH-16・H-24は，昭和48年の平安博物館の調査区と隣接するものと推測されるが，調査区掘り込みは別府大学付属博物館の調査区では検出されなかった。



第6図　宮地前遺跡土層柱状図

3章　層　　位

1．基　本　層　序

宮地前遺跡は1970年代後半より畑地改善事業が行われ、削平や盛土などで地形・層位にそれ以前と大きく変化している。遺跡の立地からも，南から北への傾斜が著しく，第1次調査区および第3次調査区では，その堆積状況に大きな差異が見られた。

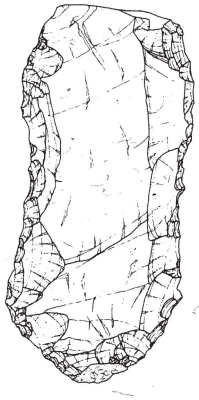
ここでは第3次調査区の土層断面を基本層位として表示しておく。

Ⅰa層　茶褐色土層　耕作土。

Ⅰb層　明黄褐色土層　わずかにブロック状に残るのみである。

Ⅱ層　黄褐色土層　やや硬質で，堆積状況は全体的に薄い。以上は畑地改造事業に伴う客土と考えられるものである。

Ⅲ層　暗褐色土層　客土が堆積される以前の旧耕作土と思われ，やや軟質である。また下位にいくに従い，粘質を帯びており，遺物が若干出土している。

Ⅳ層　黒褐色土層　軟質土層である。全体的に撹乱を受けており，Ⅴ層との境は，はっきりしない。縄文後・晩期，弥生中期の遺物を含む。

Ⅴ層　暗茶褐色土層　縄文時代遺物，弥生時代遺物主要包含層。大野原台地全体に認知されている遺物包含層で，宮地前遺跡でも平均50～70cm程度の堆積状況をみる。上部（Va層）は少し粘質で下部（Vb層）に下がるにつれ黒味を帯びてサクサクとしてくる。遺物は縄文・弥生時代遺物が混在し，上部に集中する。弥生時代遺物の方が比較的下位に包含されていることから撹乱をうけていると思われる。